

奈良の神社

春日大社（奈良市春日野町）

平城京の守護のために創祀され、第一殿は茨城県の鹿島神宮、第二殿は千葉県の香取神宮、第三、四殿は大阪府の枚岡神社から、それぞれ春日の地に迎えられた神々が祀られている。中でも武甕槌命は一足早く東の御蓋山の頂上に降臨し、やがて奈良時代の神護景雲二年（七六八）、藤原氏の血を引く女帝、称徳天皇の勅命により、左大臣藤原永手らが現在地に四所の神殿を創設したのが始まり。以来、国家鎮護の社として、また藤原氏の氏神としても有名で、古くは春日大神社、春日神社、春日社と呼ばれてきた。藤原氏の氏寺興福寺との関係も深く、神仏習合期の平安中期に当社祭神は法相擁護の神として仰がれ、のちには興福寺衆徒の強訴に際し、神木を動座したことも度々であった。

本殿四棟は一間社妻入向拝付春日造の典型で国宝建造物。宝物類には古神宝・祭器・舞楽面・樂器・装束・武具・文書・絵画など国宝・重要

文化財に指定されているものが多数ある。

御蓋山全域の山林部と、社頭から西方、飛火野、雪消の沢一帯の芝原、若宮おん祭の御旅所から一の鳥居に至る参道の地帯を含む平野部が境内に含まれ、これら全域は国指定の史跡となっている。

手向山八幡宮（奈良市雑司町）

以前は東大寺八幡宮と呼ばれ、東大寺の鎮守であった。奈良時代、聖武天皇が大仏を造営した時に、宇佐八幡神を東大寺大仏守護神として勧請。天平勝宝二年（七五〇）二月に、八幡神を迎え神仏習合の形となり、その後、東大寺僧侶も事あるごとにその神助を仰ぎ、東大寺の守護神として深く崇敬された。鎌倉時代の建長二年（一二五〇）に北条時頼によって現在地に遷座された。宝庫と境内社の住吉神社本殿は重要文化財に指定。

氷室神社（奈良市春日野町）

社伝によると、平城遷都に際して氷室や氷池を春日野の吉城川上流に作り、和銅三年（七一〇）七月二十二日に氷室明神を御蓋山麓の下津岩根宮に祀ったのが創祀とされる。正倉院宝

物の『東大寺山堺四至図』には、吉城川上流に「氷池」が記され、菩提川には「氷室谷」という地名も見える。

御蓋山の西麓では氷室の祭祀が行われ、毎年四月一日より九月三十日まで平城宮に氷を献上した。近年、冷凍水業界によって五月一日に献氷祭が行われている。当日は神前に花氷やコイの結氷、氷柱などが供えられ、舞殿で舞楽も奉納される。

率川神社（奈良市本子守町）

大神神社の境外摂社。推古天皇元年（五九三）二月、大三輪君白堤が勅命によって奉斎したと伝わるが、最古の記録は『続日本紀』の天平神護元年（七六五）八月の条に率河社云々とあるため、これ以前から創祀されていたことになる。

六月十七日に行われる例祭は『神祇令義解』に「率川社の祭なり。三枝（ユリの古名）花をもつて酒樽を飾る祭。故に三枝という」とあり、当日はユリの花で酒樽を飾り祭典を行うのでゆり祭の名がある。

本殿は一間社春日造で、三殿が障壁によって繋がれている。中殿の姫神をはさんで、左右の御殿には御父神と御母神が、まるで姫神を擁護する

ように鎮座するので子守明神と呼ばれ、地名の
本子守町の起りとなっている。

漢国神社（奈良市漢国町）

社名は韓国、または勘興、漢郷とも記された。
『大三輪神三社鎮座次第』に推古天皇元年（五
九三）に大三輪君白堤が勅を奉じて春日邑の率
川と坂岡に社を建て、媛蹈鞰五十鈴姫命と大
物主命を祀ったとある。歴代神主の大三輪氏に
よつて祀られてきたが、平安末期以降衰微し、春
日大社の末社となつて興福寺の支配を受けた。
しかし近世には南都三十一町のほか、油坂・三
条・芝辻村が祭祀に預かり猿樂奉納など庶民の
祭礼として盛況を呈した。

本殿は桃山時代の三間社流造檜皮葺。境内に
は日本で初めて饅頭を作り奈良饅頭の元祖と伝
わる林浄因やその子孫林宋二等を祀る林神社
がある。

奈良豆比古神社（奈良市奈良阪町）

祭神は春日大社との関係が深く、古くは奈良
坂春日社と呼んでいたようで、石灯籠にも春日
社と刻まれているものがある。中央に祀られる平
城津彦神（奈良豆比古神）は奈良山の神といわれ

る産土神と思われる。向かつて右側の施基親王
（志貴皇子）は天智天皇の第七皇子で光仁天皇
の父。春日皇子と号し、のちに春日宮天皇と追
号される。左側の春日王は志貴皇子の第二皇子
で矢田原太子と号し、土俗矢幡神という。白壁
王（光仁天皇）と兄弟である。宝龜二年（七七
一）に施基親王を奈良山春日離宮に祀ったのが
始めだとある。

十月八日の宵宮に奉納される翁舞は国指定重
要無形民俗文化財。クスノキの巨樹は県指定天
然記念物。

夜支布山神社（奈良市大柳生町）

大柳生の氏神で、『三代実録』に貞觀元年（八
五九）九月、霖雨（長雨のこと）にあたり止雨を
祈った社として二十七社の中に記されている。水
の神・祈雨の神として信仰されてきたことがうか
がえる。口伝では元は現在地の南六〇〇呎の上
出集落に鎮座したのを、中世に立磐神社鎮座の
標高三三〇呎の境内に遷座したという。

当社には一年交代で集落の長老の家に神様の
分霊を迎える「廻り神明」という珍しい行事が伝
えられており、七百年の伝統をもつ大柳生の太
鼓踊り（県指定無形民俗文化財）が奉納され

る。

摂社の立磐神社は巨大な陽石を神体とし、柳
生町の天乃石立神社とともに古代の巨石信仰
を物語る。本殿は、春日大社の第四殿を、延享
四年（一七四七）に移したもので、重要文化財。

天乃石立神社（奈良市柳生町）

標高三三〇呎の山中にあり、社殿はなく、神
体は扉の形をした花崗岩の巨岩で前伏磐と前立
磐・後立磐との二つに割れている。前立磐は高さ
六呎、幅七・三呎、厚さ一・二呎あり、全体が扉
の形をしている。伝説によると、神代の昔、高天
原で手力雄命が天岩戸を引き開けたとき、力あ
まつてその扉石が虚空を飛来し、この地に落ちた
のだという。巨岩をもつて神霊の宿る依代とする
古代人の自然信仰から創祀された古社として興
味深い。柳生藩代々の崇敬が篤く、柳生宗厳が、
柳生新陰流の剣の道を上泉伊勢守秀綱より伝
授され無刀の極意を悟ったといわれる剣の奥の院
でもある。

戸岩谷には約七呎四方ほどの中央から二つに
割れる一刀岩と呼ばれる巨岩がある。この岩には、
柳生宗厳が修行中に天狗と試合を行い、その時、
宗厳が一刀のもとに天狗を斬り捨てたと思つた

が、刀はその場にあつた巨石を二つに割つていたという伝説がある。

都祁水分神社（奈良市都祁友田町）

『延喜式』祈年祭祀詞に「水分に坐す神等の前に白さく、吉野・宇陀・都祁・葛木と御名は白して」とあり、大和高原から流れ出す木津川上流の布目川や大和川上流の初瀬川の水を司る神である。もとは、当社より三^ノ南方の小山戸カモエ谷の都祁山口神社の社地にあつたので下宮とも呼ばれる。『水分大明神垂迹記』には伊勢度会郡の人が御裳濯川の霊水を木壺に入れて大和国境に來た時、霊水が白竜となつて飛昇し、一つは宇陀水分神として鎮まり、一つは都祁水分神として小山戸左高山に鎮まつたという。

本殿は室町期の造営で重要文化財。

往馬大社（生駒市老分町）

生駒山頂を真西に望む竜田川の西岸に位置する式内大社で、正式には往馬坐伊古麻都比古神社という。天平二年（七三〇）の『大倭国正税帳』に「往馬神戸稻式百老拾玖束、云々」とあり、大同元年（八〇六）の『新抄格勅符抄』にも神戸三戸とあることから、奈良時代からすでに祀ら

れていた由緒ある神社であることがわかる。

また平安朝の書物である『北山抄』や『元要記』、『龜相記』等には「火燧木神」の記載が見られ、伊古麻都比古神、伊古麻都比賣神は古くから火の神としても尊ばれていた。わが国最大の祭祀であり、歴代天皇の即位の大祀である大嘗祭に用いられる火燧木は、代々往馬大社より献上したもので、今上陛下の大嘗祭にも、橿原神宮で行われた紀元二千六百年祭にも当社の火燧木が使用された。このような歴史の元に、毎年十月の体育の日の前日に執り行われる御例祭（火神祭）は壮大な火祭として、市内近郊はもとより遠方からも多数の参拝者があり、また古くから朝廷の深い信仰を受けてきた。

高山八幡宮（生駒市高山町）

富雄川上流の東方に鎮座する。創祀について『和州寺社記』には、天平勝宝元年（七四九）十二月十八日、東大寺へ宇佐八幡を勧請した時、平群郡で奉迎したという『続日本紀』卷十七の記事をあてて「そのかりの社今にあり、末社も三社まします。山内は方三町、里人氏神とあがめ奉る」とある。中世にはこの地の土豪鷹山氏の武神として尊崇された。

本殿は室町時代末期の建築で三間社流造檜皮葺で当時の特色を残す。また「上棟 元龜三年（一五七二）壬申今月吉日」から嘉永四年（一八五一）に至る修理紀年月日を示す棟札二十枚とともに重要文化財である。

龍田神社（生駒郡斑鳩町龍田）

風雨を鎮め水難、疫病を防ぐ神と、楓、桜等の四季を司る神を祀る。崇神天皇の代に年穀の凶作が続いた時、自ら卜占をもつて占い、天神地祇を「朝日日照處、夕日日陰處」龍田小野である龍田山の聖地に鎮座した。聖德太子（当時十六歳）が法隆寺建立を企て、橘の京から来て平群川（竜田川）の辺りに伽藍建設地を探し求めた時、太子は椎坂山で白髪の老人に顕化した竜田大明神に会い、まだらばと（斑鳩）で指示してもらった地を法隆寺建設地とした。聖德太子は法隆寺建立と同時に御廟山南麓の地に鬼門除神として竜田大明神を移し祀ったという。その後、産土神として莊嚴なる祭儀が執り行われた。法隆寺は龍田神社の社務を管理してきたもので、神社の由緒、祭礼、神田等法隆寺の記録に出ている。

龍田大社（生駒郡三郷町立野南）

祭神の天御柱神、国御柱神は、伊邪那岐・伊邪那美二神の子神である風神、志那津比古神・志那津比売神の別名。二神はそれぞれ天地自然を支える風の霊、風を司る神として『日本書紀』巻第二十九に、天武天皇四年（六七五）四月四日「風の神を龍田の立野に祠らしむ」とある。また『延喜式』の龍田風神祭の祝詞には、数年続きの五穀不作がありト事を行うと、龍田の立野に宮を祀るならば五穀を豊にするとの託宣があったとある。『日本書紀』によると、天武天皇は四月と七月に都合十九回、持統天皇は十六回遣使奉幣している。現在も七月には風鎮大祭を執り行っている。

薬園八幡神社（大和郡山市材木町）

『続日本紀』の天平勝宝元年（七四九）十一月二十五日の条に「於南薬園新宮」とあり、平城京の南、梨原にこの宮があったことになる。梨原の地はもと広大な薬園のあった所である。八幡大神の分霊を新宮内の神殿に奉斎し、薬園の名を冠して命名されたのが創始である。翌年に今のお旅所の地、清澄荘薬園に遷座され、延徳三年（一四九一）には現社地に鎮祀された。聖武天皇

天平年間に悪疫が流行して諸民の多くを苦しめたが、天皇は深く憂慮し諸国の神祇に幣を奉じて祈祷し、宇佐八幡大神の託宣を承って平城京南の薬園の地、塩の庄の野山に生ずる薬草を湯薬として疫民に与えたところ、治ったという。これより奈良朝の施薬院は起こり、典薬寮の薬園はここから始まったとされる。

賣太神社（大和郡山市稗田町）

祭神は稗田阿礼命、副祭神は猿田彦神、天鈿女命。古くから三社明神として信仰を集めていた。稗田環濠集落内の東南部に鎮座する。この地は、古代豪族である稗田猿女君の邸のあった所と伝えられる。『日本書紀』巻第一に、猿女君は遠祖天鈿女命とあり、稗田阿礼はその一族である。稗田阿礼は記憶力に優れ、天武天皇の命で帝紀・旧辞を暗誦したことでも高く、のちの和銅五年（七一二）に太安萬侶がこれを書き表したのが『古事記』である。

矢田坐久志玉比古神社（大和郡山市矢田町）

『大和志』に矢落大明神と称すとある。矢落とは、饒速日命の天降りの時、天磐船から三本の矢を射てその落ちたところに宮居したとの伝によ

つたものという。矢田の地名はこれによる。

春日造の本殿と末社の八幡神社社殿は重要文化財。天磐船の故事から、大空の守護神と崇められ、楼門には木製のプロペラが奉納されている。特殊神事の綱掛祭は一月八日、筒粥占祭は二月一日に行われる。

糸井神社（磯城郡川西町結崎）

糸井とは本来結崎やその付近一帯を総称した郷名と見られ、繊維紡績関係の栄えた地域で、糸井郷の豪族が糸井造である。社伝によると機織りの技術集団の神とある。結崎や糸井の地名からも糸に関係した氏族が祀った神社ではないかと思われる。本殿は春日大社の古社殿を移築したと伝えられ、室町時代頃の春日曼茶羅を所蔵する。境内の慶長八年（一六〇三）の石灯籠には「大和結崎大明神」と刻まれている。また拝殿には、雨乞のなでも踊りと西瓜の切り売りをする姿が描かれた天保十三年（一八四二）の絵馬や、慶応四年（一八六八）のおかげ踊りの絵馬がある。

鏡作神社（磯城郡田原本町八尾）

鏡類を製作鑄造することを業としていた鏡作

部がこの地一帯にわたって住居し、御鏡（天照国照彦火明命）並びに遠祖（石凝姥命）を氏神として奉祀した神社。古来、鏡鑄造物元祖の神として尊崇信仰されている。崇神天皇の代に、この地で内侍所の神鏡を鑄造した時、像鏡を天照御魂としてここに祀ったのが始めて、この神鏡の制作者は石凝姥命の子孫の鏡作氏である。

津島神社（磯城郡田原本町祇園）

神仏分離以前は祇園社と称した。『奈良県磯城郡誌』に、尾張の平野氏が当地に藩邸を構えるにあたって旧縁のある神社号を移して津島神社と改称したとある。天治二年（一一二五）の棟札に建立の文字があったとされる。領主平野家は累代崇敬篤く、年々米一石五斗を寄進したという。古来は旧暦六月七日より七日間盛大に五穀豊穰悪疫退散の祈願が行われ、境内で浄瑠璃も催されたという。現在は、七月第三土・日曜の二日間、祇園祭を行っている。

村屋坐弥富都比売神社（磯城郡田原本町蔵堂）

祭神の三穗津姫命は高皇産靈命の姫神で、大物主命が国譲りをした時、その功に報いるためと大物主命の二心がないようにという願いから、自

分の娘を贈ったという神話に出てくる神で、俗に森屋明神という。天武天皇元年（六七二）壬申の乱の時、村屋神が神主のにり移って軍の備えに對する助言があったという。この功績により神社として初めて位を天皇から賜ったと『日本書紀』に記されている。

多神社（磯城郡田原本町多）

正式名は多坐弥志理都比古神社。祭神の神八井耳命は神武天皇の第二皇子で、この地を本拠地とした古代豪族の多氏の祖神である。『延喜式神名帳』では式内大社として登載され、四時祭の項の相嘗神七十一座の中に「多社二座」とあり、臨時祭では二座とも祈雨神祭・名神祭に預かっていた。久安五年（一一四九）の『多神社注進状』には当社の旧名を春日宮として多氏の奉斎する神で、『古事記』の編者である太安萬侶は多臣蔣敷の孫と記している。

在原神社（天理市櫛本町）

祭神の在原業平は阿保親王（平城天皇の皇子）の五男で、兄の行平と共に在原姓を名乗り臣籍に入った。在原神社には在原寺跡がある。在原寺は阿保親王が平安朝のはじめ、承和二年

（八三五）に創建したという説と、元慶四年（八八〇）創建という説がある。明治初年までは本堂・庫裏・楼門などがあったが、本堂は大和郡山市若槻町の西融寺に移されて廃寺となり、在原神社が残った。

在原業平は歌人として有名で、『伊勢物語』の主人公とされている。また業平と、昔契りを交わした井筒の女との物語が謡曲の「井筒」となっている。境内にはこの「井筒」に謡い込まれている夫婦竹がある。

和爾下神社（治道宮）（天理市櫛本町）

『延喜式神名帳』に「和爾下神社二座」とあり、一座は天理市に、もう一座は大和郡山市に鎮座している。『大和志』には「一座は櫛本村に在り、治道天王といい、近隣五村共に祭祀に預る。一座は横田村に在り、下治道天王といい、近隣十一村共に祭祀に預る」とある。『東大寺要録』には神護景雲三年（七六九）、東大寺領の櫛庄に灌漑すべく河川を造り替え、道路をも改修したとある。この森を治道の杜といい神社を治道宮とあった。石灯籠にも「治道宮天王」（元和元年銘）とあり、鳥居の古額にも「治道宮、黄檗南源」とあった。

本殿は桃山様式の建築で、重要文化財に指定されている。昔は細男座・田楽座・御輿座の三つの宮座があった。

石上神宮（天理市布留町）

祭神の布都御魂大神は出雲の国譲りの際に武甕槌神が帯びていた神剣で、神武天皇東征の折、武甕槌神が熊野の高倉下命に降して邪神の毒氣にあつた神武天皇を蘇らせた霊剣である。崇神天皇七年に宮中より現地、石上布留高庭に移し、土中深く鎮め石上大神と称え祀つたのが当宮の創めと伝えられ、以後代々、物部氏が祭祀をした。

明治初期までは本殿がなく、国宝建造物である拝殿の正面に禁足地と称するところがあり、磐座を設けて神籬を立て、石玉垣で囲まれていた。これが高庭の地である。大正二年（一九一三）に禁足地後方に本殿を建立、明治七年（一八七四）、発掘された神剣を御神体として奉斎した。歴代朝廷の崇敬が特に篤く、神宮の宝庫は大和朝廷の武器庫ともなっていた。また石上神宮は神器を揺り動かして人間の魂振り（生命力の振起し）を行うことや、鎮魂の祭儀が信仰のひとつで、「布留社」とも呼ばれる。

七支刀（国宝）、鉄盾二枚、禁足地出土品や須恵器、太刀など多くの社宝がある。

大和神社（天理市新泉町）

祭神の大国魂大神と八千戈神は共に大国主神の異名で、大国魂大神は国土経営に貢献し、万物の生成化育を司る神、八千戈神は武勇に勝れた神である。祭神は上古伊勢神宮に坐す天照大神とともに宮中に奉斎されていたが、崇神天皇が神威を畏み、天照大神を倭の笠縫の邑に、大国魂大神を倭国穴磯邑に遷座したのが当社の創祀と伝えられる。大同元年（八〇六）の『新抄格勅符抄』に天平勝宝元年（七四九）から神護景雲元年（七六七）にかけて大和をはじめ諸国に神封三百二十七戸とあり、当時伊勢神宮に次ぐ神封があてられていたことは朝廷の篤い崇敬の程がうかがえる。

戦艦大和にはこの大和神社の御魂を祀っていた。

大神神社（桜井市三輪）

『日本書紀』に「崇神天皇の代に疫病が流行し、多くの民が亡くなった。天皇の夢枕に大物主神が現れ、大田田根子にわが御前を祀らしめると

国安らかに治まるとの神告があつた。茅渟県の陶邑（大阪府堺市の辺り）から大田田根子を探し出して、神主として三諸山に大三輪の神を祀らしめたところ、疫病は止み、天下泰平となった」とある。『大三輪鎮座次第』には、「古来宝倉なく、唯三箇鳥居あるのみで、奥津磐座は大物主命、中津磐座は大己貴命、辺津磐座は少彦名命」とあり、本殿は無く、奥津・中津・辺津の磐座を神の依代として、神体山である三輪山を拝む古来の信仰形態を今日も継承している。

現在の拝殿は寛文四年（一六六四）に徳川四代將軍家綱が再建したもので、重要文化財に指定。また拝殿の奥正面にある三ツ鳥居は、三輪鳥居とも呼ばれ古来当社の特色の一つとされる。三つの明神型鳥居を一体に組合せた形式であり、重要文化財に指定されている。

檜原神社（桜井市三輪）

現社地は、崇神天皇の時代、宮中より初めて天照大御神を豊鍬入姫命に託して遷し「磯城神籬」を立て、祀つた「倭笠縫邑」とされる。大御神遷幸後もその跡を尊崇し、檜原神社として引き続き祀り、「元伊勢」と今に伝えられている。『万葉集』等に「三輪の檜原」と数多く詠まれ、山の

辺の道の歌枕ともなっている。西に続く台地は、大和国中を一望することができる。

穴師坐兵主神社（桜井市穴師）

巻向川の北側に鎮座する。もとは弓月岳上にあつて上社とも称したが、天明二年（一七八二）の『穴師神社由来書』には応仁の乱の際に焼失したので、下社の穴師大兵主神社の現社地に遷座したとある。社伝によれば垂仁天皇二年の鎮座という。有名な野見宿彌の相撲の説話が当社にある。

等彌神社（桜井市桜井）

上ツ尾社と下ツ尾社があり、上ツ尾社が本社で大日靈貴尊を祀り、下ツ尾社では品陀和氣命と天兒屋根命を祀る。社記によると元は鳥見山中にあつたが、天永三年（一一一二）五月に大雨があり、山崩れのため、社殿が谷に埋没した。この年悪疫が流行したので、九月五日、山の尾の現在の場所に遷座したとある。鳥見山は神武天皇神話の伝承地であり、旧社地は「庭殿」「白山」「祭場」などの伝説地でもある。能登宮とも称し、中世は多武峰妙楽寺の支配下であつた。

談山神社（桜井市多武峰）

祭神の藤原鎌足と中大兄皇子が「大化の改新」の談合を行ったのが多武峯である。皇極天皇四年（六四五）飛鳥板蓋宮大極殿にて蘇我入鹿を誅戮し、中央統一国家および、文治政治の完成という歴史的偉業を成し遂げた。天智天皇八年（六六九）、鎌足薨去の際、天皇より藤原の姓を賜り、大織冠内大臣という人臣最高の位を授かつた。

墓所は初め摂津国阿威山に造られたが、父の死を知らず唐の国にあつてもつぱら仏教を学んでいた長男定慧が、天武天皇七年（六七八）に帰朝し、弟不比等と相談の上、父生前の特にゆかりの深い多武峯に改葬した。さらに、十三重塔婆、講堂を建立し、これを妙楽寺と称し、のちの大宝元年（七〇一）、方三丈の神殿を建て、鎌足の像を安置した。これが当社の創祀である。藤原鎌足と中大兄皇子とが大化の改新の相談をした本殿裏の「かたらい山」の故事から「談山神社」と名づけられた。

十月には嘉吉祭という特殊神事が斎行される。また四月と十一月には蹴鞠の行事が行われる。秋には、境内が美しい紅葉に包まれる。

笠山荒神社（桜井市笠）

笠山三宝荒神、または笠の荒神と称し、笠の中垣内の標高四八〇呎の山中にある。明治の神仏分離で竹林寺から本殿を笠山山頂に遷座、かまどの神として信仰が深い。笠山三宝荒神は、初瀬の川より天理の布留川に至る笠山のすそ野、山の辺の道に散在する社寺の三宝を守る神として栄えたという。

墨坂神社（宇陀市榛原区萩原）

「記・紀」崇神天皇の条に、悪病流行、人民死に絶えようとした時、『日本書紀』では神人が、『古事記』では大物主神が天皇の夢の中に現れて、墨坂の神に赤色の盾矛を、大坂の神に黒色の盾矛をもつて祀れとの教えに従ったところ、悪病止んで民平穏となったとある。もとは伊勢街道の宇陀市榛原区西峠付近の天の森に鎮座していたと伝わる。明治までは六所権現とも天野宮とも称していた。旧跡に渡行地があり、例祭日に渡行地から本社へ時代行列、太鼓台が列をなし、本社で例祭を行う。

八咫鳥神社（宇陀市榛原区高塚）

『続日本紀』卷三慶雲二年（七〇五）に「八咫

鳥の社を、大倭国宇太郡に置きて之を祭らしむ」と記され、すでに奈良朝以前に創祀勅祭されていた。また、後の神武天皇が、熊野の山中が嶮しく道を失った時に、鴨建角身命が八咫鳥となり、神武天皇を大和へ導いたとされている。『宇陀郡史料』には明治七年以前は山城国京都下鴨神社の鴨県主が古来より毎年一度参詣するか、奉幣使を送るとある。

なお日本サッカー協会のシンボルマークは八咫鳥で、境内には平成十四年に同協会等が必勝祈願を行った際に崇敬者より寄贈されたモニュメントがある。

龍穴神社（宇陀市室生区室生）

宇陀川・名張川・木津川の源流となる室生川に鎮座し、祈雨・止雨の神として、古来、国家的にも崇敬の篤い神社であった。背後の山中にある岩窟は、竜王の籠る洞窟として竜穴と呼ばれ、古くから請雨祭祀が行われた所。『日本紀略』の弘仁九年（八一八）七月十四日の条に、山城国貴布禰神社と大和国室生龍穴神社等の処に雨を祈るとある。種々の記録から当社の神への雨乞が盛んであったことがうかがえる。

宇太水分神社（宇陀市菟田野区古市場、宇陀市榛原区下井足）

宇陀山地の水分神社は宇陀川上流の菟田野区古市場、榛原区下井足、菟田野区上芳野に鎮座しているが、どれが本来の式内大社宇太水分神社であるか古来諸説があつて断定しがたい。宇陀川および芳野川を遡れば伊勢と宇陀・吉野の境界にそびえる標高一二四九^ミの高見山がある。高見山は美しい円錐形の分水嶺で宇陀の各地からも望まれ、古代人が神体山と仰いだと考えられる。

菟田野区古市場の宇太水分神社本殿は棟木に元応二年（一三二〇）の墨書銘がある鎌倉時代末期の隅木入春日造の建築物で国宝。また摂社の春日神社・宗像神社の本殿も重要文化財。

阿紀神社（宇陀市大字陀区迫間）

延喜式内社で『大和志』には神戸明神と称すところあり、『皇太神宮儀式帳』には宇太阿貴宮、『倭姫命世記考』には神戸大神宮とある。この地は神戸の地であったと見られる。創祀については、倭姫命の神幸の伝承によるとの説がある。『皇太神宮儀式帳』『倭姫命世記考』によると、「倭姫命が天照皇大御神の御霊を奉じて、大和の美和の

御諸宮から宇太の阿貴宮、云々、五十鈴川上に斎き祀つた」とあり、大和国宇多の秋宮に遷り四ケ年間奉斎とある。

門僕神社（宇陀郡曾爾村今井）

青蓮寺湖に繋がる曾爾川の西岸、屏風岩・兜岩・鎧岩を背後に望み鎮座している。十月の当社祭礼日には、各大字の当家が人身御供の名残の「頭甲」（神饌として、柿と餅を串で芋茎（里芋の茎）に挿し、頭上に鶏頭の花を挿して着飾った乙女の形と犬の舌の形を模した餅等）が神前に供えられる。また当日奉納される獅子舞は県の無形民俗文化財に指定。

境内の御葉付イチヨウは県の天然記念物である。

御杖神社（宇陀郡御杖村神末）

三重県境に近い神末川西岸の通称斎宮に接して鎮座。古棟札に上津江之御宮（天文二十三年）・国津大明神（慶長十八年）・上之宮九頭大明神（寛永十八年）・牛霊天王社（延宝四年）があり、大和・伊賀国境に鎮座することから、『延喜式』臨時祭式にある畿内十所の疫病の社として、国津大明神と牛頭天王を祀ったとも考えら

れる。当社が倭姫命の杖を祀ることから、御杖村の村名が付けられた。境内のスギの樹齢は六百年と伝えられている。

檀原神宮（檀原市久米町）

明治二十三年（一八九〇）三月、檀原神宮の社号が宣下されて官幣大社に列せられ、同四月二日勅使参向のもと、御鎮座祭が行われた。旧来その所在が明らかではなかった神武天皇陵や檀原宮跡について、この地方篤志の人々の考証と保存の運動がきっかけとなり、神武天皇を祀る神社の創立が実現の運びとなった。創建当時、規模は小さく施設も不十分であったが、昭和十五年、紀元二千六百年記念大祭斎行の記念事業として、境域約十五万坪におよぶ整備拡張事業が行われた。最も重要な祭典は二月十一日の紀元祭であり、盛大に執り行われる。

畝火山口神社（檀原市大谷町）

創祀は明らかではないが、『新抄格勅符抄』に「平城天皇大同元年（八〇六）神封一戸を寄せられた」とあり、大同以前の創建と思われる。もとは山麓の西の尾にあったが、のちに山頂に遷祀し、さらに昭和十五年十二月、現在地に遷座、

郷社より県社になった。

七月二十八日、二十九日に行われる夏祭りは「でんそそ祭」という。「でんそそ」とは、社頭で太鼓をデندنソソと打った音からくる俗称と考えられる。昔から夏やせの子供は、この日に綿入れの着物を着せて参ると治るといわれている。

耳成山口神社（檀原市木原町）

標高三三九呎の耳成山八合目に鎮座。創祀の年代は明らかではないが、天平二年（七三〇）の『大倭国正税帳』（正倉院文書）に「耳梨山口神戸云々」とあることから奈良時代にはすでに創祀されていたと思われる。延喜式の祈年祭、月次祭の祝詞に「山口に坐す皇神等の前に白さく、飛鳥・石村・長谷・畝火・耳無と御名は白して、：」とあるように大和の山口の神が籠られる神奈備山として崇敬された。

飛鳥坐神社（高市郡明日香村飛鳥）

『日本書紀』には、朱鳥元年（六八六）七月に天皇の病氣平癒祈願のため、和歌山の国懸神社、大阪の住吉神社とともに、飛鳥の四社に幣が奉られたとあり、当時すでに四座の神を祀っていたことを示している。『日本紀略』には、天長六年

（八二九）三月に、神託により甘南備山から現在の鳥形山へ遷祀されたとある。鎌倉時代以降、衰微の状況が続いたが、正平元年（一三四六）八月、後村上天皇より金五十枚を賜り、中ノ社が再建された。江戸時代に入り、植村家政が高取藩主に封じられると、当社がその城の鬼門にあたることから、特に深く信仰され、元禄頃には境内に末社五十余を有した。享保十年（一七二五）に本社・末社ともに里からの火災に遭い、社殿の大部分が焼失したが、安永十年（一七八一）に再建された。

二月第一日曜日（従来は旧正月十一日）におんだ祭が行われ、豊年を予祝する夫婦和合の神事として名高い。

廣瀬神社（北葛城郡河合町川合）

佐保川・初瀬川・飛鳥川・曾我川・葛城川・高田川等、大和盆地を流れるすべての河川が大和川一点に合流する地に祀られていることから、祭神は水の守り神で、山谷の悪水を良水に変え河川の氾濫を防ぐ神であり、また水田をうるおし、五穀の豊穰を守ることから、朝廷をはじめ万民の食物を守る御膳神である。崇神天皇九年、広瀬の河合の里長に神託があり、一夜で沼地が陸地

に変化し橘が数多く生えたことが天皇に伝わり、この地に社殿が創建されたという(当社縁起)。

石園座多久虫玉神社 (大和高田市片塩町)

当社は、第三代安寧天皇片塩浮穴宮跡といわれる浄地に祭祀され、第十代崇神天皇の勅祭に預り、延喜の制には大社に列し、月次・新嘗の案上官幣に預った式内社である。祭神に関して『姓氏録』には「神魂命の子多久都玉命」とある。古来より竜王宮と呼び、干ばつの年には雨乞い祈願(一社相伝)が行われ、祈雨神、農耕神としても崇敬された。

葛木坐火雷神社 (葛城市笛吹)

通称、笛吹神社。当社の創建は神代とも神武天皇の代とも伝えられているが詳かではない。大嘗祭で用いられる波々迦木は古来より笛吹神社から献上されていた。境内には日露戦争の戦利品として明治四十二年(一九〇九)に奉献された大砲がある。天香山命の子孫、笛吹連が代々この地に住み、祖先神に奉仕し、この土地を笛吹と称えた。その為か、正式な葛木坐火雷神社というよりも笛吹神社として人々から親しまれている。現在は火雷大神が火の神であることから、火

を扱う職業や消防関係の崇敬が篤く、また天香山命の神徳からフルート・尺八等楽器の上達を願う人の崇敬も篤く、全国から奉納演奏に訪れている。

鴨都波神社 (御所市宮前町)

本社付近一帯は鴨都波遺跡と呼称され、当社はその遺跡の上に鎮座している。境内地を中心に弥生時代の土器や石器、竪臼などの農具が多数出土し、高床式の住居跡も発掘されており、弥生時代の中期初め、鴨の一族が水稻農耕を営み神社付近に住みついた事を表している。当社の主祭神は『古事記』に、鴨都味波八重事代主神と記されており、「代主」は田の神の古語、「鴨都味波」は鴨の水端、すなわち鴨の水辺の意、「八重事」はしばしばの折り目という形容で、つまり「鴨の水辺で折り目ごとに祀られる田の神」という神名である。金剛山に源を発する葛城川と葛城山に源を発する柳田川が合流するこの地が、灌漑に最も適した地として、田の神を鎮め祀ったのに始まる。事代主神を奉斎してこの地を領地としていた鴨王の娘が、神武、綏靖、安寧の三代の天皇の皇后となった由縁から、祭神は皇室の守護神とされ、宮中八神の一つとして崇拝されてき

た。

一言主神社 (御所市森脇)

明治の『神社明細帳』では祭神は事代主大神と幼武尊とあるが、『大和志料』では一言主大神に雄略天皇を配祀するとある。一言主大神は『古事記』『日本書紀』の雄略天皇の条に対面の説話があり、雄略天皇が葛城山で狩りをした時、天皇と同じ姿で顕現し、鹿狩りとともに楽しんだ神とあり、悪いことも、良いことも一言に言い放つ神とある。そのためか里人には俗に「いちごんさん」と親しまれ、一言の願いであれば何事でも聞きとどけてくれる神として信仰されている。十一月末頃に色づく境内の乳垂れイチョウは有名である。

高天彦神社 (御所市高天)

創祀は明らかではないが、すでに『新抄格勅符抄』の宝亀十年(七七九)に大和国に神戸四戸をあてられている。太古から神々の住み給うところと伝えられる「高天原」も、この高天の台地である。当社の背後には美しい円錐状の神体山(白雲の峯)がそびえているが、社殿ができる以前は、この神体山の聖林に祭神を鎮め祀っていた。

高鴨神社（御所市鴨神）

金剛山の東山麓に鎮座。金剛・葛城の山麓は古代の大豪族、鴨族の発祥の地で、当社はその鴨族が守護神として斎き祀った社である。その末流は全国に分布し、その地で鴨族の神を祀った。また京都の上賀茂神社をはじめ、全国に分布している多数の鴨社も、すべてこの地に源を発するもので、当社は全国の鴨神社の総社である。

本殿は三間社流造の室町建築として国の重要文化財に指定。境内には十八の摂末社があり、東神社の本殿は県指定文化財。四月末から五月初旬にかけて咲く「日本さくら草」が有名である。品種・鉢数とも日本随一。

御霊神社（五條市靈安寺町）

宇智郡（現五條市の一部）に分布する御霊神社の本宮。祭神の井上内親王は聖武天皇の第二皇女で光仁天皇の皇后であつたが、『続日本紀』宝龜三年（七七二）三月癸未と同年十月辛酉の条によると、巫女に天皇を呪詛させたとの罪で皇太子の他戸親王と共に廃され、宇智郡に幽閉、同六年四月二十七日、母子ともに死去した。この事件は藤原百川の謀略によるものとの噂が当

時の世間に流布された。同七年（七七六）九月と翌年冬に天災地変がしきりに起こり、皇后や皇太子の怨霊と恐れられたため、靈安寺が創立されて両者の霊を弔った。同時期に当社が創祀された。

御霊神社（五條市中之町）

嘉禎四年（一二三八）に靈安寺の御霊神社より分祀したと伝わる。古くは福田宮とも呼ばれた。境内社として本殿右手に早良親王を祀る早良神社、左手に他戸親王を祀る他戸神社がある。本殿並びに境内社二棟の建築は室町時代の文明四年（一四七二）の建築で、重要文化財に指定。本殿は一間社春日造で厚板段葺である。昭和五十五年（一九八〇）の解体修理以前は檜皮葺であつたが、解体時に現寸引付図が発見され文化庁の手で建立当初の姿に復元された。

吉野神宮（吉野郡吉野町吉野山）

明治二十二年（一八八九）、内務省告示で官幣中社吉野宮創立、同二十五年の御鎮座祭には明治天皇の勅使が参向した。また後村上天皇の勅命で刻まれ吉水神社（吉水院）に祀られていた後醍醐天皇の尊像が、五百五十年を経て吉野

神宮の本殿に遷座され、創祀された。明治三十四年には官幣大社に昇格。大正七年（一九一八）に吉野神宮と改称。現在の社殿は昭和七年に造営が完了した。当神宮一円の台地は丈六平と称し、流造の本殿、入母屋造の拝殿、切妻造の神門などが美しく調和し、都に思いを寄せた後醍醐天皇の心を偲び、京都に向かって、北向きに建てられている。

吉水神社（吉野郡吉野町吉野山）

元吉水院と称し、白鳳年間に役行者の創立と伝える吉野修験宗の僧房であつた。明治の初めまで修験道の勢力と共に発展してきたが、明治維新の神仏分離の際、神社と改まったものである。もとより当社は南朝の元宮であり、ここに後醍醐天皇を祭神とし当時天皇の忠臣であつた楠木正成、吉水院宗信法印を合祀している。寺院造で神社というより、明治以前のように吉水院という方がふさわしいのかもしれない。『吾妻鏡』文治元年（一一八五）十一月十七日の条に源義経吉野山入山の記事があるが、当院に潜居したと伝えられ、義経潜居の間などがある。文禄三年（一五九四）三月には豊臣秀吉の花見の本陣となつた。

なお、書院は初期書院造の代表的傑作で、重要文化財。

吉野水分神社 (吉野郡吉野町吉野山)

『延喜式神名帳』には大社に列し、四時祭式には祈年祭に奉幣物へ馬一匹を加えられ、臨時祭式では、祈雨祭神八十五座の中に「吉野水分社一座」として記されている。また『続日本紀』には文武天皇二年(六九八)四月二十九日に雨を祈るため馬を奉ったと記されている。元水分神社跡と伝えられる場所から拝む山は神体山特有の円錐形の山で、東へ音無川、西へ秋野川、南へ丹生川、北へ象川(喜佐川)と流れる四水流の分水嶺として水分神の鎮座地にふさわしい地形である。本殿は高い石段の上に建立され中央春日造の主殿に左右流造の三殿が一棟につながる特有の造りで、桃山時代の特徴をもつ重要文化財。

金峯神社 (吉野郡吉野町吉野山)

吉野山の尾根沿いの奥千本入口付近、この辺りの最高峰で標高八五〇^ミ程の所に鎮座している。吉野山から山上ヶ岳に至る一連の山脈を総称して金峯山というが、古来この山は金脈のある山と信じられた。祭神の金山毘古神は金鉱護持

の地主神として、また生物の枯死を防ぐ神として崇敬されてきた。創祀は明らかではないが、『文徳実録』仁寿二年(八五二)十一月九日の条に「大和国金峯神に特に従三位を加え、翌三年五月十日名神大社に預る」とある。

浄見原神社 (吉野郡吉野町南国栖)

南国栖の吉野川右岸断崖上に鎮座する旧村社。毎年旧正月十四日伝翁の末裔の人々によって国栖奏が奉納される。国栖奏とは石押分の末孫の翁筋の人々が朝廷の大儀に御贄を献じ、歌笛を宮中の儀鸞門外で奏した美しい故事に則ったもので、舞翁二人、笛翁四人、鼓翁一人、謡翁五人の計十二人で奏上する。岩壁に建つ神殿は、神明造一間社。

丹生川上神社 (吉野郡川上村へ上社へ、同東吉野村へ中社へ、同下市町へ下社へ)

『延喜式神名帳』の「丹生川上神社」は名神大社として一座一所であるが、現在、吉野川上流の丹生川上神社上社、高見川流域の丹生川上神社中社、丹生川流域の丹生川上神社下社の三社に比定されている。寛平七年(八九五)六月二十六日の『類聚三代格』卷一神社事の太政官

符丹生川上雨師神社界地禁制の事に「人声の聞えざる深山吉野丹生川上に我が宮柱を建てて敬祀せば、天下のために甘雨を降らし霖雨を止めんとたまえり」とある。『延喜式』臨時祭の条に京都の貴船神社とともに、「幣帛の外、祈雨に黒毛馬、止雨に白毛馬を加えられる」とある。それ以来、祈雨・止雨の奉幣遣使は記録にあるだけでも、室町時代までに五十件にもおよぶ。五穀の生命を司る雨水の神を祀る丹生川上神に対し、歴代朝廷の崇敬は篤かった。

天河神社 (吉野郡天川村坪内)

通称、天河大弁財天社。役行者が霊山大峯の開山の拠点としたので大峯本宮ともいう。大峯開山の折、大峯蔵王権現に先立って勧請され、大峯連山の一峰弥山(一八九五^ミ)に大峯の鎮守として祀られたのが天河大弁財天の創祀と思われる。弥山から北西に延びた尾根の先端で、天ノ川の曲流する地点にあるため、山と水の信仰を根源とした弥山への神の信仰に始まり、これに弁財天信仰が習合したものと考えられる。古来、弥山神社を奥の宮、坪内の当社を口の宮と称した。日本三弁天のひとつで、平安時代以後高僧貴顕の参詣が多く、特に南朝の崇敬が厚かった。

中世末頃弁財天信仰が盛んになると各地に末社が勧請された。また能楽座の伝統でも名高い。芸道の神として尊崇されている。

荒神社 (吉野郡野迫川村池津川)

通称、立里荒神。海拔一二六〇[㊦]の荒神岳北の峯山頂に鎮座する旧村社。火産靈神は阿弥陀如来が本地仏で、当社を三宝荒神とも称し、火の神、竈の神として全国より参詣者があり、特に火を使う職業の人々の信仰を集めた。当社縁起では嵯峨天皇の弘仁七年(八一六)、弘法大師が高野山に大伽藍を開基するにあたって伽藍繁榮、密教守護を祈り、一枚の板に三宝荒神の御像を描いて本尊とし、十七日の間荒神を祀り、檀上の鬼門に荒神の社を勧請して高野山の大伽藍が成ったという。以来高野山と結ぶ神仏習合の宮として明治初年まで宝積院と称していたが、明治の廃仏毀釈で宝積院を廃し、仏体など池津川へ移して荒神社と称して今日に至る。

池神社 (吉野郡下北山村池峯)

明神池に鎮座する旧郷社。下北山村全村の氏神として往古から池峯大明神・池大明神と呼ばれた。明神池は水面九[㊦]、湖面は清く澄み、鬱

蒼なる周囲の山々を写し、四隣静寂である。白蛇(竜神)の住む池と伝えられ、ヌシのいる神池と恐れられた。ヌシとは弁財天で白蛇と信じられ、これは水の神が地上では水辺の蛇となり、天に昇ると雨を降らせると見られていた。当社はこの霊池をそのまま神の示現とみる原始的信仰によるものと考えられる。大正十三年の『郷社池神社記』では白鳳年間、役行者が大峯入峯の時、創祀されたとある。元は池峯村字辻堂にあったが、元和年間(一六一五〜二四)に現在地に遷座された。

玉置神社 (吉野郡十津川村玉置川)

標高一〇七六[㊦]の玉置山に鎮座する旧郷社。創祀は明らかではないが、『玉置山縁起』には熊野本宮と同じく崇神天皇創祀とある。熊野三山の奥の院とされ、一時は別当院高室院を中心に七坊十五ヶ寺がこの境内に点在し、社僧数百人を擁し修験道の一大勢力となった。大峯七十五[㊦]摩十番の行場であり、古来十津川郷の総鎮守であった。吉野熊野の山々の彼方に熊野灘を眺める神域には県の天然記念物である樹齢三千年を数える神代杉や常立杉、磐余杉などがそそり立っている。山頂付近の玉石社は祠がなく、杉木

立の中に地上に露出している玉石を神体としている。

社務所は元の別当寺高牟婁院を改装したもの。上段の間等をもつ書院風の建築で、各居間は杉の一枚板の極彩色の板襖をもつて仕切られていて、重要文化財。梵鐘は佐々木高綱の寄進と伝え梵字が刻まれており、応保三年(一一六三)の銘がある。

奈良の寺院

般若寺（奈良市般若寺町）

舒明天皇元年（六二九）に高句麗僧の慧灌が創建したと伝えられる。天平勝宝八年（七五六）の「東大寺古図」に伽藍が見え、その頃までに成立していたことは確か。寛平七年（八九五）頃に理源大師聖宝の弟子観賢が学問道場を開いて中興、平重衡の南都焼討ちで伽藍が焼失するも、鎌倉時代に西大寺の叡尊と忍性が再興した。国宝の楼門、重要文化財の経蔵はその時に再建された鎌倉建築である。高さ一四呎の十三重石塔（重要文化財）は宋の石工、伊行末の手になり、近年修理の際に奈良時代の銅造如来立像、鎌倉時代の金銅舍利塔・金銅五重塔・水晶五輪塔四基・箱入法華経などが発見された

西国薬師第三番札所、関西花の寺第十七番札所であり、コスモスの寺として有名。

東大寺（奈良市雑司町）

聖武天皇が夭折した皇太子基親王の菩提を弔

うため、神亀五年（七二八）に建立した金鐘寺に源を発する。天平十三年（七四一）、いわゆる国分寺・国分尼寺建立の詔が発せられると、金鐘寺は大和国の金光明寺にあてられ、国家鎮護の官寺となった。東大寺はこの寺院を前身としている。そのため金光明四天王護国之寺ともいう。

天平十五年（七四三）に聖武天皇は盧舎那大仏造願の詔を発し、紫香樂宮の甲賀寺に大仏鑄造の骨柱を建て始めたが頓挫。平城京に還都したのちの同十七年（七四五）に大仏の鑄造を再開し、天平勝宝四年（七五二）に開眼供養会が行われた。このころまでに七堂伽藍がおおむね完成。大仏鑄造と伽藍造営は国家組織の造東大寺司が担ったが、行基のまとめる大衆の勧進によるところも大きかった。また、寺務は良弁が担い、弟子の実忠がよく師の業を継いだ。天平勝宝六年（七五四）には鑑真和尚が大仏殿の前に設けられた戒壇で聖武上皇はじめ四百四十人余りに授戒して名実ともに国家寺院としての体裁が整った。斉衡二年（八五五）に盧舎那仏の頭部が地震で落ちたのを始めとして、天平建築の講堂・三

面僧房・西塔・南大門などが焼失または倒壊、さらに、平重衡による南都焼討ちにより法華堂・二月堂・正倉院などの一部堂宇を除いた伽藍の大半が焼失したが、重源が造東大寺大勧進となつて伽藍再建に奔走し、源頼朝をはじめ武家の協力もあつて復興が進められた。永禄十年（一五六七）に松永と三好の兵乱がおよんで大仏殿や戒壇院などの主要伽藍が焼け落ちたが、江戸時代の元禄期に公慶の勧進によつて再建されたものが今日まで伝わっている。

天平期に創建され鎌倉時代の増補が見事な法華堂、大仏様（天竺様）の代表的建築である南大門、京都方広寺の梵鐘に次ぐ巨鐘を吊るした鐘楼、世界最大の木造建築である大仏殿、良弁の開山堂、二月堂などがあり、いずれも国宝。四月堂、大湯屋なども重要文化財に指定されている。境内の正倉院は、現在宮内庁の管理であるが、聖武天皇の遺愛品などを伝え、校倉と板倉を併用した高床の正倉も国宝に指定されている。

※盧舎那仏坐像について

大仏殿の本尊は、正式には盧舎那仏あるいは毘盧遮那仏（像高一四・七三呎）という。現在の大仏は修理・補作された部分が多くを占め、奈良時代当初に造られた部分は、右脇から腹部を通り脚部へと広がる箇所や蓮華坐が中心である

が、特に台座の蓮弁各々には仏の世界（蓮華蔵世界）を表した当初の線刻画が残っていて貴重である。我々が目にする頭部と上半身の大半は、江戸時代の元禄四年（一六九一）に公慶上人の勸進によって、再興された時のものである。

奈良時代の大仏の顔貌は、台坐連弁の線刻画はもとより、ほぼ同時期に完成した大仏殿前の八角燈籠火袋に表された菩薩像や金銅誕生仏像（現在奈良国立博物館寄託）から、丸くふくやかな相であったことが推定できる。なお、誕生仏像は現存する古代の誕生仏の中で最大の遺品で、側面に正倉院宝物の装飾にも通じる線刻文様を施した金銅製の灌仏盤を伴っている。

興福寺（奈良市登大路町）

天智天皇八年（六六九）に中臣鎌足の病氣平癒のために妻の鏡女王が山背国山階陶原に堂を建立し、山階寺と名づけたのが起源である。その後、山階寺は飛鳥に移されて厩坂寺となり、さらに、平城京遷都に伴って藤原不比等が現在地へ移し、興福寺と改号された。平安時代には摂関家である藤原氏の庇護のもとに栄え、大和一円、さらには全国に多くの寺領を広げた。また、神仏習合により春日社を掌握し、平安時代後

期には僧兵たちが春日社の神威をかざして朝廷や比叡山延暦寺の僧兵と対立した。一方、寺は摂関家の子弟の受け皿となり、一乗院と大乘院の両門跡に分かれてともに多くの末寺や子院をかえた。

伽藍は平安初期までに完成して大寺院の偉容を誇ったが、平重衡による南都焼討ちによって全焼、のちに再建された伽藍も享保二年（一七一七）の大火で大きな被害を受け、さらに追い打ちをかけるように明治時代初期の廃仏毀釈により無住の寺と化した。しかし、江戸時代後期に再建された南円堂を中心に庶民の観音信仰が集まり、明治十五年（一八八二）に法相宗の大本山となり、寺勢が再興された。近年では伽藍も次第に整備されつつあり、往時の風格を取り戻しつつある。

応永二十二年（一四一五）再建の東金堂、応永三十三年（一四二六）再建の五重塔、承元二年（一二〇八）再建の北円堂、鎌倉時代建立の三重塔がいずれも国宝であり、大湯屋が重要文化財に指定されている。昭和三十四年（一九五九）建造の国宝館には数多くの国宝や重要文化財が収蔵されている。

また、南円堂は西国三十三ヶ所第九番札所、

東金堂は西国薬師第四番札所である。

称名寺（奈良市菖蒲池町）

鎌倉時代の文永二年（一二六五）に興福寺の学僧であった専英・琳英兄弟が常行念仏の道場として創建。当初は興福寺の北にあつたため興北寺ともいう。宝永元年（一七〇四）と宝暦十二年（一七六二）の大火で堂宇がごとごとく焼失し、享和二年（一八〇二）に今の本堂が再建された。

秘仏である本尊の光烟光仏は厨子入りの阿弥陀如来立像。同じく本尊の釈迦如来坐像は釈迦念仏道場である東堂、阿弥陀如来坐像は阿弥陀念仏道場である西堂から移されたもので、いずれも重要文化財に指定されている。境内の千体石仏群は松永久秀の多聞城に使われ、廃城とともに散乱していた石仏や墓石を第十九代観阿上人が集めたものという。

茶礼祖と仰がれる村田珠光が住して禅を学んだことから、独爐庵（通称、珠光庵）という茶室があり、毎年五月十五日の命日に珠光忌法要が営まれる。

伝香寺（奈良市小川町）

宝亀年間（七七〇～七八〇）に鑑真和上の弟

子思託が創建した実円寺が前身であるという。今の寺は天正十三年（一五八五）に筒井順慶の母である芳宗英大禅尼が順慶の菩提を弔うために泉契和尚を開基として堂宇を建てたことに始まる。以後、筒井氏の菩提寺となり、徳川家康より寺領百石が与えられた。墓所には筒井氏関係の墓石がある。

寄棟造の本堂は天正十三年の棟札があり、重要文化財に指定。本尊の釈迦如来坐像も桃山時代の作で、光背のホゾに「なら下御門大佛師宗貞作」の墨書がある。地藏堂に祀られた裸形地藏立像は鎌倉時代の安貞二年（一二二八）に尼妙法や唯心らによって発願された像であり、重要文化財。像内に願文・経巻・舍利・十一面観音小像・木造薬師如来坐像が奉籠されていた。

元興寺（奈良市中院町、芝新屋町）

蘇我馬子が飛鳥に建立した法興寺を前身とする寺院。平城京遷都に伴い養老二年（七一八）に法灯が移され、元興寺の名で新たに伽藍が建立された。平城京左京四・五条の六・七坊に南北五町、東西三町の広大な寺域をもち、七堂伽藍を誇る本格的な寺院であったが、室町時代の宝徳三年（一四五一）と江戸時代の安政六年（一

八五九）の火災で伽藍の大半が焼失し、現在は中院町の極楽院と称された元興寺と、東塔院と観音堂の系譜となる芝新屋町の元興寺に分かれる。極楽院の本尊は、奈良時代後半の三論学僧・智光が感得したという浄土変相図で、原本は宝徳三年（一四五一）に焼失したが、大型板絵本、厨子入絹本（いずれも重要文化財）などを伝えて、浄土三曼荼羅のひとつ智光曼荼羅という。

屋根の一部に行基葺の残る本堂（曼荼羅堂）と禅室は僧房の東室南階大坊を改築したもので、ともに国宝、東大寺西南院の門を室町初期に移築した四脚門の東門が重要文化財に指定。元興寺西小塔堂に安置されていたという奈良時代の木造五重小塔（総高五五〇・三センチ）も国宝である。禅室と本堂の天井裏で発見された印仏・摺仏・板絵・千体仏・柿経・祭文・塔婆など六万五千点あまりの庶民信仰資料が重要有形民俗文化財で総合収蔵庫にて展示公開されている。

芝新屋町の元興寺は観音堂と東塔院であるが、安政六年の火災により五重塔が焼失。今は境内に国史跡の塔跡が残る。

福智院（奈良市福智院町）

天平八年（七三六）に玄昉が開いた清水寺を前

身とし、西大寺の叡尊が再興したという。『沙石集』（一二八三年成立の仏教説話）に南都の靈驗あらたかな地藏尊を祀る寺と記される。室町時代は興福寺に属し、大乘院関係の菩提所となった。江戸時代には寺領三十石の朱印寺となり、明治以降は衰微したが、近年になって再び寺勢を取り戻し多くの参詣者を集めている。

本尊の地藏菩薩坐像は胎内に建仁三年（一二〇三）の墨書銘があり、一重裳階付き寄棟造の本堂は鎌倉時代の創建。境内には昭和五十八年（一九八三）に中国四川省産の大理石で造立された称名観音像も祀られている。

十輪院（奈良市十輪院町）

吉備真備の長男である朝野宿禰魚養が建立した寺院であると伝えられ、空海が留錫したともいう。『沙石集』に福智院とともに名が列せられ、地藏尊を祀る寺として早くから信仰を集めていたようである。一時、豊臣秀長に寺領を没収されて荒廃したが、徳川家康より寺領五十石を与えられて再興。国宝の本堂には珍しい石仏龕が生まれ、奥に地藏菩薩立像が祀られている。龕には十王像・聖観音像・不動明王像・多聞天・持国天・種字などが彫刻され、全体として重要文化

財に指定されている。本堂の近くには横穴式石室に似た祠をもつ魚養塚がある。

の中心となった。

誕生寺 (奈良市三棟町)

浄土宗の尼寺で、寺地が徳融寺と同様に藤原豊成の邸宅であったことから、中将姫の生誕地という意味で誕生寺の名がついた。境内には中将姫の産湯に使ったという誕生の井戸もあり、井戸端に江戸時代の二十五菩薩石仏が並ぶ。中将姫・豊成・紫の前(生母)の御殿が並置されたことから三棟殿とも称され、中将姫修道霊場の一院として信仰を集めてきた。毎年四月十三・十四日に浄土曼荼羅と中将姫真像が開帳される。

高林寺 (奈良市井上町)

融通念仏宗の尼寺。奈良時代、藤原豊成の屋敷跡に建てられた寺で、豊成の娘の中将姫はここで成人し、當麻寺に入って出家、法如尼となった。豊成は死後この地に葬られ、藤原家の興隆を祈って高林寺と名付けられた。平重衡の南都焼討ちで焼失したが再興、境内の豊成の廟塔(墳墓)を守って今日に至っている。また、桃山時代には数奇者の高坊一族が住み、茶湯等を楽しみ、奈良町の数寄者の一大サロンを形成、奈良町文化

徳融寺 (奈良市鳴川町)

元来は元興寺の子院で北方にあつたが、元興寺が土一揆で罹災したのち、天正十八年(一五九〇)に住僧の意順が現在地へ移したという。江戸時代初期、融通念仏宗に属して大念仏寺の末寺となつて以来、信仰を集め今に至る。

寺地は中将姫の父である右大臣藤原豊成の旧邸宅と伝えられ、本尊の阿弥陀如来立像は北条政子の念持仏であつたという。延宝五年(一六七七)に高林寺から移された豊成父子の供養塔という二基の宝篋印塔がある。

新薬師寺 (奈良市高畑町)

天平十九年(七四七)三月に光明皇后が聖武天皇の病氣平癒を祈願して七仏薬師像を祀り、実忠が東大寺の別院とした。創建当初は四町四方の寺域に南大門・中門・金堂・講堂・食堂・鐘楼・鼓楼・三面僧房・東西両塔を完備した七堂伽藍を誇っていたが、宝龜十一年(七八〇)に西塔落雷の火が金堂・講堂に延焼。これは太政官符により復興されたが、応和二年(九六二)の台風で金堂以下、多くの堂宇が倒壊。鎌倉時代に

解脱上人や明恵上人が復興に尽力し、現在の伽藍となった。

入母屋造の本堂が奈良時代後期の建立とみられ、国宝。切妻造四脚門の南門と東門、入母屋造の鐘楼などは鎌倉時代の再建。方一間の地藏堂は棟木に文永三年(一二六六)の墨書がある。これらはいずれも重要文化財。本尊の木造薬師如来坐像が檀像彫刻の代表作。周囲を護る塑像十二神将立像とともに国宝に指定されている。

寺は西国薬師第六番札所である。

白毫寺 (奈良市白毫寺町)

天智天皇第七皇子である志貴皇子の離宮を前身とする寺院と伝えられ、鎌倉時代には興福寺の良遍や東大寺の円照も一時住した。弘長二年(一二六二)より住持の道照が中国から持ち帰った「宋版一切経」の転読を開始したことにより、一切経寺とも呼ばれた。室町時代の明応六年(一四九七)に兵火で全焼したが、江戸時代の寛永年間に興福寺の喜多院から移植されたもの。境内に植わる県天然記念物の五色椿は江戸の

寛永年間に興福寺の喜多院から移植されたものといひ、東大寺開山堂の「糊こぼし」、伝香寺の

「散り椿」とともに三名椿の一つに数えられてきた。関西花の寺第十八番札所であり、ハギの寺としても知られる。

弘仁寺（奈良市虚空蔵町）

別名を虚空蔵寺ともいい、また俗に「高樋の虚空蔵さん」と呼ばれる。弘仁五年（八一四）に嵯峨天皇の勅願により建立したという。あるいは空海が小野篁の誓願をうけて大同二年（八〇七）頃に建立したともいう。寺域は独立丘陵の虚空蔵山に広がり、東大寺に収蔵される中世の絵図では山腹に立ち並ぶ堂舎が見える。虚空蔵山を修行道場とする寺院であつたのだろう。元龜三年（一五七二）に松永久秀の兵火を受けて堂宇の大半が焼失したが、本堂は半焼にとどまり、明星堂（観音堂）は火災を免れた。寛永六年（一六二九）に住僧の宗全法師によって本堂の修理が行われたが旧に復せず、現存の本堂は元禄九年（一六九六）に新築されたものである。

行事では、十三歳の子供の学業成就・厄除開運を祈る「十三まいり」が有名。

正暦寺（奈良市菩提山町）

正暦三年（九九二）に九条関白藤原兼家の子、

兼俊僧正が一条天皇の勅願を奉じて建立したという。隆盛期には僧房八十あまりをもつ大伽藍となり、真言宗と法相宗の顕密兼学の道場として栄えた。治承四年（一一八〇）の平重衡の南都焼討ちにより堂舎の大半が焼失。建保六年（一二一八）に中興開基の信円が再建し、室町時代には寺内で「菩提泉」という酒を醸造して寺勢を保ったが、康正年間（一四五五～五七）に兵火で全焼したのち、寺坊の多くは無住寺となった。慶長七年（一六〇二）に幕府から寺領三百石を与えられて復興して今に至る。

江戸前期に建てられた塔頭の福寿院客殿が重要文化財。彫刻では、本尊の金銅薬師如来倚像、寺宝では「増老阿含經」が重要文化財に指定されている。

円照寺（奈良市山町）

中宮寺・法華寺とともに、大和の三門跡尼寺に数えられる。後水尾天皇の第一皇女・文智女王（梅宮）は寛永十七年（一六四〇）に一絲禪師を師として剃髪し（大通尼大師）、洛北の修学院村に円照寺を建立したが、明暦元年（一六五五）に後水尾上皇が修学院村に山莊（修学院離宮）を開いたため、寺は藤堂高虎所領の大和国

添上郡八島、さらに寛文九年（一六六九）に南方の現在地へ移された。中宮和子（東福門院）の申請により寺領は二百石を与えられ、のちに三百石となった。大通尼の没後も皇女の入山が多く、山村御殿と呼んだ。

不退寺（奈良市法蓮町）

正式には不退転法輪寺。平城天皇が仮住まいした「萱の御所」が阿保親王と子の在原業平に伝えられ、業平が仁明天皇の勅命により自作の観世音像を祀ったことに始まるという。鎌倉時代の正和六年（一三一七）に南門と多宝塔が建てられたが、寛正五年（一四六四）にいずれかの堂宇が焼失した。

本堂・南門・多宝塔、再建された本堂はいずれも重要文化財、本堂前に鎌倉時代の梵字四面角塔婆が立つ。裏山の墓地にある鎌倉時代の五輪塔は、在原業平の供養塔であるとの伝承もある。

興福院（奈良市法蓮町）

浄土宗の尼寺。天平勝宝年間に和氣清麻呂が聖武天皇の御学問所を菅原伏見の里に移し、弘文院と称したことに始まるといい、藤原百川が宝

亀元年（七七〇）に建立したとも伝えられる。今の寺は天正年間に筒井順慶一族の窪庄伊豆守の妹である自慶院栄誉心慶大法尼が弘文尼寺として再興したことに始まり、寺地は尼ヶ辻にあった。大納言豊臣秀長の後室である秋篠内記の女（藤誉光秀尼）が心慶の姪であったことにより、二世となって中興し、秀吉から寺領二百石を受けた。豊臣家の滅亡後、庇護を失って衰微したが、三世の秀誉光心尼が徳川家光に復興を嘆願して再び二百石を受け、寺号も弘文院から興福院と改名した。徳川家綱の代には法蓮村の地に寺地が寄進され、尼ヶ辻から現在地へ移された。

法華寺（奈良市法華寺町）

正式には法華滅罪寺。中宮寺・円照寺とともに、大和の三門跡尼寺に数えられる。藤原不比等の旧邸宅を光明子が皇后宮とし、天平十七年（七四五）に宮寺となる。総国分尼寺として諸国の国分尼寺を総括。延暦元年（七八二）までに七堂伽藍が揃い、東南には光明子の阿弥陀浄土院が併設されて大寺院の体裁が整った。平重衡の南都焼討ちで大被害を受けたあと、重源が堂塔を再建。鎌倉時代に西大寺の叡尊も復興に尽力したが、室町時代の応永十五年（一四〇八）に西

塔が焼失、明応八年（一四九九）と永正三年（一五〇六）に兵火を受け、再建された金堂も慶長元年（一五九六）の大地震により倒壊。同六年（二六〇一）に淀君が奉行の片桐且元に建てさせた本堂・南門・鐘楼は現存して重要文化財に指定されているが、創建当初からの唯一の遺構であった東塔は宝永四年（一七〇七）の大地震で倒壊してしまった。

檀像彫刻の最高傑作と称される本尊の木造十一面観音立像が国宝。観音像の尊顔は光明皇后を写したものである。寺宝に奈良時代の絹本着色阿弥陀三尊及童子像（国宝）がある。

御所の庭を写した「仙洞うつし」の庭園は江戸初期の名園として知られる。

海龍王寺（奈良市法華寺北町）

天平三年（七三一）に光明皇后が建立し、同七年（七三五）に五千余巻の経論を携えて唐より帰京した玄昉が住した。寺号は玄昉が渡航中に海龍王経を唱えて九死に一生を得たことに因んだものという。光明皇后宮の隅、あるいは藤原不比等邸の隅に当たることから隅寺（もしくは隅院）と呼ばれた。境内から飛鳥時代の瓦が出土しており、創建が平城京の造営よりも遡る可能

性もある。鎌倉時代に叡尊が住して授戒を行い、殿堂坊舎を修復して新たに経蔵と舍利塔を建てた。

西金堂と経蔵が重要文化財に指定されている。西金堂内に置かれた有名な国宝・五重小塔は奈良時代に五重塔として作られた唯一現存するものである。

西大寺（奈良市西大寺芝町）

藤原仲麻呂（恵美押勝）の謀反が発覚し宮中が騒然としていた天平宝字八年（七六四）九月十一日に、称徳天皇（当時は上皇）が鎮護国家の祈りを込めて七尺の金銅四天王像の造頭を発願したことに始まるという。天平神護二年（七六六）までに四天王像を祀る四王堂が竣工し、薬師金堂が神護景雲三年（七六九）、弥勒金堂が光仁天皇の宝龜二年（七七二）に完成、五重の東西双塔（八角塔として企画）、十一面堂・小塔院・政所院・正倉院・西南角院・東南角院などを含む広大な七堂伽藍が整った。平安時代に多くの堂宇が焼失して荒廃したが、文暦二年（一二三五）より西大寺に住した興正菩薩叡尊が寺の復興に尽力し、みごとに復活させた。現存する堂宇は、江戸以後の再建。

本尊の釈迦如来立像が重要文化財。叡尊が嵯峨清凉寺に参詣し、その釈迦像を建長元年（一二四九）に模刻させたものという。国宝の寺宝に絹本着色十二天像十二幅、金銅透彫舍利塔、金銅五瓶舍利塔がある。

西大寺の北西にやや離れて寺域をもつ体性院（西大寺野神町）は正応三年（一二九〇）八月二十五日に九十歳の高齢で入寂した叡尊の茶毘所であり、その場所に建てられた大五輪石塔が現存する。西大寺の奥之院であり、法身鉢性院、石塔院などの別名がある。

秋篠寺（奈良市秋篠町）

特定の宗派に属さない真言法相兼学の寺。光仁天皇の勅願により宝亀七年（七七六）に僧正善珠大徳が開いたという。桓武天皇は善珠僧正を護持僧として、寺を大いに庇護した。東西両塔・金堂・講堂などからなる伽藍を誇ったが、保延元年（一一三五）に兵火を受け、講堂を除いて焼失してしまった。現存する本堂は火災を免れた講堂を改築したものといわれ、国宝に指定されている。

伎芸天立像は脱活乾漆の頭部のみが天平時代の作であり、木造の体部は鎌倉時代の補作である。

るが、頭と身体の絶妙なバランスによって広く知られる。

喜光寺（奈良市菅原町）

古くは菅原寺といった。養老五年（七二二）に寺史乙丸が寄進した旧宅に行基が精舎を構えたのが始まりという。行基は晩年にこの寺で病に伏せ、天平二十一年（七四九）二月二日に入寂した。鎌倉時代の建治年間（一二七五～七八）に大僧正覚昭が入寺して以来、一乗院門跡の末寺となり、靈元天皇の皇子で宝永六年（一七〇九）に出家した尊賞法親王の墓などが境内にある。元龜年間（一五七〇～七三）に松永久秀の兵火に遭い、宝塔・経蔵・楼門・門などが焼失したが、室町時代に天平建築を復して建てられた裳階付きの本堂（重要文化財）が火災を免れて現存する。

靈山寺（奈良市中町）

行基が養老二年（七一八）に創立した登美院が前身であるといい、寺域から奈良時代の瓦も出土する。慶長七年（一六〇二）に徳川家康から寺領百石が与えられ、秀忠から家定に至る各将軍の朱印状が伝わる。近世には一乗院門跡の末

寺となり、坊舎は十四を数えた。

弘安六年（一二八三）に建てられた入母屋造の本堂が密教寺院本堂の代表的遺構として国宝に指定されている。鎌倉時代の三重塔と室町時代の鐘楼はいずれも重要文化財。

厨子入りの秘仏である本尊の木造薬師如来および両脇侍像が重要文化財。本尊の胎内から治暦二年（一〇六六）紀年銘のある願文が発見されている。弘安八年（一二八五）朱書銘のある春日厨子も重要文化財に指定されている。

西国薬師第二番札所であり、内外総金箔押の弁財天金殿や内外総プラチナ押の王竜殿など、近年建立された華やかな仏殿も衆目を集めている。

大安寺（奈良市大安寺町二丁目）

『大安寺伽藍縁起并流記資財帳』によれば、聖徳太子が額田部に建立した熊凝精舎が前身と伝え、舒明天皇十一年（六三九）に百済の地に移して、最初の官大寺として百済大寺と号した。百済大寺は天武天皇二年（六七三）に高市へ移され、同六年（六七七）に大官大寺と改称されたのち、靈龜二年（七一一）に平城京左京六条四坊に移された。養老六年（七二二）に元明天

皇の一周忌法要が行われ、翌年には元正天皇が一切経千五百九十七巻を施入するなど、筆頭官寺としての役目が維持され、唐から帰朝した

道慈が天平元年（七二九）より住して寺号を大安寺と改めた。道慈が唐長安の西明寺を模範として建立した壮大な伽藍では光仁・桓武両朝にも盛大な法要が開かれたが、延喜十一年（九一一）に講堂と僧房、天曆三年（九四九）に西塔、寛仁元年（一〇一七）に東塔と本尊の釈迦如来像を除く伽藍の大半が焼失した。現在の堂宇は明治時代以降に建造されたものである。

平成十七年（二〇〇五）に西塔の発掘調査が行われ、大規模な基壇が確認され、巨大な風鐸や相輪の水煙が出土した。

帯解寺（奈良市今市町）

地蔵院の別名がある。文徳天皇が春日明神のお告げによって当地の地蔵尊に祈願したところ、惟仁親王（清和天皇）が誕生。喜んだ天皇が天安二年（八五八）に伽藍を建立、帯解の寺号を与えたという。平重衡の南都焼討ちや松永と三好の兵乱で堂宇や寺宝が焼失したが、徳川家光の嗣子竹千代（家綱）の出産、近年では皇室の出産に際して安産祈願を行い、その由緒をもって多

くの参詣者を集めている。境内には寛文三年（一六六三）に家綱が寄進した手水鉢がある。

薬師寺（奈良市西ノ京町）

天武天皇九年（六八〇）に天皇が皇后（後の持統天皇）の病氣平癒を願って薬師如来を祀る寺を藤原京の地に建て始めたが、完成を見ることなく朱鳥元年（六八六）に崩御したため、代わって持統天皇が寺院の造営を継続した。持統天皇十一年（六九七）に本尊が開眼し、文武天皇二年（六九八）になって伽藍が整った。これが薬師寺の前身である。平城京遷都後の養老二年（七一八）に薬師寺は平城京右京六条二坊の現在地へ移されたが、藤原京の旧寺も平安後期まで法灯を保ち、本薬師寺と呼ばれた。平城京の薬師寺は東西の双塔を含む七堂伽藍を誇り、南都七大寺のひとつに数えられる大寺となったが、天延元年（九七三）の火災で金堂と東西両塔を除く堂宇が焼失。その後も数度の災害に遭い、享禄元年（一五二八）に起こった大和の地侍らの兵乱によって東塔を除くすべての堂宇が焼失した。昭和四十三年（一九六八）以来、般若心経百万巻の写経勧進によって寺勢が回復し、創建当初の様式をもって金堂・西塔・中門・回廊（一部）・大講

堂が再建された。

天平二年（七三〇）造立の東塔（国宝）は各階に裳階が巡り、六層にも見える三重塔であり、日本の古代建築を代表する遺構であるとともに、最も美しい木塔であると称される。笛吹童子や飛天の透かしをもつ相輪の水煙も芸術的価値が高い。長屋王の妻である吉備内親王が元明天皇のために建てたという東院堂は鎌倉時代後期の再建ながらも国宝に指定されている。

講堂内に祀られた仏足石（国宝）は黄文連本実が長安普光寺の仏足石を写した図をもとに天平宝五年（七五三）に文室真人智努が亡き夫人のために刻んだものであるといわれている。同じく講堂に安置された天平時代の仏足跡歌碑（国宝）は仏足礼賛などを含む二十一首の歌を万葉仮名で刻んだもの。

寺宝の絵画には、宝龜三年（七七一）の制作とされ、光明皇后の画像とも伝えられる吉祥天画像や玄奘の弟子で法相宗の開祖とされる慈恩大師の肖像があり、いずれも国宝。

西国薬師第一番札所である。

唐招提寺（奈良市五条町）

天平宝字三年（七五九）に鑑真和尚が新田部

親王旧宅の平城京右京五条二坊に律宗の道場を開いたことに始まる。鑑真が天平宝字七年（七六三）に七十六歳で入寂したのち、弟子の法載・義静・如法・豊安らが遺志を継ぎ、平安時代の弘仁元年（八一〇）までに南大門・中門・東塔・金堂・講堂・鐘楼・経楼・食堂・絹索堂・三面僧房・温湯室・政所屋・炊殿・西井殿・甲倉などが揃った。鎌倉時代から度重なる被害を受け、慶長元年（一五九六）の大地震で多くの堂宇が倒壊したが、徳川綱吉と母桂昌院の庇護により復興して現在に至る。

代表的な天平建築である寄棟造の金堂、平城宮の東朝集殿を移築改造した講堂、奈良時代の校倉である宝蔵と経蔵、仁治元年（一二四〇）に再建された鼓楼がいずれも国宝、三面僧房の遺構である東室とその南側を解脱上人貞慶が改築した礼堂、興福寺旧一乗院の宸殿遺構を復原移築した御影堂などが重要文化財に指定されている。御影堂には旧開山堂から移した鑑真和尚坐像を祀り、堂内の障壁画「山雲」「涛声」は東山魁夷の代表的作品である。旧開山堂の前には鑑真を偲んだ芭蕉の「若葉して 御目の雫 拭はばや」の句碑が立つ。御影堂の東には鑑真和尚の廟所があり、墳上に鎌倉時代の石造宝篋印塔が

祀られている。金堂の西にある石積三層の戒壇は嘉永元年（一八四八）に覆堂が焼失して露台となったが、昭和五十三年（一九七八）にインドのサンチーの古塔を模した宝塔が建てられ、舍利七粒が納められた。

平成十二年（二〇〇〇）から始められた金堂の解体修理に伴って下ろされた東西両鴟尾も新宝蔵に展示されている。東側鴟尾には元亨三年（一二三三）の篋書きがあり、西側鴟尾は奈良時代の製作で鴟尾としては最古のものである。

円成寺（奈良市忍辱山町）

天平勝宝八年（七五六）に聖武天皇の勅願により、鑑真の弟子、虚滝が創始した、あるいは万寿三年（一〇二六）に命禅が春日神の造った十一面観音を祀る仏殿を建てたことに始まると伝えられる。仁平三年（一一五三）に仁和寺の僧、寛遍が入寺し、忍辱山流の密法を起こしたのち寺勢が興った。文正元年（一四六六）の兵火で堂宇の大半が焼失したが、住僧の栄弘が再興に努め、文明十三年（一四八一）には朝鮮に渡って高麗版一切経を請求した。

栄弘が文正元年（一四六六）に旧本堂と同じ設計で再建した本堂とその後まもなく建てられ

た楼門が重要文化財。本堂内陣の四本柱には聖衆来迎二十五菩薩の極彩画が残る。安貞二年（一二二八）に春日社の旧社殿を当寺へ移して鎮守としたともいわれる春日堂と白山堂が現存最古の春日造建築として国宝に指定。多宝塔に祀られた大日如来坐像が運慶二十五歳の最初期作として国宝に指定。

芳徳寺（奈良市柳生下町）

芳徳禅寺ともいう。柳生但馬守宗矩が寛永十五年（一六三八）に亡父柳生石舟斎宗嚴の菩提を弔うため、元の柳生城に沢庵禅師を開山として創立、柳生代々の菩提寺となった。宗矩の子である義仙が第一世住職となり、正保四年（一六四七）には徳川家光より二百石の寺領を与えられた。宝永八年（一七一）に全焼、正徳四年（一七一四）、第二世住職の梅堂が再建して今に至る。

本堂には本尊の木造彩色釈迦如来坐像と脇侍の阿難尊者・伽葉尊者両像のほか、柳生但馬守宗矩・沢庵宗彭禅師・第一代住職列堂義仙和尚の像を祀る。本堂の裏に柳生歴代の墓所があり、八十基あまりの石塔が並ぶ。柳生家の墓所は柳生下町の中宮寺にあったが、芳徳寺の創建

とともに現在地へ移された。

宝山寺（生駒市門前町）

生駒山の山腹に露出する奇岩が般若窟といわれ山岳信仰の対象となり、役小角が般若経を書写して納めたという伝説や若年の空海が当地で修行したという説話が生まれ、修行の道場として大聖無動寺が建てられた。

般若窟の頂上には鎌倉様式の宝瓶塔があり、弘安五年（一二八二）の十三重石塔もあることから、遅くとも鎌倉時代までには寺院が成立していたようである。江戸初期の延宝六年（一六七八）に中興の祖とされる湛海が入山し、二年後の仮本堂の建立を期に、八万枚の不動護摩供を修して以来、不動明王と大聖双身歓喜天への信仰をもとに寺勢が興った。湛海は般若窟に弥勒菩薩を祀り、十三重石塔を修復し、聖天堂や根本中堂を建てるなど、寺の復興に努め、元禄五年（一六九二）に生駒山宝山寺と改めた。

本尊の木造不動明王像と、厨子入りの木造五大明王像は、明治十五年（一八八二）に新潟県の大工、吉村松太郎が設計した洋風二階建て寄棟造の獅子閣とともに重要文化財に指定されて

いる。聖天堂に祀られている双身歓喜天像が「生駒の聖天さん」の愛称で親しまれ、信仰を集めている。

長弓寺（生駒市上町）

天平年間（七二九～四九）に聖武天皇の勅願により行基が白檀の十一面観音を作り、牛頭天王、八王子の宮を建て天皇の弓で本尊頂上の仏面を彫刻して創建したと伝えられ、桓武天皇の代に藤原良継が伽藍を中興し、阿弥陀、釈迦、地藏、四天王像を安置したという。また、富雄の豪族であった真弓長弓が子の長麻呂を連れて聖武天皇の鳥狩に従い、鳥を追いついていたところ、長麻呂の矢に当たり命を落とした。天皇がその悲運な最期を嘆き、行基に命じてその冥福を祈るために当寺を建立したという伝承もあり、寺の近くには、長弓の墓と伝えられる真弓塚がある。

弘安二年（一二七九）に建てられた入母屋造檜皮葺の本堂が国宝、本尊の木造十一面観音立像と鎌倉時代半ばに作られた堂内の黒漆厨子が重要文化財。

竹林寺（生駒市有里町）

文殊霊場である五台山大聖竹林寺にならって

大聖竹林寺ともいう。天平二十一年（七四九）に行基が喜光寺で入寂したのち、弟子たちは遺言によつて生駒山東陵で茶毘に付して墓を築き、行基の像を往生院に祀つて竹林寺奥院と号したとされる。

鎌倉時代の文暦二年（一二三五）に竹林寺の文殊堂付近から行基の舍利瓶が発見され、嘉元三年（一一三〇五）には同所から八角石筒と銅筒、銀舍利瓶が出土した。銅筒の残片は奈良国立博物館に収蔵され、表には行基の墓誌銘が残る。舍利瓶の出土後、行基菩薩に対する信仰によつて堂塔が整えられ、良遍・円照・忍性など南都高僧の止宿寺となつたが、明応七年（一四九八）の兵火で焼かれたのちは衰運に転じ、現在は無住寺。昭和六十一年（一九八六）に忍性墓が発掘され、行基墓と同様の八角石筒に納められた銅製骨瓶が出土している。

千光寺（生駒郡平群町鳴川）

天智天皇の世に役小角が宇佐八幡と生駒明神の神勅により入山し、千手観音を刻んで祀つたことに始まるという。小角が大峯山を開く以前にこの地で修行したので、元山上と呼ばれる。中世には寺領五百石を得て大いに栄えたが、室

町時代の天文年間(一五三二～五五)に兵火にかかり、行者堂を残して灰燼に帰した。江戸時代には復興して北之坊・上之坊・湯屋坊・谷之坊・安養坊・橋之坊・南之坊・中之坊・奥之坊・下之坊・蔵之坊の十一坊が立ち並んだが、現在は蔵之坊の一坊を残すのみである。

朝護孫子寺 (生駒郡平群町信貴山)

信貴山寺、志貴山寺ともいう。聖徳太子が物部守屋との戦に臨み、信貴山で感得した毘沙門天王を祀ったことに始まるとされる。平安時代の寛平年間(八八九～九八)に命蓮が入山した時には毘沙門天王を安置する円堂一字が建つのみであったが、その後、延喜年間(九〇一～一二三)に金剛界五仏を祀る堂を建て、延長年間(九二二～三)には本堂を改修して釈迦三尊を祀った。朝護孫子寺の名は命蓮が毘沙門天王の靈験により醍醐天皇の病気を治して賜ったものであるという。山岳密教の道場、修験道の宿として栄え、中世には数十の堂塔坊舎があったが、天正五年(一五七七)に織田信長が松永久秀の守る信貴山城を攻略した際、多くの寺坊が焼かれた。近世には毘沙門天王に対する武家の信仰を集めて復興し今日に至る。

寺宝の紙本著色信貴山縁起絵巻三卷(国宝)は、命蓮の靈験を描いた平安時代末成立の絵巻。延長七年(九二九)製作の金銅鉢も重要文化財に指定されている。文明十一年(一二四七)の紀年がある十三仏石龕は、大和で最も古い十三仏の遺品である。

聖徳太子が毘沙門天王を感得したのが寅の年、寅の日、寅の刻であったという伝承から、一月初寅の日に初寅大法会が行われ、福寅と称するハリコの寅もよく知られる。

法隆寺 (生駒郡斑鳩町法隆寺)

斑鳩寺あるいは法隆学問寺ともいう。用明天皇が病気の平癒を願って寺を造り薬師像を祀ることを命じたが、念願果たせずに崩御したため、推古天皇と聖徳太子が遺志を継いで推古天皇十五年(六〇七)に完成させたとされる。『日本書紀』には天智天皇九年(六七〇)に伽藍が一屋も残さず全焼したことを記す。この記事について明治二十年(一八八七)頃から火災記事を疑問視する「非再建説」と信用する「再建説」の両説が出されて、約半世紀にわたる論争が繰り広げられたが、昭和十四年(一九三九)に発掘調査された若草伽藍(非公開)が全焼した旧伽藍の

遺跡である可能性が高く、再建説が有力となっている。

西院伽藍は和銅四年(七一)までに完成、東院は天平十一年(七三九)に僧、行信が聖徳太子の斑鳩宮跡に上宮王院夢殿を建てたことに始まり、平安時代末から法隆寺に属した。法隆寺は奈良・平安時代に官寺として朝廷の保護を受けた。平安時代後期からは太子信仰に支えられて争乱の時代を乗り越え、明治の廃仏毀釈による経済的危機はあったが、寺勢を回復して今日に至る。

中世に戦場となった南都から離れていたため兵火に遭わず、国宝百三十四点、重要文化財二千三百七点を含む膨大な文化遺産が保存され、平成五年(一九九三)に世界文化遺産に登録された。代表的な国宝建築として、西院伽藍では、中門・回廊・金堂・五重塔が再建当初の遺構で、胴張り強いエンタシスの柱が特徴。金堂と五重塔の初重につく裳階は奈良時代、龍の支柱は元禄大修理の後補であるが、原形に馴染んでいる。大講堂は平安時代、南大門は室町時代の再建。このほか、奈良時代の経蔵・食堂、平安時代の綱封蔵・鐘楼、鎌倉時代の三経院(西室の一部)・聖霊院(東室の一部)、鎌倉時代の西円堂などが

ある。平成十年（一九九八）に竣工した百済観音堂には飛鳥時代の木造観音菩薩立像（百済観音）や白鳳時代の金銅観音菩薩立像（夢違観音）が祀られ、玉虫厨子や伝橘夫人念持仏厨子を含む多数の寺宝が展示されている。

東院伽藍の中心をなす夢殿は、聖徳太子の冥福を祈って天平十一年に創建された八角円堂である。夢殿の北にある伝法堂は聖武天皇の夫人である橘古那可智の住宅が施入されて仏堂に改築されたもので、天平貴族の住まいを知る上で貴重な遺構である。

中宮寺（生駒郡斑鳩町法隆寺）

法興尼寺・鴈尼寺ともいう。法華寺、円照寺とともに、大和の三門跡尼寺に数えられる。聖徳太子が母の穴穂部間人皇女（用明天皇皇后）のために建立したとされる。昭和三十八年（一九六三）より現中宮寺の東方で旧中宮寺跡が発掘調査され、南北に並ぶ塔と金堂の跡が発見された。出土瓦から飛鳥時代末期に創建されたことが判明するとともに、中宮寺が室町時代に西へ移されたという寺伝も確かめられた。

法隆寺とともに尼寺として栄えた中宮寺も平安時代から寺勢が衰え始め、鎌倉時代には甚だ

しく荒廃したが、河内西琳寺の日淨や西大寺の叡尊の協力によつて再興された。その後、興福寺慈性院の信如尼が来住して金堂を修復し、法隆寺とともに落慶法要を行い、文永十一年（一二七四）には法隆寺の綱封藏で発見した『天寿国繡帳』を寺に戻した。室町時代には再び荒廃に転じて、永正年間（一五〇二～一二）に現在地へ移されたが、天文年間（一五三二～五五）に伏見宮貞敦親王の王女、尊智女王（慈覚院宮）が入寺したのち、皇女や王女が相次いで入門して門跡寺院となり、中宮寺御所あるいは斑鳩御所と呼ばれるようになった。慶長九年（一六〇四）には徳川家康の発願で堂宇が増築されて今日に至る。

如意輪観音とも伝えられてきた本尊の木造弥勒菩薩半跏像（国宝）は気品漂う微笑で知られるわが国の代表的な仏教彫刻である。寺宝に天寿国繡帳残闕（国宝）がある。

法輪寺（生駒郡斑鳩町三井）

法琳寺・法林寺・御井寺・三井寺ともいう。推古天皇三十年（六二二）に聖徳太子の病氣平癒を願つて山背大兄王と由義王が建立したと伝わる。また、天智天皇九年（六七〇）の法隆寺炎上

ののち、百済の開法師・円明法師・下水新物らが建立したともいう。平安時代には寺勢なお盛んであったが、その後は次第に衰退し、江戸時代初頭には境内に三重塔を残すのみとなった。伽藍再興は享保年間に宝祐上人によつて始められ、約五十年かけて現在に至る寺観が整えられた。昭和十九年（一九四四）に落雷を受けて焼失した三重塔も住職二代にわたる努力によつて昭和五十年（一九七五）に飛鳥様式で再建された。

法輪寺の伽藍は法隆寺式伽藍配置で、法隆寺西院伽藍のおよそ三分の二の規模で設計されている。

法起寺（生駒郡斑鳩町岡本）

岡本尼寺・岡本寺・池後寺・池後尼寺ともいう。聖徳太子臨終の遺命を受けた山背大兄王が岡本宮を寺に改め、大和と近江の田を施入して寺領としたことに始まる。舒明天皇十年（六三八）に福亮僧正が聖徳太子のために弥勒像一軀と金堂を造立し、天武天皇十四年（六八五）に恵施僧正が宝塔建立を発願して、慶雲三年（七〇六）に塔の露盤を作ったという。発掘調査で岡本宮の建物跡と推定される遺構が発見された。兵火等によつて荒廃も進み、江戸時代に残っていた

のは三重塔だけであつたが、真政圓忍律師の発願によつて三重塔が修理され、その後、元禄七年（一六九四）に本堂、文久三年（一八六三）に聖天堂が建てられ、現在の寺観となつた。

慶雲三年（七〇六）建立と推定される塔（国宝）は、三重塔では現存最古の遺構。発掘によつて、金堂が西、塔が東に建つ、法隆寺とは逆の伽藍配置が確認され、同様の配置をもつ寺院は法起寺式伽藍配置と呼ばれるようになった。

吉田寺（生駒郡斑鳩町小吉田）

天智天皇が妹の間人皇女（孝徳天皇皇后）の菩提を弔うために建てさせた寺であるといわれ、境内には皇女の陵と伝えられる墳丘がある。永延元年（九八七）に恵心僧都源信が開基した。

心柱に寛正四年（一四六三）の紀年がある多宝塔、本尊の木造丈六阿弥陀如来坐像（平安時代）が重要文化財。本尊の前で祈祷を受けると、腰下の世話になることなく安らかに往生できるとの伝承があり、「ぼつくり往生の寺」あるいは「ぼつくり寺」の名で親しまれている。

永慶寺（大和郡山市永慶寺町）

宝永元年（一七〇四）に柳沢吉保が十五万石

の封禄で甲斐国甲府城主に任じられ、宝永七年（一七一〇）、同国岩窪村躑躅ヶ崎（現甲府市）に柳沢家菩提寺として永慶寺を建立。吉保の戒名「永慶寺殿保山元養大居士」は永慶寺に因んで名づけられている。吉保が正徳四年（一七一四）に駒込の六義園で没したのち、遺骸はこの菩提寺に葬られた。享保九年（一七二四）に第二代藩主の柳沢吉里が大和国へ転封された際、甲斐の永慶寺は堂宇破却、吉保夫妻の遺骸は武田信玄菩提寺の恵林寺（現塩山市）に改葬の上、大和郡山の現在地に移転し、柳沢家菩提寺として、また柳沢家の別邸的役割を果たし、明治維新を迎えた。歴代藩主夫妻は江戸の月桂寺（現東京都新宿区）に葬られ、明治維新後、現在までは永慶寺に葬られている。

春岳院（大和郡山市新中町）

文禄三年（一五九四）に没した僧重勢が開いた寺院であるという。郡山の城下町に寺域をもつ町寺である。もとは東光院と号した。

郡山城主の豊臣秀長が天正十九年（一五九一）に没した後、豊臣秀吉は城の南にある芦ヶ池の近くに大光院を建立し、京都大徳寺の古溪和尚を住まわせて秀長の菩提を弔わせたが、豊臣

家滅亡後、大光院は藤堂高虎によつて大徳寺塔頭として京都へ移された。このとき秀長の位牌を託された春岳院は大納言秀長の位牌菩提寺として町衆の崇敬を受けることになった。春岳院の寺号は秀長の戒名である「大光院殿前亜相春岳院紹栄大居士」に因む。

金剛山寺（大和郡山市矢田町）

矢田丘陵中腹に位置し、通称、「矢田寺」や「矢田の地蔵さん」の名で親しまれている。天武天皇の御願により入唐僧智通が創建したとされ、当初は十一面観音が本尊であつたが、平安時代初めに満米上人が地蔵菩薩を本尊として以降、地蔵信仰の一大道場として栄えた。

本堂は室町時代の建築で、中央の厨子内には本尊地蔵菩薩像（重要文化財）に十一面観音像（重要文化財）と吉祥天像を加えた等身大の三尊を安置し、左右に二天像を配している。平安時代の阿弥陀如来像と地蔵菩薩像、鎌倉時代の閻魔王像と司録像など多くの古像（いずれも重要文化財）を伝えるほか、寺宝に本尊の縁起と霊験を描いた鎌倉時代の矢田地蔵縁起二幅（重要文化財）や、同じく鎌倉時代の鐘楼の梵鐘等が知られる。

近年ではアジサイの寺として広く知られている。

東明寺（大和郡山市矢田町）

天武天皇の皇子で『日本書紀』編纂の主宰者として知られる舍人親王が創始したという。享保九年（一七二四）の記録には金剛山寺とともに矢田村惣鎮守の矢田坐久志玉比古神社の神役を務めていたという。

昭和五十八年（一九八三）に本堂の屋根を修復。本尊の木造薬師如来坐像をはじめ、木造地藏菩薩坐像、木造毘沙門天立像、木造吉祥天立像の諸仏はいずれも平安時代の作で、重要文化財に指定されている。

松尾寺（大和郡山市山田町）

舍人親王が『日本書紀』編纂の時、四十二歳の厄年であったため、厄除けと事業完成を祈願し建立した寺であるという。また、養老二年（七一八）に舍人親王が松尾山で修行した折、瑞雲たなびき千手千眼観音菩薩が降臨したという縁起から奈良時代には国運隆盛を願う寺として朝廷の保護を受けた。平安時代にも国司から寺料として官稲が支給されている。法隆寺の別院として、また修験道の霊場として栄え、中世には興福寺

の支配下にあったが、近世からは最古の厄除観音の霊場として信仰を集めてきた。

建武四年（一三三七）に再建された本堂、平安時代末から鎌倉時代初めに造立された木造十一面観音立像と木造大黒天立像、絹本着色釈迦八大菩薩像と絹本着色阿弥陀聖聚来迎図がそれぞれ重要文化財に指定。本尊の木造千手千眼観音立像は、「厄除け観音」の名で広く信仰されている。

慈光院（大和郡山市小泉町）

寛文三年（一六六三）に小泉藩主の片桐貞昌が、亡父貞隆の菩提を弔うため、京都大徳寺百八十五世の玉舟宗璠を開山として創建した寺。寺号は貞隆の戒名「慈光院殿雪庭宗立居士」に因む。

片桐貞昌の号は石州といい、茶人として名高く、石州流茶道の祖と仰がれる。石州が境内に造営した庭園は當麻寺の中之坊、吉野山の竹林院と合わせて大和三名園に数えられる。国名勝・国史跡に指定された枯山水と借景庭園、入母屋造茅葺の書院、切妻造柿葺の亭主床茶室、道安好みの閑茶室などはいずれも石州設計の遺構として、重要文化財に指定されている。史跡保存

物に指定された茨木門は摂津茨木城が徳川家康の一国一城令により破却される際に、城の楼門を貰い受けて移し、屋根を茅葺に改造したもののという。

額安寺（大和郡山市額田部寺町）

額田寺・額寺ともいう。寺伝によれば、前身は聖徳太子が学問道場として開いた熊凝道場であるという。天平宝字年間（七五七～六七五）に描かれた「額田寺伽藍並条里図」では、六町を占める広い寺域の西半に三重塔・金堂・講堂をもつ主要伽藍、東半に雑舎の院が立ち並び、往時の隆盛が偲ばれる。鎌倉時代には西大寺の叡尊と忍性が周辺で文殊信仰をひろめ、文殊菩薩像を額安寺西辺の宿に祀って戒律の普及に努めた。明応八年（一四九九）に赤沢朝経が大和乱入した際に焼き払われ衰微したが、慶長二年（一五九七）に豊臣秀吉から与えられた寺領が江戸時代にも安堵されて寺勢を保った。

鏡池（明星池）の池島に立つ石造宝篋印塔には文応元年（一二六〇）の銘がある。「鎌倉墓」と称される八基の五輪塔は重要文化財であり、一番大きなものからは忍性菩薩の骨蔵器が、その他、周辺から十一點の骨蔵器が昭和五十七年

(一九八二)出土し、重要文化財となっている。

富貴寺 (磯城郡川西町保田)

貞観年間(八五九〜八七七)に法隆寺東院を再興した道詮が建立したという。寄棟造本瓦葺の現本堂(重要文化財)は至徳五年(一三八八)に建立された。内陣の来迎図に五体の如来、五大明王、普賢菩薩像と文殊菩薩像が描かれている。本尊の木造釈迦如来坐像と木造地藏菩薩立像はいずれも平安時代の作で重要文化財。

当寺は六県神社の神宮寺であり、二月十一日に御田植祭のひとつである「子出来おんだ祭り」(県指定無形民俗文化財)が神社拝殿で行われる。

秦楽寺 (磯城郡田原本町秦庄)

当地に勢力を張った秦氏の氏寺とされ、秦河勝が聖徳太子から賜った観音像を祀ったことに始まるという。空海が当寺に留錫して『三教指帰』を著したとも伝えられ、著作中、うるさく鳴く蛙を叱つたため、それからは池の蛙が鳴かなくなったという伝承もある。

文化三年(一八〇六)に住僧の恵実が、焼失した京都方広寺大仏の再建を発願して、勧進のた

めに描いた大仏画(一五×一〇¹)が昭和五十四年(一九七九)に当寺で発見され寺宝となっている。

長岳寺 (天理市柳本町)

俗に釜口大師という。空海が淳和天皇の勅願により天長元年(八二四)に大和神社の神宮寺として創建し、正中元年(一三三四)に興福寺大乘院門跡の聖信が門主になった。室町時代には大乘院方の国民であった楊本氏に保護され、文龜三年(一五〇三)の兵火により伽藍が焼失し、豊臣秀吉によつて寺領を没収されるなどの災難はあつたが、慶長七年(一六〇二)に家康から寺領が与えられ、正堂(本堂)、不動堂、愛染堂、御影堂、鐘楼、五重石塔、弥勒石仏、鎮守社および寺中坊舎二十坊をもつ寺院となった。

空海創建当初の遺構である最古の鐘楼門、本尊の木造阿弥陀如来坐像(一一五一年作)と脇侍の観世音・勢至両菩薩坐像、平安時代の多聞天・増長天立像等が重要文化財で、観世音菩薩像と勢至菩薩像はそれぞれ外側の脚を蓮華坐から垂らしているのが特徴。江戸初期の狩野山楽の筆になる大地獄絵九幅は横幅一一¹の大画面が圧巻。毎年秋に開帳される。境内には興正菩

薩叡尊の供養塔と伝えられる鎌倉時代の十三重石塔や古墳の石棺蓋に弥勒菩薩を刻んだ石棺仏などがある。

寺は関西花の寺第十九番札所であり、ツツジの寺として名高い。

長谷寺 (桜井市初瀬)

創建当初の遺品である銅板法華説相図に刻まれた銘文によれば、朱鳥元年(六八六)に川原寺の僧道明が天武天皇のために泊瀬の地に祀つたものという。また、播磨国揖保郡出身の僧徳道が聖武天皇の勅を受け、銅板が納められた西の岡(本長谷寺)と対になる東の岡に霊木で刻んだ十一面観音像を祀ることを発願し、天平五年(七三三)に行基が開眼供養をしたともいう。

天慶七年(九四四)に堂舎・宝蔵・本堂などが焼失して以来、十度あまりの火災に遭つたが、室町時代には民間における伊勢信仰の興隆とともに街道筋にあたる長谷寺への参詣者が増え、流行となった庶民の長谷詣が復興の力となった。教義の方面では天正十六年(一五八八)に紀州根来寺から専誉が入寺し、平安時代末に高野山大伝法院の覚鑊が開いた新義真言宗の根本道場として栄えた。度重なる火災で中世の堂宇は

ことごとく焼失したが、徳川家光の寄進によって慶安三年（一六五〇）に再建された舞台造の本堂（国宝）は東大寺大仏殿に迫る規模をもち、仁王門から本堂に至る全長二〇〇メートルの登廊は、梁に吊るされた球形の風雅な釣灯籠とともに長谷寺の顔となっている。

寺宝の銅板法華説相図と法華經二十八卷は国宝。本堂本尊の木造十一面觀音立像は天文七年（一五三八）の作で重要文化財。左手に水瓶、右手に錫杖を持ち、觀音菩薩と地藏菩薩の両徳を兼ねた独特の姿から「長谷寺式」もしくは「長谷型觀音」と呼ばれ、同じ様式をした仏像群の典型となっている。

西国三十三ヶ所第八番札所であり、四季折々の花を楽しむ参詣者も多い。

聖林寺（桜井市下）

和銅五年（七一二）に藤原鎌足の子定慧が当地に庵を結んだと伝えられ、多武峯妙樂寺の境外仏堂となったが、平安時代に興福寺の僧兵に焼かれて、一時衰微した。鎌倉時代に慶円上人が弟子の性亮玄心と再興に尽力し、三輪にあった平等寺遍照院を移したのが現在の寺院である。

本尊の石造彩色子安延命地藏菩薩坐像は江戸時代の元禄期に文春諦玄が但馬の国の石工・佐助に命じて作らせた巨像である。客仏ではあるが、木心乾漆十一面觀音立像は代表的な天平彫刻であり、国宝に指定されている。大神神社の神宮寺であった大御輪寺に祀られていたが、慶応四年（一八六八）に寺の廃絶とともに当寺へ移された。

安倍文殊院（桜井市阿部）

安倍寺ともいう。諸書には崇敬寺の名で見え、安倍倉梯麻呂が創建したという。現文殊院の南西に遺跡が残る安倍寺跡が創建時の崇敬寺であり、鎌倉時代の初めに現在地へ移されたものと推測されている。永禄六年（一五六三）の兵火によって堂塔が焼失したが、建仁三年（一二〇三）に快慶が彫った本尊の文殊騎獅像は救われた。その後、元龜二年（一五七一）に文殊堂が建てられ、寛文五年（一六六五）には現本堂と礼堂（能樂舞台）が再建されて今に至る。

境内に祀られた一間社流造柿葺の白山堂、本尊の木造文殊菩薩騎獅像が宋様式の傑作（獅子は桃山時代の後補）で、重要文化財に指定。文殊菩薩像の周囲に配された善財童子立像・優填

王立像・維摩居士（最勝老人の説もある）立像・須菩提（仏陀波利三蔵の説もある）立像の四尊は渡海文殊の場面をなす。そのうち慶長十二年（一六〇七）の補作である維摩居士立像を除いた三尊は重要文化財。

俗に「知恵の文殊さん」あるいは「安倍の文殊さん」として親しまれ、天の橋立切戸の文殊（京都府）・奥州亀岡の文殊（山形県）とともに、日本三文殊のひとつに数えられる。

佛隆寺（宇陀市榛原区赤埴）

嘉祥三年（八五〇）に空海の弟子、堅恵が県興継を檀主として建立したといい、あるいは、それ以前に興福寺別当の修円が住したともいう。重要文化財に指定された石室は榛原石で築いた古墳の石室に似た施設であり、「堅恵の廟」と称されている。修円の墓とされる十三重石塔があるが、実際は元徳二年（一三三〇）に造立されたもの。また、一九七段石段は県下三銘段のひとつである。このほか、寺宝に空海が唐から持ち帰ったという茶臼がある。

境内に立つモチヅキザクラの巨樹は奈良県指定天然記念物である。

戒長寺（宇陀市榛原区戒場）

俗に戒場薬師という。用明天皇の勅願により聖徳太子が建立し、空海が伽藍を整えたと伝えるが、詳細は明らかでない。平安時代には戒律道場として栄えた。寺地周辺に「ごま山」「どうばた」「堂阪」「大門」などの小字が残り、往時の隆盛が偲ばれる。

正応四年（一二九一）銘の銅鐘は周囲に十二神将を鑄出した逸品であり、重要文化財に指定されている。また、境内の「お葉つきイチョウ」は奈良県指定天然記念物である。

室生寺（宇陀市室生区室生）

役小角が開き、空海が真言宗の道場として再興したと伝わるが、近在する「龍穴」という洞穴が古くから信仰を集め、その近くに祀られた龍穴神社の神宮寺として開かれたという説もある。重い病にかかった皇太子時代の桓武天皇を治そうと僧五人が延命の法を修めた山中に、興福寺大僧都の賢璟が国家のために開いた山寺が、現在の寺であるともいう。

弘仁八年（八一七）に嵯峨天皇が伝灯大法師修円を室生山に遣わして雨乞いの修法をさせたことをはじめとして、興福寺の僧が祈雨に派遣さ

れることが恒例化し、興福寺との関連が深まったが、元禄十一年（一六九八）に徳川綱吉の母、桂昌院が室生寺を興福寺から離し、新義真言宗豊山派の道場として以来、室生寺の弘法大師信仰が高まり、女人高野の霊場として発展した。現在は豊山派からも独立して真言宗室生寺派の大本山となった。

南都から離れた山中にあるため兵火を受けず、数多くの建築と彫刻が残る。最も可憐な木塔として知られる五重塔、寄棟造柿葺の金堂、入母屋造檜皮葺の本堂（灌頂堂または悉地院ともいう）が国宝、入母屋造柿葺の弥勒堂（伝法院ともいう）と御影堂が重要文化財。

寺は西国薬師第八番札所であり、山の景観に佇む女人高野の静かな風情を求めて訪れる参詣者も多い。

大野寺（宇陀市室生区大野）

開山は役小角と伝えられる。天長元年（八二四）に空海が室生寺を創始した際、当寺を西の大門として堂を建て、弥勒菩薩を祀り、慈尊院弥勒寺と名づけたという。のちに地名より大野寺と称されるようになった。

宇陀川を隔てた寺院対岸の崖面に残る国史跡

の弥勒下生線刻大磨崖仏、通称「大野寺石仏」は、後鳥羽上皇の勅願により鎌倉時代の初めに興福寺の雅縁が笠置寺の大弥勒石像を模して造立することを発願したもの。伊行末と思われる宋人の石工が承元元年（一一二〇）より彫り始め、承元三年には後鳥羽上皇が臨幸して落慶供養が行われた。線刻された弥勒仏は高さ一一・五メートル。その斜め下には磨崖種子尊勝曼荼羅も彫られている。

寺に祀られる木造地藏菩薩立像は、快慶の流れを汲む慶派の作で重要文化財。永正年間（一五〇四～一二）に当地豪族の下女が放火の疑いで火あぶりの刑に処せられようとしたとき、身代わりになって半身が焼けたという伝承から「身代り焼け地藏」の名がある。境内に立つシダレザクラの古木も有名。

青蓮寺（宇陀市菟田野区宇賀志）

浄土宗の尼寺である。世阿弥の謡曲「雲雀山」の舞台で知られる。それによると、中将姫が、継母の讒言によつて殺されようとするが、殺害を命じられた松井嘉藤太春時と妻静野が哀れに思い、日張山に草庵を結んでともに隠棲した。そして、ここ二年六ヶ月の念仏三昧の生活を送ったのち、

中将姫は父と再会した。父とともに奈良へ帰った姫は仏道への志やみ難く、當麻寺に入って出家剃髪し、再び日張山へ登って一堂を建て、みずからの影像と嘉藤太夫妻の形像を彫り祀ったという。

天明四年（一七八四）の火災、文化十二年（一八一五）の水害で諸堂を失い、現在の本堂は弘化四年（一八四七）に再建されたもの。本尊の法如尼坐像は中将姫十九歳の姿であるという。

大蔵寺（宇陀市大宇陀区栗野）

用明天皇の勅願により聖徳太子が創建、役行者が修行をしたという。また、空海が真言宗の道場として再興し、嵯峨天皇も臨幸して勅願寺になったと伝えられる。中世には末寺十八ヶ院をもち、山中に六坊の並ぶ大寺であった。

寄棟造柿葺の本堂と宝形造柿葺の大師堂がいずれも鎌倉時代の建立で重要文化財に指定されており、明治時代に岡倉天心が寄進した弁事堂も残る。

大願寺（宇陀市大宇陀区拾生）

七福寺ともいう。寺伝によれば、飛鳥時代の創建とされる。十一面観世音菩薩立像は西国

三十三ヶ所観音霊場の開基として名高い長谷寺の徳道上人が神亀元年（七二四）に彫ったもの、あるいは弘仁時代（八一〇～一二三）の作という。

明治十八年（一八八五）に本堂が焼失した際に頭部と両腕が欠損したが、のちに発見されて復された。そのため「焼けずの観音」として、火災厄除けの靈験が加わった。毘沙門像は元禄六年（一六九三）の作であり、室生山の大杉が使われている。像を祀る毘沙門堂は織田信武が建立したという。山門の額に大書された「薩埵山」の山号も信武の直筆。

境内には江戸後期の本草学者である森野好徳の筆塚があり、文化元年（一八〇四）に好徳が寄進したという仏足石もある。「おちやめ庚申」の名で親しまれる漫画風の庚申石仏は天保十四年（一八四三）の作である。寺は薬草料理でも知られる。

久米寺（橿原市久米町）

推古天皇の世に、聖徳太子の弟である来目皇子が創建したと伝えられる。七歳で失明した来目皇子が聖徳太子の勧めにより薬師如来に祈願したところ、みごと治癒したため、自らを来目と名づけ、薬師如来を祀る伽藍を建立したとい

う。その後、インドから善無畏三蔵が来朝し、当寺に多宝大塔を建立したとも伝えられる。また、欽明朝に葛城で生まれ、時を隔てて聖武天皇の世に活躍した久米仙人が開いたという伝説や、一説には伴造の久米直率いる久米部の氏寺であるといわれ、多くの由来をもつ寺である。

万治二年（一六五九）に京都仁和寺から移築された多宝塔が重要文化財に指定。室町時代の古材を使用して寛文三年（一六六三）に建立された本堂には、本尊の木造天得薬師瑠璃光如来坐像はじめ、多くの仏像を祀る。多宝塔近くには大きな塔の心礎を含む礎石群が残り、飛鳥時代から奈良時代にかけての瓦が多数出土した。

五月三日に行われる二十五菩薩来迎練供養会式は「久米れんぞ」の名で親しまれている。西国薬師第七番札所、大和七福八宝霊場。

おふさ観音（橿原市小房町）

正式には観音寺。本尊の木造十一面観音立像は慶安三年（一六五〇）に比叡山北谷の観音院本尊を当寺へ移したもので、「小房積の観音」で親しまれ、民衆の信仰を集めている。その一方で、境内に立つ恵比寿社への参詣者も多いのは、朝護孫子寺の毘沙門天、當麻寺中之坊の布袋尊、久

米寺の寿老人、子島寺の大黒天、安倍文殊院の弁財天、談山神社の福祿寿とともに、恵比寿神の寺として大和七福八宝の会に列せられているからである。

称念寺（橿原市今井町）

今井御坊ともいう。天文十年（一五四一）に石山本願寺の一家衆であつた今井兵部豊寿が今井庄に本願寺の道場を建てたことに始まる。豊寿は天正三年（一五七五）に織田信長と戦い、敗れて当寺を去つたが、二代兵部鶴寿は豊臣秀吉に故地復帰を許され、寺も復興された。現在の本堂は天正末から文禄年間（一五九二～九六）にかけて再建されたもので、慶長五年（一六〇〇）にはすでに称念寺と号し、大和の中本山（御坊）となつた。

入母屋造本瓦葺の本堂には徳川頼宣寄進の「功德蔵」の三字木額が掲げられている。

岡寺（高市郡明日香村岡）

正式には龍蓋寺という。飛鳥時代末か奈良時代初めに僧義淵が国家安泰と藤原氏の繁栄を祈願して草壁皇子の宮跡に建立した寺院であるという。奈良時代の中頃には東大寺写経所と関

係をもち、天平宝字六年（七六二）に寺封五十戸を施入された。現在、寺の西方にある治田神社付近の礎石が残り白鳳期の瓦が出土する場所が、創建当初の寺院跡であると見られる。

慶長十七年（一六一二）の墨書銘をもつ仁王門、寛永二十一年（一六四四）建立の書院、彫刻では、奈良時代の塑像のうち最も大きな本尊の塑像如意輪観音坐像が重要文化財。

このほか、奈良時代の木心乾漆義淵僧正坐像が国宝、銅造如意輪観音半跏思惟像、木造釈迦涅槃像や天人の姿態優雅な寺宝の天人浮刻埴が重要文化財に指定されている。

西国三十三ヶ所の第七番札所。

飛鳥寺（高市郡明日香村飛鳥）

法興寺・元興寺とも号し、蘇我馬子が崇峻天皇元年（五八八）に発願、百濟から招聘した造寺職人に建立させ、推古天皇四年に完成したわが国初の本格的寺院。推古天皇十七年（六〇九）には鞍作止利が作った銅造丈六仏（飛鳥大仏）と刺繍の丈六仏が祀られた。天武朝には官寺に列せられて栄え、平城京遷都とともに別院（奈良の元興寺）が建立されたが、その後も法灯は守られ、本元興寺とも呼ばれた。

伽藍は昭和三十一年（一九五六）から発掘調査が開始され、塔の北、東、西の三方に金堂が配される独特の伽藍配置が確認された。塔と三金堂を囲む回廊の北側に講堂が建てられ、寺域の門は中ツ道に面した西門が最も大きく造られていた。この伽藍は鎌倉初期の建久七年（一一九六）に落雷を受けて全焼し、塔心礎から取り出された金銅製舍利塔は木箱に入れて再び奉納された。

飛鳥大仏の通称で親しまれる本尊の銅造釈迦如来坐像は、日本最古の丈六仏であり、旧伽藍の中金堂に祀られていたが、建久の火災によって破損し、顔面と右手中央の三指以外は後補によるものである。

寺は新西国三十三ヶ所第九番霊場。

橘寺（高市郡明日香村橘）

正式には上宮皇院菩提寺。古い記録には「橘尼寺」の名で見える。聖徳太子創建七ヶ寺のひとつで、天武天皇九年（六八〇）に橘寺の尼房十房が焼けたことが記され、その頃までに成立していたことは確か。東西八町、南北六町の広い寺域をもち、六十六の堂塔坊舎をかかえていたという。鎌倉時代からは太子信仰の隆盛とともに栄えた

が、永正年間（一五〇四～二一）に多武峯衆徒の焼討ちに遭って衰え、江戸時代の寛文年間（一六六一～七三）には講堂一字を残すだけとなった。その後、幕末の元治元年（一八六四）より再興された堂宇が今に伝わる。

境内には飛鳥石造物のひとつである二面石が立ち、花形の柱穴をもつ塔心礎なども残り、全体として国史跡に指定されている。創建当初の寺院が東西に軸をとり、東面する四天王寺式の伽藍配置であったことが発掘調査によって確かめられた。

新西国三十三ヶ所第十番霊場。

壺阪寺（高市郡高取町壺阪）

正式には南法華寺、俗には壺阪観音という。大宝三年（七〇三）に佐伯姫足子入道尼（善心）が高市郡に建てた、あるいは大宝三年に元興寺の僧、弁基大徳が建立したともいう。境内から出土する白鳳期の瓦は両説の年代と一致する。平安時代には長谷寺とともに定額寺に列せられ、『枕草子』『今昔物語集』などの王朝文学にも名のあがる著名な寺になった。嘉保三年（一〇九六）に本堂、礼堂、五大堂、弥勒堂、宝蔵、船形房、客房、小板敷などが焼失したが、これらはそ

の後再建。南北朝時代以降は高取城を拠点とする越智氏の寺になったものの、その滅亡とともに寺も衰微した。慶長年間（一五九六～一六一五）に高取城主の本多氏によって修復がなされ、寛永年間（一六二四～四四）以後は高取城主植村氏の庇護により栄えた。

明応六年（一四九七）に建立された三重塔と室町時代中期の礼堂、絹本著色一字金輪曼荼羅図や鳳凰文塙が重要文化財。

盲目の沢市と、その眼を治そうと壺阪寺の千手観音に通い詰めた献身的な妻お里の人情話を描いた世話物浄瑠璃「壺坂霊験記」でも知られ、眼病平癒の祈願に訪れる参詣者も多い。

西国三十三ヶ所の第六番札所。

子島寺（高市郡高取町観覚寺）

孝謙天皇と桓武天皇の病を治した報恩法師が、天平宝字四年（七六〇）に一丈八尺の観自在菩薩と四天王像を祀った寺であるという。そのほか、寺の創建に関する所伝は多いが、永観元年（九八三）に興福寺僧都の真興が現在地に観覚院を建て、真言宗子島流を興した道場が直接の前身とされる。戦国時代に付近は戦場となり、寺も衰微したが、天正年間（一五七三～九二）高取

城主の本多氏から田地を与えられて復興に向かった。寛永十七年（一六四〇）に植村家政が高取城に入部したのは祈願所となつて保護された。明治時代に荒廃し無住寺となったが、有志の努力により復興して今日に至る。

寺宝の紺綾地金銀泥絵両界曼荼羅図二幅は国宝に指定。

達磨寺（北葛城郡王寺町本町）

『日本書紀』推古天皇二十一年（六一三）の条をはじめ、諸書に見える片岡山飢人伝説を由来として、聖徳太子創建の寺院に列せられる。太子が斑鳩から磯長谷へ向かう途中、飢えて倒れた男に衣服を与えたが、後日亡くなったことを聞き、墓を造り丁重に葬らせた。ところが、数日後に飢人の遺体は衣服を残して消え去り、太子はその男が真人であったことを悟るという筋である。後世、この真人こそ達磨大師であるとする説が起きて達磨寺の由来になった。境内には横穴式石室をもつ三基の古墳（一基は本堂の基壇）が残り、それが飢人の墓であるという伝承がある。

大福寺（北葛城郡広陵町的場）

聖徳太子が建立した広瀬寺の後身であるとい

う。空海が満嶋の弁財天を勧請したことにより山号がついた。江戸時代には歴代將軍より、寺領三十石が与えられた。寺域は東と北に分かれて広がり、正堂・二宇・鐘楼・浴室・僧舎六宇があったが、明治二十五年（一八九二）に東寺が廃され、北寺が残り今の太福寺となった。

寺宝には板絵両界曼荼羅があり、金剛界は応永二十九年（一四二二）、胎藏界は応永三十年（一四二三）の作。十一面観音、雨宝童子、難陀龍王の三尊は南都宿院仏師集団の貴重な作品である。境内では中世の土塔が発見され、数基が保存されている。

百済寺（北葛城郡広陵町百済）

當麻寺西南院の兼務寺。聖德太子建立の熊凝精舎をもとに舒明天皇が建立した百済大寺の後身であるという。近年の発掘によって桜井市の古備池廃寺を百済大寺とする説もあるが、一方、百済の名を残す当地が舒明天皇の事績に関連する可能性は消えていない。寺は室町時代から江戸時代にかけて多武峯領に属し、延宝三年（一六七五）に多武峯の僧徒らが修理を行っている。また、本堂（大職冠）は談山神社の古社殿を延享元年（一七四四）に移し再建されている。七

堂伽藍の大寺であったことは、付近に残る黄金堂・寺内・円堂寺・堂前・経蔵・大門などの小字名が示している。

鎌倉中期に建立の三重塔が重要文化財に指定されており、瓦刻銘によつて寛正四年（一四六三）に木瓦から本瓦に葺き替えられたことがわかる。

専立寺（大和高田市内本町）

高田御坊という。慶長五年（一六〇〇）に本願寺十二世准如が現在地に堂を建てて専立寺と号したことに始まる。寺は百あまりの末寺を従えた御坊となり、浄心四世の孫である宗清が看主となった。享保七年（一七二二）の頃には本堂はじめ、広間・座敷・台所・鐘楼・太鼓楼・表門・裏門など多くの堂舎が立ち並んでいたという。境内をめぐる築地塀は石垣の上に築かれ真宗寺院独特の町づくり「寺内町」の遺構がみられる。石垣の外には堀がめぐる城のような伽藍に仕立てられた。大和五ヶ所御坊のひとつとして重きをなした。

不動院（大和高田市本郷町）

通称は大日堂という。本堂の棟木に残された

墨書銘によると、もとは金輪山証菩提寺といい、聖德太子の建立といわれる。また古記録では光明皇后が再建し、その後破却され、文明十五年（一四八三）に高田城主當麻為長が大願主となつて建立したと伝え、本堂が現存している。明治六年（一八七三）に廃されたが、大正十一年（一九二二）に吉野郡野迫川村にあった不動院の寺号を譲り受けて再興し今日に至る。

當麻寺（葛城市當麻）

推古天皇二十年（六一二）に用明天皇の麻呂子皇子（當麻皇子、聖德太子の弟）が河内国交野郡山田郷に二上山万法藏院禅林寺を建立し、天武天皇十年（六八一）にその孫である當麻国見が現在地へ移したと伝わるが、天武天皇九年（六八〇）に竣工して同十三年（六八四）に金堂・講堂・千手堂・東西両塔が完成し、惠灌が導師となつて落慶法要が行われたともいう。創建当初は三論宗であったが、空海が留錫して真言宗となり、鎌倉時代以降は當麻曼荼羅図と中将姫伝説が阿弥陀信仰と結合して浄土宗が加わり隆盛した。平安時代後期から興福寺の支配に入り、平重衡の南都焼討ちにより曼荼羅堂・東西両塔を除く伽藍が焼失、鎌倉時代の仁治三年（一二

四二)から寛元元年(一二四三)にかけて曼荼羅厨子を修復して堂の改修が行われた。

寄棟造本瓦葺の本堂、當麻曼荼羅厨子、双塔をなす東塔と西塔がいずれも国宝、入母屋造本瓦葺の金堂と寄棟造本瓦葺の講堂が重要文化財。梵鐘は白鳳期の名鐘で国宝。金堂の南に立つ重要文化財の八角形石灯籠は白鳳時代に製作され、傘石に蔵手がつかない古風な形式をもつ。

寺は新西国三十三ヶ所第十一番札所。

石光寺 (葛城市染野)

天智天皇の時(六七〇年頃)、この地に光を放つ三大石があつたため、勅願して弥勒菩薩を彫刻させ、役小角を開基として寺を建立させたことに始まるという。聖武天皇の世に中将姫が境内にある井戸で蓮糸を染め、當麻寺本尊の蓮糸曼荼羅を織ったという伝説から井戸を「染の井」といい、染寺ともいう。

弥勒堂の本尊は木造弥勒如来坐像で秘仏、常行堂(阿弥陀堂)の本尊は木造阿弥陀如来坐像。発掘により弥勒堂の前から白鳳時代の瓦とともに弥勒石仏の頭部と台座部分が出土し、創設の伝承が裏づけられた。南門外に往時の塔跡が残

り、境内に心礎が置かれている。

関西花の寺第二十番札所であり、牡丹の寺として知られる。

九品寺 (御所市檜原)

行基が創建したという。中世に当地の土豪であつた檜原氏の菩提寺となり、一族の墓地がある。本尊の木造阿弥陀如来坐像は重要文化財。末寺の石川薬師堂から移されてきた薬師如来像は内墨書銘に弘治三年(一五五七)の紀年があつた。慶長十五年(一六一〇)鑄造された梵鐘は興福寺一乗院門跡の長講堂で用いられていたものである。墓地に千体石仏と呼ばれる石仏群がある。

船宿寺 (御所市五百家)

神亀年間(七二四〜七二九)に当地を訪れた行基が夢で老人の託宣を聞き、東の山中にある舟形の大岩に薬師如来を祀つたことに始まるという、平安時代には空海が留錫したといわれる。行基が発見したという岩場に巖舟権現像が祀られている。

寺は関西花の寺第二十二番札所であり、ヒラドツツジの寺として知られる。

吉祥草寺 (御所市茅原)

役小角生誕の地に創建したという。延喜二年(九〇二)に醍醐寺の開山である理源大師聖宝が勅を奉じて再建、中世には大峯修験の隆盛とともに栄え、徳藏院・真言院・千手院・泉良院などの子院をかかえる大寺となつたが、貞和五年(一三四九)の高師直の焼討ちによつて全焼した。江戸時代には正堂・拝堂・千手堂・行者堂・伽藍神・鐘楼・笠堂・僧房六字があつたという。本堂本尊の五大明王は不動明王を中心に並ぶ大威徳明王・降三世明王・軍荼利明王・金剛夜叉明王である。

榮山寺 (五條市小島町)

もとは前山寺と号したが平安時代以降「榮山」に改称。養老三年(七一九)に藤原武智麻呂が創建したという。天平九年(七三七)に疫病で没した武智麻呂はいつたん佐保山に葬られたが、宇智郡阿陶郷内の榮山寺裏山頂に改葬され、子の仲麻呂が山下の寺域に八角堂を建立し菩提を弔つたという。

八角堂が天平時代の遺構として国宝に指定されている。さらに、境内の鐘楼にある梵鐘も国宝に指定され、小野道風の書と伝えられる陽鑄の

銘文によれば、藤原道明と橘澄清が建立した京都深草の道澄寺の鐘として延喜十七年（九一七）に鑄造されたものという。

境内は南朝第三代の長慶天皇が行宮を構えた場所とされ、国史跡。また、榮山寺西方の宇智川東岸壁に大般涅槃經と仏像が陰刻された宇智川磨崖碑（国史跡）があり、宝亀七、または九年（七七六、または七七八）の銘もある。榮山寺との関連が指摘されており、僧侶たちの修行場であつたともいわれる。

金剛寺（五條市野原町）

承安年間（一一七一～七五）に小松内大臣の平重盛が建立したという。天正二年（一五七四）の兵火により全焼したが、江戸時代の初めに野原城主の畠山義春（上条政繁）の菩提寺として復興した。万治二年（一六五九）に井上内親王と他戸親王・早良親王を祀る天満宮が近くに建てられ、その神宮寺となつた。元禄六年（一六九三）には中興の盛宥大徳により堂宇が再建。また、幕末から大正時代にかけては、唐招提寺長老の隠居寺であつた。

関西花の寺第二十三番札所で、牡丹の寺として知られる。西国薬師第九番札所でもある。

大善寺（五條市中之町）

藤原百川らが山部親王（桓武天皇）の擁立をもくろみ、井上内親王とともに謀殺した他戸親王の菩提を弔うために建立されたとも、南朝第三代の長慶天皇が建立した寺院であるともいう。

応仁二年（一四六八）に造立された本尊の木造釈迦如来立像は「清凉寺式釈迦像」の代表的遺例で、重要文化財に指定されている。脇侍の文殊菩薩騎獅像と普賢菩薩騎象像は、いずれも室町時代の作。

寺は大和新四国八十八ヶ所の七十三番札所である。

金峯山寺（吉野郡吉野町吉野山）

役行者を開基とする。金峯山とは蔵王堂のある吉野山の麓、吉野川六田柳の渡しから大峰山寺のある山上ヶ岳の少し南、化粧の宿まで続く一連の峰を指す総称で、奈良時代からその名がある。役行者が金峯山を本拠地として修験道に励み、山岳信仰を世に広めたと伝えられるため、当山は修験道の聖地として古くから崇拜された。

醍醐寺を開いた当山派修験の祖、理源大師聖宝が金峯山に入ってから、その弟子貞崇など多く

の修験僧が入山。御岳精進への関心が高まり、宇多天皇・藤原道長・頼通の参詣をはじめとする皇室・貴族の御岳詣は白河上皇の世に絶頂を迎えた。永承四年（一〇四九）に興福寺僧円縁が金峯山検校となつてからは興福寺に所属し、慶長十九年（一六一四）の徳川家康の命により、天台系の日光輪王寺宮の支配に入った。明治の神仏分離令により金峯山一山の修験寺院はすべて廃され、金峯山寺の山上蔵王堂（山上ヶ岳）は当地の主神金峯神社の奥の宮、山下蔵王堂（吉野山）は金峯神社の口の宮と定められた。その後、吉野山四ヶ院が寺院に復興するにあわせ、明治十九年（一八八六）には山上・山下の蔵王堂の寺院への復帰が許され、明治二十二年には金峯山寺の寺号も取り戻すにいたつた。しかし、復興した金峯山寺は山下蔵王堂が中心とされ、山上蔵王堂は先に復興した四ヶ院と洞川の一寺を加えた五ヶ寺が護持院となつて、大峯山寺本堂として今日に至っている。さらに金峯山寺は昭和二十三年（一九四八）に天台宗から離れて大峯修験宗を立て、昭和二十七年以後は金峯山修験本宗と改称して総本山となっている。

天正二十年（一五九二）頃に再建された蔵王堂、延元三年（一三三八）頃に建立された仁王

門が国宝、北側参道に立つ銅の鳥居(室町時代)が重要文化財。寺宝も数多く、平安時代の金銀鍍金双鳥宝相華文経箱、金銅経箱台付二箱、経巻九紙、経軸二本はいずれも国宝。

如意輪寺 (吉野郡吉野町吉野山)

金峯山寺満堂派(真言系)の塔頭寺院として延喜年間(九〇一〜九二三)に日藏道賢が創建したという。後醍醐天皇の勅願寺でもあり、裏山に後醍醐天皇塔尾陵と世泰親王(長慶天皇の長子)墓がある。『太平記』には正平二年(一三四七)に楠木正行が延元陵(後醍醐天皇陵)に参拝したのち、髻を切り、辞世の歌を如意輪堂の扉に刻んで出陣したとある。江戸時代の初めには荒廃していたが、慶安三年(一六五〇)に鉄牛が本堂を修理して浄土宗に転宗し、今に至っている。

竹林院 (吉野郡吉野町吉野山)

弘仁九年(八一八)に空海が入山した際、道場を構えて椿山寺と号したことに始まるという。南北朝合一後、後小松天皇より竹林院の号を賜り、金峯律寺四院のひとつとなり、満堂派に属した。

第二十三代院主の尊祐は桃山時代に大弓法師と呼ばれ、弓道竹林流の開祖である。池泉回遊式庭園の群芳園は當麻寺中之坊・慈光院と肩を並べる大和三名園。第二十一代院主の祐尊が大峯山の景観をうつして築いたことに始まり、

秀吉の吉野山観桜のおり千利休が桃山風に改め、細川幽斎がさらに手を加えたという歴史をもつ。

本善寺 (吉野郡吉野町飯貝)

飯貝御坊ともいう。文明八年(一四七六)に本願寺八世蓮如が創建し、本願寺の一字をとって本善寺と号したという。明応四年(一四九五)に蓮如の子兼継を後継住職として以来、大和真宗寺院の中枢的存在となり、近世には真宗吉野教団の本拠として八十六ヶ寺を束ねた。金峯山の吉野大衆と対立し、天文三年(一五三四)には山上の三十六坊を攻め滅ぼすという勢いを見せた。永禄九年(一五六六)には院家に列せられ、三世証珍は天正四年(一五七六)の信長による石山本願寺攻めに際し、門徒を率いて兵糧を調達したが、天正六年(一五七八)には信長の命を受けた筒井順慶の攻撃にあつて全焼。境内に立つ「吉野川 心とどまる 河面にすみても見ばや

ここにいひが井」という蓮如の歌碑は吉野川岸から移してきたもの。

願行寺 (吉野郡下市町下市)

下市御坊ともいう。下市は吉野へ初めて布教した存覚(本願寺第三世覚如の長男)が住した故地であり、存覚が応安六年(一三七三)に入寂した際、藤谷山六世尊空師は亡骸を秋野川の里に葬り、永和四年(一三七八)に遺骨を納めて建碑し、その傍らに道場を建てて秋野坊舎と号した。応仁二年(一四六八)に吉野入りした蓮如は秋野坊舎の名を願行寺と改め、明応二年(一四九三)に末寺三十余ヶ寺を従えて帰参した近江錦織寺勝恵に第十八女妙勝を配して勝林坊の号を授け、当寺に住まわせた。明応年間(一四九二〜一五〇一)に寺地は存覚上人の墓とともに対岸の現在地へ移された。天正六年(一五七八)に筒井順慶によって飯貝御坊の本善寺とともに焼かれ、現在の寺院は江戸時代の再建による。

鳳閣寺 (吉野郡黒滝村鳥住)

もとは真言宗醍醐派であったが、真言宗鳳閣寺派の本山として独立した。役行者が創建し、

空海が留錫したという。寛平七年（八九五）に理源大師聖宝が真言院を建て、昌泰二年（八九九）に伝法灌頂を行った。その後、聖宝の弟子貞崇が三十年余り金峯山で修行して当寺で祖述し、延喜九年（九〇九）に聖宝が入寂すると、その廟塔を百貝岳上に建立した。以来、当山派（真言系）修験者の拠点として栄え今に至る。

境内から二〇〇メートル離れた百貝岳の南腹に建つ重要文化財の石造宝塔は、刻銘によれば正平二十四年（一三六九）に伊行末の流れをくむ石工の薩摩権守行長が作ったもので、一万八千二十二人にもよる修験者たちが理源大師の遺徳を偲んで建立した廟塔であるという。

金剛寺（吉野郡川上村神之谷）

旧称を那珂寺といい大峯山上奥之院とも号する。役行者が大峯山から抛った際に当地に飛来したとの伝承がある本尊は、抛げ地藏・川上地藏として信仰を集める。役行者の創建後、延元元年（一三三六）に後醍醐天皇が吉野に遷幸した際、寺領と現在の山号・寺名を賜ったという。元中九年（一三九二）の和議によって後亀山天皇が京都へ帰り、事実上南朝が滅びたあと、南朝の遺臣は嘉吉三年（一四四三）に宮中へ乱入して三

種の神器を奪い（禁闕の変）、神璽は南朝へ渡った。川上村に隠棲していた後亀山天皇の玄孫・北山宮（自天王）は神璽を奉じ、弟の河野宮（忠義王）と協力して南朝の再興を期したが、長祿元年（一四五七）、播磨赤松家の再興を図って神璽を狙う遺臣たちに襲われ殺害された。自天王を崇拜する村人たちは赤松家遺臣を追ってその首と神璽を奪還し、当寺に手厚く葬ったという。自天王が着用したと伝わる室町時代の武器が重要文化財に指定されている。

龍泉寺（吉野郡天川村洞川）

役小角を開基、理源大師聖宝を中興とする修験道の寺院。役小角が大峯山での修行中、洞川に下つて泉を発見し、その辺に八大龍王尊を祀ったことに始まるという。大峯山の登山口に当たる当寺は「大峯一の宿」と呼ばれ、本山派と当山派の区別なく共同で維持され、本堂・護摩堂・弁天堂をはじめ多くの堂宇があった。昭和二十一年（一九四六）の大火で龍王堂を残して全焼したが、昭和三十五年（一九六〇）に再建された。客殿は彦根城内に建てられた大正天皇の行在所を移築したものである。境内の龍の口から湧き出る清水をもって水行場とし、行者はここで身を清め、

八大龍王尊に道中安全の願をかけて大峯山へ入ることになっている。境内は大峯山に包括されるものとして大峯山内道場と呼ばれ、昭和三十五年までは女人禁制であった。

大峰山寺（吉野郡天川村洞川）

大峯修験道の根本道場であり、現在も女人禁制を守る霊場である。修験道の開祖といわれる役行者が金剛蔵王大権現を感得し、山上に祀ったことに始まると伝えられる。標高一七一九メートルの山上ヶ岳に建立されている本堂は、山頂にある木造建築では日本最大級といわれている。宇多天皇や藤原道長などの参詣に始まり、白河上皇の御幸で絶頂に達した「御嶽詣り」は中世にも衰えず、修験者たちの修行と信仰に支えられて発展した。山麓の本善寺門徒衆との争いが昂じ、天文三年（一五三四）に焼討ちに遭って三十六坊が焼失した。現在の寺院は江戸時代の再建による。元禄年間に再建された本堂、天慶七年（九四四）在銘の梵鐘、発掘調査によって本堂内陣の地下から出土した純金製阿弥陀如来坐像、純金製菩薩坐像、金銅蔵王権現立像三十七軀などが、いずれも重要文化財に指定。

奈良の史跡

平城宮跡（奈良市佐紀町）

平城京跡は奈良市街一帯に所在し、その北部中央に平城宮跡がある。平城京は奈良時代の首都であり、平城宮は現代の皇居と霞ヶ関の官庁街の機能を併せもつ。和銅三年（七一〇）から延暦三年（七八四）まで存続し、元明天皇から桓武天皇までがここを都とした。

平城宮は約一[・]四方の区画に、ほかの都城には見られない東張出部を取り付けた外形をなし、その外周を築地大垣が巡る。総面積は約一三〇[・]。築地大垣の各面には宮城門を配し、朱雀大路に開く南面正門は朱雀門とも呼ばれる。宮内には天皇の御在所である内裏や、儀式・政務の際の中心施設である大極殿・朝堂院などがあり、その周囲には官衙を配置していた。東張出部（東院地区）の南半は皇太子の居所と考えられ、その南端では池を中心とした庭園が見つかっている。

平城宮の構造は、聖武天皇の時代に大きく変化する。恭仁京遷都（天平十二年）→平城京遷

都（天平十七年）を境に、大極殿は西から東へと移り、第一次大極殿の跡地には宮殿建物が林立。一方、内裏は奈良時代を通じて同じ場所にあり、その構造は建て替えのたびに複雑化していく。こうした増改築は長岡京への遷都まで続けられたことが判明している。九世紀初めには平城上皇が一時遷都したが、その後は田畑と化した。

平城京左京三条二坊宮跡庭園

（奈良市三条大路）

長屋王邸の南に接する左京三条二坊六坪に存在する。園池は幅二[・]七[・]、延長五五[・]の屈曲した形状を呈する。池底には扁平な玉石を敷き並べ、汀線は礫を敷き詰めた洲浜状や石組で表現される。また、池の中には岩島が三基造られていた。池の西側には幅の狭い板塀と掘立柱建物があり、この建物から池を望んでいたと考えられる。これらの園池が造営された時期は、出土した土器や瓦の年代から、天平勝宝年間（七四九[・]七五七）と考えられる。奈良時代後半を通じて園池は存続していくが、その間に建物や塀などはいく度か建て替えられ、平安時代初頭には廃絶する。

昭和五十三年（一九七八）の特別史跡指定に

伴い、復原整備事業が行われ、同六十年（一九八五）には完了、現況のようになった。

旧大乗院庭園（奈良市高畑町）

大乗院は興福寺門跡の一つで寛治元年（一〇八七）に建立。治承四年（一一八〇）の兵火後、元興寺別院禪定院の地に移り大乗院家となる。宝徳三年（一四五二）の焼亡後、尋尊により復興され近世まで存続したが、明治期に廃絶。近世の絵図『大乗院四季真景図』などによれば、大乗院は東大池、西小池を中心とし、周囲に建物が配置されていた。こうした庭園景観の基礎は、尋尊復興時に活躍した善阿弥の作庭による。

平成七年（一九九五）から発掘調査が開始され、東大池の変遷や埋没していた西小池の状況などが判明した。東大池は現状で南北一〇〇[・]強、東西約八〇[・]の規模。池岸は中世から近世にかけての改修によって徐々に改変されている。中世の池岸の下に広がる州浜は、十二世紀初頭に整備された禪定院時期の庭園の存在を示唆する。西小池は南北約六〇[・]、東西約三〇[・]である。池岸は複雑に入り組んでおり、中島や岩島、岬、州浜を配する変化のある景観を呈する。

志賀直哉旧居（奈良市高畑大道町）

小説家の志賀直哉が奈良在住の友人らに勧められて、京都の山科から奈良市幸町に来住したのは、大正十四年（一九二五）、四十二歳の時。やがて、奈良公園に近く春日の森が望まれる高畑町に屋敷地を求めた。直哉自らが設計、京都の数奇屋大工の棟梁に依頼して新築した住居に移ったのは、昭和四年（一九二九）四月で、昭和十三年に東京に転居するまで在住した。

住居は、数奇屋造を基調に洋風や中国風の様式を巧みに採り入れ、当時としては進歩的・合理的な工夫が凝らされた。茶室を備え、一部は二階建てとし、庭を整えた邸宅であった。

住居には、直哉を慕って来住・来遊の文人・画家らが相次ぎ、瓦敷きのサンルームや板敷きの食堂が憩いの場となり、サロンとして賑わった。直哉が『暗夜行路』を書きあげたのは、当地である。

頭塔（奈良市高畑町）

土を盛り、表面を石で覆い石仏を配した瓦葺きの仏塔。「頭塔」の名称は『七大寺巡礼私記』に僧玄昉の首塚とあるのが初出。『東大寺要録』『東大寺別当次第』によれば、神護景雲元年（七六七）、東大寺権別当実忠が造営したとある。

昭和六十二年（一九八七）以降の発掘調査によつて、塔には上・下二時期あることが判明した。下層の版築基壇は一辺約三三^ミの方形、塔身も不整な方壇を呈す。塔身の初層東面中央に大型の仏龕が確認されている。基壇上には石積の三重塔が乗ると推定される。

上層は瓦葺き石積の七重塔である。塔身の高さは約八^ミ、初層は一辺約二五^ミの方形で、塔初層に五、第三層に三、第五層に二、第七層に一、計四十四の仏龕を設け、それぞれに石仏を納める。その石仏は計二十七体確認された。当初、塔頂部には心柱が立っていたが、落雷で消失し、平安時代初頭に十三重の石塔を建立した。その後、塔身もいく度かの改修を受けている。

北山十八間戸（奈良市川上町）

鎌倉時代の中ごろ、僧の忍性が当時不治難病の患者救済のため、北山（奈良の北の山という意）に宿舍を設けたもので、初め、般若寺の北東に建てられたが、永禄十年（一五六七）に焼失。その後、寛文年間（一六六一〜七三）に、東大寺・興福寺の堂塔を南に展望し、不幸な人々の養生にふさわしい今の地に移転し建築された。建物は鎌倉時代の遺風を受け継いだもので、十

八の間数のほかに仏間を設け、裏戸には縦に「北山十八間戸」と刻まれている。慈善事業の遺跡として著名。国指定史跡。

滝寺磨崖仏（奈良市大和田町）

奈良市大和田町の集落から西方一^キあまり、大和郡山市との境界に近い矢田丘陵山中に滝寺跡があり、奈良時代前期の磨崖仏が残る。露出する大きな岩肌に、薄肉彫りの堂塔や如来像・菩薩像などを浮彫りにしたものだが、長い間に剥落が進み図様はあまり明らかではない。中には彫りこんだ仏殿の内部に三尊仏が二組並び、中尊の光背に千体仏が表されているものもみえる。作風から見て八世紀に入ってからのもと考えられ、わが国でも最も古い磨崖仏のひとつである。

柳生陣屋跡（奈良市柳生町）

柳生藩は、参勤交代をしない江戸常住の定府大名で、国元には陣屋を置くのみで、城下町の発展はなかった。柳生宗矩は寛永十五年（一六三八）、亡父菩提のため芳徳寺を建立、続いて柳生正木坂の上に陣屋の築造（千三百七十四坪余）を進め、三年後に完成した。陣屋は宗矩の三男

宗冬時代に増築したが、延享四年（一七四七）十二月十日夜、全焼。その後、陣屋屋敷は仮建築のまま、明治を迎えた。

陣屋は明治の廃藩で、一時、柳生県の庁舎になったが、明治六年（一八七三）、建物・石垣は入札、売却された。近年、陣屋跡は復原整備され史跡公園になっている。

旧柳生藩家老屋敷（奈良市柳生町）

幕末の柳生藩家老小山田主鈴（一七八一～一八五六）の旧屋敷。元は興福庵と呼ばれたが、藩主から主鈴が拝領し、弘化四年（一八四七）に着工、翌年に上棟し、邸宅とした。安政大地震（一八五四）で被害にあったが修復。明治元年の柳生騒動では、反徒が芳徳寺から大砲を打ち込む計画を立てたが挫折している。昭和の初め、屋敷の所有者も変わり、同三十九年（一九六四）、作家山岡荘八氏所有となる。同四十六年に放映のNHKドラマ『春の坂道』はここで構想が練られたという。同五十五年（一九八〇）、荘八氏の遺志で屋敷は奈良市に寄贈された。翌年には修復され、主室の一部に旧柳生藩、および山岡氏の資料を展示公開している。

正長元年柳生徳政碑（奈良市柳生町）

奈良市阪原町から柳生街道が峠を越えて柳生町に入ると、路傍に半肉彫りの地蔵菩薩立像をきざんだ花崗岩の巨石があり、覆屋を設けている。この像は元応元年（一三一九）の年紀銘もち、俗に痘瘡地蔵と呼ばれている。

この地蔵像に向かつて右下方に縦三三センチ・横二一センチの長方形の枠があり、その中に「正長元年ヨリサキ者カンヘ四カンカウニヲ井メアルヘカラス」の四行二十七文字が彫られている。正長元年（一四二八）以前の神戸四ヶ郷の負目つまり負債は一切なくなつたというのである。正長元年の秋、近江に起こつた一揆は、山城国を経て畿内近辺に波及、徳政（貸借の破棄）を要求した。大和では同年十一月、大和守護権をもつ興福寺が徳政令を出している。この刻文は、春日社領であつた神戸四ヶ郷（大柳生・坂原・小柳生・邑地）において徳政が行われたことを示している。

毛原廃寺（山辺郡山添村毛原）

大和高原の三重県との県境に近く、名張川上流、笠間川の左岸に、みごとな寺院礎石が整然と並ぶ寺院跡がある。創建事情や寺名すらも伝えられていないが、南面する傾斜地に南門、金堂、

講堂と推定される建物跡がある。その他、金堂跡の南西側の自然石に近い礎石数個は塔跡、また西の谷間の北側にある平坦地には、現在は移動しているがかつて礎石があり、食堂跡ではないかと推定されてきた。

滝坂道（奈良市）

柳生街道の一部で、奈良市高畑町から春日山と高円山の間を流れる能登川上流沿いに石切峠まで通じている石畳の坂道をいう。石畳は江戸時代中期に奈良奉行によって敷設されたと伝えられる。柳生街道は、昭和初期まで米や薪炭などを牛馬の背によつて運ぶ大和高原と奈良盆地を結ぶ重要な交易道路でもあつた。ことに滝坂は中世の石仏の多いことで知られ、高さ一・六メートルの磨崖仏の夕日観音は、花崗岩に弥勒如来立像を彫った鎌倉中期の作と伝えられる。三体の磨崖仏を東面する断崖に刻んだ朝日観音は中央に二・三メートルの弥勒如来像、左右に地蔵を配し室町時代の造立とされる。また首が二つに折れた首切地蔵は、柳生十兵衛の弟子の剣豪荒木又右衛門が試し斬りをしたという伝説がある。首切地蔵の東の山中には凝灰岩に刻まれた平安末期の春日山石窟仏（国史跡）や彩色の施された

三尊像を刻んだ地獄谷石窟仏(国史跡)などもある。

郡山城跡 (大和郡山市北郡山町ほか)

別名犬伏城とも呼ばれた郡山城は、天正六年(一五七八)ごろ、大和の戦国大名筒井順慶の構築に始まる。織田信長の後楯で大和国を平定した順慶は、父祖伝来の筒井城を出て、土豪の郡山衆らが拠ったこの地に近世的な縄張りで城を築き、二年後に入城した。筒井氏が伊賀国へ転封のち、秀吉の異父弟の豊臣秀長が天正十三年(一五八五)に入城、紀伊国根来寺の大門を運ばせて城門に仕立て、かなり強引な石材集めで城郭の拡充を進めている。この後、豊臣政権五奉行の一人の増田長盛が文禄四年(一五九五)に入城、長盛は城下を整え、延長五・五^ノの外堀の普請を進めた。こうして、順慶以来ほぼ二十年で、郡山城はその規模を確定したことになる。江戸時代には、水野勝成が藩主として入部のあと、たびたび藩主の交替があったが、享保九年(一七二四)、柳沢吉里が十五万石余で甲府から転封、以後、柳沢氏郡山藩は明治維新までおよんでいる。

城の石垣は見所のひとつ。順慶は多聞山城の

石材を、秀長は平城京羅城門跡の礎石と伝えるものをはじめ、石仏・石塔などまで集めさせたという。野面積みの天守台には地蔵石仏がうつ伏せに積み込まれていて「逆さ地蔵」と呼ばれ、祀られている。追手門・追手東隅櫓などの復原があり、城跡一帯は桜の名所である。

大納言塚 (大和郡山市箕山町)

大和大納言と呼称された豊臣秀長の墓所。秀長は豊臣秀吉の異父弟。郡山城主であった筒井氏が伊賀国へ国替の後、代わって天正十三年(一五八五)閏八月、豊臣秀長が大和・紀伊・和泉三ヶ国を領する百万石の太守となり、同年九月郡山城に入った。秀長は郡山城や城下町の整備と繁栄に努め、同十五年には大納言に叙せられている。兄秀吉の信頼が厚く、豊臣政権の大黒柱として活躍したが、天正十九年(一五九一)一月、郡山城内で五十一歳で死去、遺骸は箕山に葬られた。江戸時代になって墓所は荒廃したが、菩提寺であった春岳院の住僧栄隆法印をはじめ町民らの長い歳月をかけた尽力で、安永六年(一七七七)に五輪塔や墓域が整備された。これが、今日に続く大納言塚である。

筒井順慶五輪塔覆堂 (大和郡山市長安寺町)

近鉄平端駅の東側に位置する筒井順慶の廟所で、覆堂は順慶の五輪塔(墓碑)と石灯籠を覆っている。筒井順慶は、織田信長の後援で宿敵松永久秀を破り、大和の統一をなしたとげた武将で、天正十二年(一五八四)八月に郡山城内で没した。はじめ奈良の円証寺に葬られたが、のちにこの地に改葬された。

五輪塔覆堂は、一間四方の宝形造本瓦葺で、頂に宝珠と露盤を載せている。露盤銘により天正十二年の造立であることが知られる。覆堂の側面の格子の頭部には、五輪塔婆を繰り出す類例のない意匠がみられ、重要文化財に指定されている。

五輪塔には、順慶陽舜房法印が天正十二年八月十一日に三十六歳で入滅したとの刻銘があり、傍らの石灯籠の竿には、翌十三年の一周忌にあたる忌日が刻まれている。五輪塔覆堂の地は、いま筒井順慶歴史公園となっている。

面塚 (磯城郡川西町結崎)

川西町結崎の糸井神社そばの宮前橋を渡り、寺川の堤を遡ると、面塚の碑が建つ小さな公園がある。結崎は大和猿樂四座の一つ観世座(結

崎座)の本拠地であった。観阿弥清次が、京都での演能の成功を祈って糸井神社に日参した時、天から一束のネギと能面が降る夢を見た。夢の通りに面とネギが落ちていたので、この面を着けて御前で舞うと見事お褒めの言葉を頂いたという。ネギは土地に育って結崎ネブカ・唐院ネブカと呼ばれた。また別伝では、同社の女神が諸国を巡り、面を着け男装して戻ったところ、急に雷雨になり、あとには能面とネギが落ちていた。村人はこれを神のお告げとしてネギを栽培したところよくできたので、面も塚に祀ったという。

内山永久寺跡 (天理市杣之内町)

内山金剛乗院の院号をもつ真言宗古義派の大寺であった。永久年間(一一一三～一一一八)に鳥羽天皇の勅願により大乘院本願隆禅法印の弟子である頼実法印が建立した年号寺で、平安時代には多くの堂塔坊舎をかかえた。延元元年(一一三六)に後醍醐天皇が吉野へ逃避する途中、当寺に身を隠したという。文禄四年(一五九五)に豊臣秀吉から寺領を与えられ、五町四方の広大な寺域に坊舎五十二坊が立ち並ぶ大寺となった。廃仏毀釈によって明治八年(一八七五)前後に廃絶して現在は廃寺と化したが、鎮

守社の拝殿が石上神宮の出雲建雄神社の拝殿(国宝)として再利用されている。

金屋の石仏 (桜井市金屋)

金屋の集落から大神神社へと続く三輪山麓の山の辺の道沿いの堂の中に、二面の石仏が安置されている。凝灰岩製の長方形の板(高さ約二メートル、厚さ約二一センチ)に、仏身・二重円光の光背・蓮華坐を薄浮彫りにし、これに線刻を施したもので、用材は石棺の板石を転用したものだとも、石仏龕の扉だともいわれている。

両像とも通肩の法衣を着し、向かって左側の伝弥勒如来像は右手施無畏・左手与願印を表し、向かって右側の伝釈迦如来像は胸前で說法印を結んでいる。頭部を小さめに、体部を大きく構成し、胸幅の広い量感のある像容を印象づけている。さらに腹部から両足にかけて、平安前期に流行したY字形衣文が見られる。面相は比較的穏やか。制作年代については諸説があるが、平安時代後期の作と見られている。

吉備池廃寺 (桜井市吉備)

飛鳥時代の寺院跡。舒明天皇が舒明天皇十一年(六三九)に造営を開始した百濟大寺に比定

されている。長い間、その実態は不明だったが、発掘調査で、金堂、塔、それを取り囲む回廊、それらの北側に僧房が発見された。同時期の寺院と比べると、建物規模は群を抜いて大きい。なかでも塔は九重塔と考えられており、基壇は一辺約二八メートル、法隆寺五重塔の二倍にあたる。舒明天皇の死後、百濟大寺の造営は、妻子である皇極天皇や天智天皇に引き継がれ、ほぼ完成を迎えたとされる。のちに、百濟大寺は移転して高市大寺となり、さらに大官大寺(明日香村小山)へと変遷する。一貫して「大寺」を寺名に含む特別な寺院であった。

山田寺跡 (桜井市山田)

舒明天皇十三年(六四一)、蘇我入鹿の従兄弟にあたる蘇我倉山田石川麻呂が造営着手した古代寺院である。皇極天皇二年(六四三)には金堂が完成し、やや遅れて回廊が造られた。しかし大化五年(六四九)、石川麻呂が反逆の罪を着せられ自害したことから、造営は一時頓挫した。しばらく後に工事は再開され、天武天皇五年(六七六)には塔が完成、次いで講堂などが建設される。そして天武天皇十四年(六八五)には丈六仏像の開眼供養が行われ、四十年におよぶ

造営工事が完了した。

発掘調査により、金堂や塔、回廊、講堂、宝蔵、南門の跡を検出した。金堂の南に塔が位置しており、それらを巡るように回廊が配され、回廊の北側に講堂が、東側に宝蔵が位置している。特筆すべきは東面回廊であり、建物が倒壊した状況がそのまま残され、連子窓などの建築部材が当時の状態を保ったままで大量に出土した。

なお、天武天皇十四年に開眼された仏像は、文治三年（一一八七）に興福寺衆徒によって持ち去られ、現在は頭部のみが興福寺に残されている。

栗原寺跡（桜井市栗原）

国道一六六号線を桜井市から女寄峠に向かう途中、栗原川を挟んで南側、栗原の集落の手に天満神社が祀られている。それに近接して、集落の中の急峻な山道を登りつめたところに「史跡栗原寺趾」の石柱が建つ。標柱のある付近とその周辺の平地に礎石が並ぶ。

寺史についてほとんど文献に見られないが、談山神社が所有する有名な栗原寺の三重塔の伏鉢の銘文には、中臣朝臣大嶋が天武天皇の皇子である草壁皇子の菩提を弔うため伽藍建立を発

願し、持統天皇八年（六九四）から造営を開始、二十二年の歳月をかけて和銅八年（七一五）に竣工、金堂に丈六の釈迦如来像を安置、三重塔の上にこの伏鉢を奉献、願わくばこの功德をもつて東宮草壁皇子の霊が速やかに無上菩提を証せられるよう祈願している。

起工は藤原宮時代であり、竣工は平城宮遷都後である。なぜこの場所に草壁皇子のために寺院が建立されたのかは謎である。

山の辺の道（奈良市・天理市・桜井市）

奈良盆地東縁の春日断層崖下を南北に通じる古道。古代大和には西から下ツ道、中ツ道、上ツ道の三本の南北直線道が敷設されたが、これらの計画道路よりも古くに成立していたと考えられ、歴史に登場する道路のうちで最古の古道と呼ばれる。沿道には崇神陵や景行陵などの陵墓や古墳、物部氏などの有力豪族関係の遺跡、また古い寺社も多い。飛鳥から奈良への全長は約三五^{キロ}であるが、一般的にハイキングコースとして親しまれているのは、天理市の石上神宮から桜井市の大原神社までの約一五^{キロ}である。その大部分は東海自然歩道となっており、遺跡・史跡だけではなく、山林と集落また田畑やミカン畑の間を

縫いながら続き、眼下には奈良盆地が展開、西方には生駒山や二上山、畝傍山・耳成山・天香具山などを遠望することができる。

駒帰廃寺（伝安楽寺）跡（宇陀市菟田野区駒帰）

駒帰集落の西部にあつて、南に向かって開けた丘陵に位置する。検出された遺構は、隣接する西方と東方の二つの建物遺構およびこれら建物跡から東にある瓦窯跡である。

金堂と推定される西方建物は、北側の花崗岩質の地山の崖を切り崩して整地し造成した東西一八^{メートル}、南北一三^{メートル}、高さ約〇・三^{メートル}の基壇の上に建てられ、その規模は東西方向の桁行五間、梁間四間で、礎石は花崗岩の自然石を用いていて、必要とする二十八個のうち二十二個が遺存している。隣接の東方建物も北側の地山斜面を削つて基壇を造成している。基壇は東西一一^{メートル}前後・南北六^{メートル}以上、南側は後世に削平されていてよくわからない。

この寺院は、奈良時代初期に創建され、平安時代中期に焼失したと考えられており、安楽寺跡と伝えている。

宇陀松山城跡（宇陀市大宇陀区春日）

宇陀松山城跡は、大宇陀の中心街地（旧松山町）の東にそびえる標高四七三メートルの古城山（一般に城山と呼ぶ）の山頂部一帯を城地とする、宇陀地方最大の規模をもつ要害堅固な山城である。

築造年代は明らかではないが、南北朝時代から勢威を伸ばし宇陀三将の一人と称された土豪の秋山氏が、いわゆる城山の山頂部に山城を築いて本拠としたものである。やがて、天正十三年（一五八五）に豊臣秀長が郡山城に入ると、配下の有力武将らが城主として相次いで入城し、城郭に大規模な改修を加えたり、城下町の整備を進めた。この改修や整備は、慶長五年（一六〇〇）の関ヶ原の合戦後、宇陀の地三万余石の領主となった福島掃部頭孝治の代にも続けられたが、福島氏改易の後、松山城は幕府の命によって破却された。そのあと、元和元年（一六一五）に織田信長の次男信雄が藩主として宇陀の地を領することになり、織田氏松山藩が成立し、元禄八年（一六九五）の丹波国柏原への国替えまで四代にわたり織田氏の藩政時代が続いた。

西口関門は、角材を二本建てて、その上に冠木・腕木・桁を置いて切妻屋根を載せる。また後

方に控柱を建て、本柱から繋貫を入れ同じように切妻屋根を載せる。扉は格子戸に作られている。正面の柱間は四・一メートル、軒の高さは三・七メートル、一般に黒門と呼んでいる。この門は、おそらく十六世紀末から十七世紀初めごろの築造と考えられ、宇陀松山城跡とともに国の史跡に指定されている。

森野旧薬園（宇陀市大宇陀区拾生）

城下町の面影を残す大宇陀区の中心街地である旧松山町の中ほど東側に、「元祖吉野葛 大葛屋」の看板がかかる森野家があり、裏山に森野旧薬園（国史跡）がある。

森野旧薬園のもとになる薬草園は、森野藤助によつて始められた。八代将軍徳川吉宗は、国内の薬草類の調査のため、諸方に採薬使を派遣した。その一人で幕府の駒場御薬園預りの植村左平次政勝が、享保十四年（一七二九）に主に伊勢・大和地方の薬草見分と採薬に訪れたとき、森野藤助は薬草見習の一人として推薦され、植村左平次に従つて採薬補助に当たった。この年、採薬補助につとめた功績により、幕府の薬園などで栽培されていた薬草木の種子や苗が下げ渡されたので、藤助は自ら採集していた薬草類と

もに自家裏山の畑地に植えた。これが森野薬園の起りである。

旧薬園の面積はおよそ六千平方メートル、二百五十種ほどの薬草木類が栽培されていて、往時の風情を伝えている。

藤原宮跡（橿原市高殿町一帯）

持統天皇が持統天皇八年（六九四）に飛鳥浄御原宮から遷都し、文武天皇を経て、元明天皇が平城宮へ移る和銅三年（七一〇）の間の都。藤原宮は新益京と呼ばれた街区をもつわが国初の本格的都城である。一辺約一・四四方の規模を持つ宮城は京のほぼ中心に位置した他の都には見られない独特の配置をとる。宮の中心に大極殿院、その南に朝堂院、朝集殿院をおき、大極殿院の北方には天皇の住居である内裏が配置される。宮城の外周は掘立柱の大垣がめぐり、各辺に三つの門が開き、南面中央には正門である朱雀門がある。宮中枢部の建物群は、礎石建ち、丹（朱）塗り柱、瓦葺きであり、日本最初の中国式宮殿建築として威容を誇ったと考えられる。宮中枢部の東西には様々な役所が置かれたが、その具体的な状況や役所名などについては未解明な部分が多く残る。

本薬師寺跡（櫃原市城殿町）

『日本書紀』によると、天武天皇九年（六八〇）十一月、皇后（後の持統天皇）の病氣平癒のために、天武天皇が発願した。創建時期を明瞭に示す資料に乏しいが、天武没後の持統天皇二年（六八八）以降、法会の記事が散見し、同十一年には開眼会が行われ、『続日本紀』文武天皇二年（六九八）十月にはほぼ完成していたとみえるが、「造薬師寺司」がみえる大宝元年（七〇一）、同二年（七〇二）ごろまで造営は続いたのである。平城京遷都に伴い京内に薬師寺が創建され、以後、もとの伽藍は本薬師寺と称された。発掘調査により、本薬師寺は平城薬師寺と同規模の二塔一金堂をもつ薬師寺式伽藍配置であったこと、主要伽藍は平城京遷都後も存続し、修造に際して平城薬師寺の瓦が供給されていたことなどが確認され、堂塔の移築・新築をめぐる議論は、概ね解決をみたといえる。現在、金堂基壇上には、浄土宗に属する本薬師寺の本堂および庫裏が建ち、その前庭や東西両塔跡には礎石が遺存する。

岩船（櫃原市白櫃町）

奈良盆地南辺の貝吹山に連なる石船山の頂上

近く、標高一三〇メートルの地点にある巨大な花崗岩の石造物で、俗に益田岩船と呼ばれている。長さが東西一八メートル、南北八メートル、北側面からみる高さが四・七メートルの台形で、頂上部の平らな面から東西両側面にかけて、幅一・八メートル、深さ〇・四メートルの浅い溝のような切込みを設けている。側面上半分は滑らかに仕上げられているが、下半部では格子縞のような模様を刻んでいる。花崗岩の加工技術が終末期の古墳と共通するなど、七世紀代の特色をもっており、飛鳥地方に分布する特異な石造物の中でも最大の規模を有している。

用途については、弘仁十三年（八二二）、この地に築造の益田池の碑の台石とする説があり、また別に墳墓説や占星台の基礎とする説、物見台説などがあつて、定かではない。

豊浦寺跡（高市郡明日香村豊浦）

豊浦寺は推古天皇十一年（六〇三）に創建された。推古天皇が豊浦宮から小墾田宮に移る際、蘇我馬子が豊浦宮を譲り受け、寺とした。日本で最初の尼寺といわれ、建興寺・小墾田豊浦寺・豊浦尼寺とも呼ばれた。また、向原寺・桜井寺も豊浦寺の地にあつたとされる。九世紀にはすでに堂宇が崩れ、中世には衰亡。講堂跡に現・向

原寺がある。伽藍配置の詳細は不明だが、金堂・講堂・塔・回廊や尼房の基壇と思われる遺構が部分的に確認されている。金堂は、向原寺の南・豊浦集会所の辺りで一部分検出され、規模は東西一七メートル・南北一四メートルにおよぶと想定される。講堂は飛鳥寺とほぼ同規模と推定されるほど巨大。また豊浦寺下層では、豊浦宮のものとみられる石敷きを伴う掘立柱建物跡が見つかっている。

水落遺跡（高市郡明日香村飛鳥）

斉明天皇六年（六六〇）に中大兄皇子が飛鳥に造った漏刻（水時計）台跡と推定される遺跡。基壇は下底辺二二・五メートル四方で約一七度の傾斜をもつ方台形をなす。基壇の四周には、底幅約一・八メートルの、貼石を施した溝がめぐり、基壇上には、四間四方で中心の柱を欠く総柱風の建物が建つ。この建物は、円形柱座を彫り込んだ礎石を地中に据え、礎石間やその外側を数個の川原石で固定するなど特異で堅固な地下構造を有している。また、建物の中心には台石上に漆塗木箱が置かれ、その周りをめぐるように木樋や銅管が埋設されていることから水時計台の跡と推測された。近年、すでに整備が行われている水時計跡の東南部からも、漏刻台以前の大規模建物や長

廊状建物などが検出されており、飛鳥寺西方（西北方）における遺跡の変遷と全体像の解明が進みつつある。

入鹿の首塚（高市郡明日香村飛鳥）

飛鳥寺（安居院）の境内を西に通じ抜けた先に、蘇我入鹿の首塚と伝える花崗岩製の五輪塔が立つ。飛鳥時代、大臣蘇我蝦夷は大いに勢威をふるったが、その子の入鹿も国政を専らにし、その威は父をも凌ぐといわれた。皇極天皇四年（六四五）六月、中大兄皇子や中臣鎌足らは、飛鳥板蓋宮で入鹿を襲い暗殺した。大化改新の序章である。その時入鹿の首がこの地まで飛んできたので、ここに埋めたとも、入鹿の首が空中に舞い上がり襲ってきたので、供養のために五輪塔を立てたとも伝えるが、確かなことではない。五輪塔の高さは一四九センチ、火輪（笠）の背が高く軒は厚い。鎌倉時代または南北朝時代の造立とみられている。

飛鳥池遺跡（高市郡明日香村飛鳥）

飛鳥池遺跡は、敷地の北側を飛鳥寺に隣接し、南側は飛鳥浄御原宮に近接するという、飛鳥の都の中心に位置した生産工房遺跡である。遺跡

名称は近世に築造された溜池「飛鳥池」の池底下から発見されたことに由来する。

発掘調査の結果、遺跡は北半部と南半部の二地区に分かれ、南半部は地形がテラス状に造成された上、掘立柱建物や多数の炉が設けられた工房地区、北半部は官衙風の大規模建築や導水路、方形池などが設けられた工房群の管理地区であったことが判明した。工房地区からは金属加工品、玉類、漆芸品や鼈甲細工品など多様な製品とその製作用具が出土している。とりわけ、わが国最古の鑄造貨幣「富本銭」の生産も確認されるなど、七世紀後半から八世紀初頭の総合的官営工房であったことが明らかになった。また、北半部から大量に出土した木簡の中には、天皇、皇族、宮殿にかかわる「天皇木簡」をはじめ、飛鳥寺など古代寺院にかかわるものが存在している。

大官大寺跡（高市郡明日香村小山）

『大安寺伽藍縁起并流記資財帳』によると、推古天皇二十五年（六一七）に聖徳太子が建立した熊凝村の道場に由来すると伝えられるが、この所伝は後代の仮託とみる向きが強く、寺の創始は、百済川のほとりに九重塔を建て百済大寺と

した、舒明天皇十一年（六三九）と理解すべきであろう。『日本書紀』天武天皇二年（六七三）十二月条に造営官司がみえる高市大寺は、百済大寺を高市の地に移したものであるという（紀寺跡にあてる説などもあるが、比定地未詳）。前出『縁起』によると、天武天皇六年（六七七）、高市大寺は大官大寺（「大官」は天皇の意）と改称されるが、その後も造営は継続したようで、発掘調査で見つかった藤原京条坊にある伽藍は、文武朝の大官大寺と理解されている。平城京遷都に伴い、移建して大安寺となる。

規模は東西一四四メートル、南北一九五メートルで藤原京の六町分を占め、伽藍配置は、回廊が金堂に取り付き、さらに北方の講堂を囲み、金堂の東南に塔を配するもので、大官大寺式とも呼ばれる。主要伽藍のほとんどが焼失した痕跡をとどめており、『扶桑略記』和銅四年（七一二）条の焼亡記事を裏付け、平城遷都後ほどなく造営途上のまま焼失したと推測される。

紀寺跡（高市郡明日香村小山）

七世紀後半に創建された紀寺跡は、百済大寺（吉備池廃寺）の後身である高市大寺の候補地の一つとしてあげられる寺院跡である。発掘調査で

は南北一直線上に配置された南大門跡、中門跡、金堂跡、講堂跡が明らかになるとともに、東に偏して建てられた塔跡、寺域を限る掘立柱塀、工房跡なども確認され、創建当時は一辺二二六畝の寺域をもつ大規模な寺院であったと推定される。その後、藤原京造営の際に条坊道路にあわせて寺域の再整備が行われた。藤原京の廃都に伴って、平城京の東南部に移転したと推定されるが、その規模や伽藍配置などは、未だ明らかになっていない。

酒船石・酒船石遺跡（高市郡明日香村岡）

酒船石は、飛鳥京跡の東に位置する丘陵上にあって、東西の長さ五・五^畝、南北の幅二・三^畝、厚さ一^畝の花崗岩で造られた石造物である。その両側には石を割るために入れたと思われる工具跡が残る。扁平な石の表面には、円形もしくは楕円形の大小四個の窪みを作り、これらを結ぶほぼ直線の浅い溝を彫り込んでいる。その用途について、酒の醸造に使われたとか、油を搾るのに用いたとか、あるいは薬の調合の道具、祭祀にかかわる導水施設などと諸説があるが、確かではない。しかし、この石の東四〇^畝のやや高い所で、ここへ水を引くための土管や石樋が見つかっている

ところから、庭園の施設ではとの説が有力となっている。

酒船石のある丘陵の北裾で、平成十二年（二〇〇〇）に行われた発掘調査で、新たに亀形石造物・小判形石造物が見つかった。この二つの石造物は石槽になっていて造形的にもすぐれたものであり、組み合せて導水施設となっている。この施設では、水は砂岩の切石を積んで造られた湧水施設から小判型石造物（長さ一・六五、幅一^畝）、亀形石造物（長さ二・四^畝、幅二^畝、顔を南に向ける）を通して北へ延びる溝に流れ出す。その周囲には石敷が広がり、東側には階段状の石垣、西側にも段々に石を敷いた遺構が見つかっている。

飛鳥京跡（高市郡明日香村岡）

明日香村の中央部、岡寺山から張り出す段丘の上に置かれた飛鳥時代の宮殿遺跡である。昭和三十四年（一九五九）から発掘調査が行われ、三時期の宮殿にかかわる遺構の存在が確認されている。これを古いものから順にⅠ期・Ⅱ期・Ⅲ期と呼んでいる。検出した遺構、出土した遺物の検討から、Ⅲ期が斉明・天智天皇の後飛鳥岡本宮、天武・持統天皇の飛鳥浄御原宮、Ⅱ期が皇極天皇の飛鳥板蓋宮、Ⅰ期が舒明天皇の飛鳥岡本

宮であることがほぼ確定している。現在、公園として整備されているのはそのⅢ期にかかわる遺構である。

三時期の宮殿遺構で最もその様相がよくわかっているのがⅢ期で、内郭とエビノコ郭、外郭とから構成される。内郭は後の内裏、エビノコ郭は大極殿、外郭は官衙が配置された空間といわれている。また、Ⅲ期は斉明天皇の後飛鳥岡本宮として内郭だけが造営され、天武天皇のときに内郭はそのままで、その東南にエビノコ郭を造営して飛鳥浄御原宮として利用していることが明らかとなっている。

猿石（高市郡明日香村平田）

欽明陵の南西にある小さな森が、皇極（斉明）天皇・孝徳天皇の母にあたる吉備姫王の墓である。その墓域内に猿石と呼ばれる石像が四体置かれている。猿石は、元禄十五年（一七〇二）に欽明陵の南側の水田から掘り出され、一時欽明陵内に置かれていたが、明治時代に吉備姫王墓の墓域に移されたという。花崗岩を用いて作られた四体の石像は、それぞれ一^畝ほどの高さで、頭部を比較的大きく彫り出している。石像は西に面して南北に並ぶが、その面相や姿形から、北か

ら順に女性、山王権現、僧（または法師）、男性と呼びならわしている。像を背中合わせに彫り出しているものもある。

鬼の俎・雪隠（高市郡明日香村平田・野口）

鬼の俎・雪隠は、明治三十一年以来、宮内庁が欽明陵の陪冢の一つとして管理している古墳である。この奇妙な石造物は江戸時代から人々の興味を惹いており、名前の由来は、昔このあたりに鬼が住んでおり、行き交う旅人を捕らえてはこの石の上で調理し、雪隠で用を足したという言い伝えによる。しかし江戸時代の後期、陵墓の探索が本格的になるにつれ、この石造物が古墳の内部施設であるとの認識がなされ、今日では刳り貫き式横口式石槨の代表例となっている。使用されている石材はどちらも花崗岩。俎と呼ばれる石槨の床石は、長さ約四・三メートル、幅約三・三メートルの不整な長方形で、横方向三列と縦方向一列の楔跡が残されている。これは陪冢指定以前に打ち割って、運びだそうとした際の痕跡である。雪隠と呼ばれる蓋石は、床面に合致する部分から約一・三メートル刳り貫かれており、この部分が石槨の空間となる。奥壁の隅はやや丸く仕上げられていて、高さ三分の一ほどから上は内傾した天井と

なっている。また、入口付近には閉塞のためと考えられる溝が天井に刻まれており、玄門の両端は閉塞の石を嵌め込むように段差が設けられている。近年、この床石の東側にも同様の床石が存在していたことが報告され、一つの墳丘に二基の石槨が内包されていた可能性が高いと考えられる。

檜隈寺跡（高市郡明日香村檜隈）

東漢一族の氏寺とされる寺院跡。『日本書紀』朱鳥元年（六八六）八月条に、封戸百戸を施入したとあり、この時期にはすでに存在していたと考えられる。発掘調査によると、伽藍は西向きの特異な配置で、西門を入ると正面に塔、南に金堂、北に講堂がある。回廊は講堂及び金堂に取り付き、塔を囲むことが判明している。出土瓦類によると、七世紀後半にまず金堂と西門が建てられ、やや遅れた七世紀末頃にかけて講堂・塔が造られたと考えられる。また、七世紀前半に遡る瓦類も出土しており、付近に前身寺院（もしくは仏堂）の存在も推測される。平安時代後期には、講堂基壇の補修が行われているが、次第に荒廃し廃絶後の塔心礎上に十三重石塔が建てられている。中世史料にみえる「檜隈道興

寺」がこの寺の後身とみる理解もあるが不詳。江戸時代中頃には十三重石塔を残すのみとなったらしい。現在、重要文化財の十三重石塔が残り、明治四十年（一九〇七）に移された於美阿志神社の境内になっている。

川原寺跡（高市郡明日香村川原）

現在は弘福寺という寺になっている。斉明天皇川原宮の故地に、斉明天皇没後、息子・天智天皇がその冥福を祈って創建したと考えられている。

伽藍配置は、川原寺式と称される。中心部分は、二つの金堂と一基の塔からなる。最も中核となる中金堂に回廊が取り付き、前庭部に西金堂と塔が向かい合うことなどが特徴。この中枢部は極めて壮麗な空間であったと考えられる。中金堂礎石（柱を支える基礎の石）は、白大理石（瑪瑙石）を用い、精巧な柱座（柱を受けるために礎石の上に彫り出された台座）をもつものとして著名。瓦も複弁蓮華文と称される壮麗な文様を用いる。中金堂外側に壁はなく、列柱空間。堂内は磚仏などで荘厳されていた。

亀石 (高市郡明日香村川原)

橘寺の西方約六〇〇^{メートル}、田園の中の道路沿いにある。長辺四・二六^{メートル}、短辺二・七二^{メートル}、高さ一・九四^{メートル}の大きな花崗岩の下端部に、下向きに動物の顔が彫りだされ、亀がうずくまったような形をしている。古くから亀石と呼ばれ、南西方向を向いている亀石が動いて西を向けば、飛鳥には洪水が起り村は泥の海につかってしまうとの伝説がある。七世紀代の製作と考えられ、用途としては条里の境界を示すためのものとする説、また亀の形をした碑の台石(亀趺)の未完成品と考える説など諸説があつて、よくわからない謎めいた石造物である。

定林寺跡 (高市郡明日香村立部)

立部寺ともいい、聖徳太子建立四十六ヶ寺の一つに数えられている。定林寺の創建は、出土瓦などから飛鳥寺よりやや遅れる七世紀前半と考えられている。小高い丘陵上に占地する寺跡には基壇や礎石などが残存し、発掘調査によって金堂跡や塔跡、回廊跡の一部が確認され、このうち塔跡からは花崗岩製の心礎と菩薩塑像の頭部が発見された。調査の結果、寺域は当初から小規模であつたと見られ、また鎌倉時代に再興

したことが判明している。

建立した氏族は不明であるが、『平安遺文』にある「定林寺妙安寺所司等解」から上宮王家との関係が、また東漢氏の氏寺である檜隈寺と出土瓦が類似することから、東漢氏の影響も指摘されている。

坂田寺跡 (高市郡明日香村阪田・祝戸)

飛鳥地域の南部を流れる飛鳥川東岸の傾斜地に立地する坂田寺跡は、鞍作氏の氏寺であり、豊浦寺と並ぶ飛鳥時代の尼寺である。創建は司馬達等の子・鞍作多須奈が用明天皇二年(五八七)に丈六の仏像を造願して寺を建立したとも、多須奈の子・鞍作止利が飛鳥大仏安置の功により賜った近江国坂田郡の水田二十町をもって推古天皇十四年(六〇六)に造営したとも伝えられる。また、朱鳥元年(六八六)には、天武天皇のために無遮大会を行つた記事も確認されることから、七世紀後半には尼寺としての格式の高さと隆盛を誇つていた点が容易にうかがわれる。

推定寺域西方のマラ石周辺の発掘調査で確認された方形石組池(七世紀中頃に埋没)などから飛鳥時代の古瓦が多量に出土しており、創建もこのころであることは間違いないが、未調査部

分が多く、創建伽藍の詳細については不明な点が多い。

高取城跡 (高市郡高取町高取)

高取城は、南に吉野山を望み、北に奈良盆地を見渡す天険の地、標高五八三^{メートル}の高取山に築かれた城で、近世の山城としては異例の高さと規模をもっていた。この城は、南北朝時代から江戸時代にかけて、主に越智・本多・植村各氏の居城となつてきた。

そもそも高取城は、南北朝時代に南朝方に味方した大和の武士越智氏が支城として、空堀を掘つて築いた「かきあげ城」であつた。天正十三年(一五八五)に百万石の太守として郡山城に入つた豊臣秀長は、要害の地にある高取城を重視して、家臣の本多氏を入城させて城の拡充と整備に努めさせた。これによつて高取城は、山城ではあるが平城式の規模も兼ね備えた雄大な城として面目を改めたという。江戸時代になって、寛永十七年(一六四〇)に植村家政が二万五千石の大名として高取城に入り、以後、植村氏は高取藩主として明治維新までおよんでいる。

城内の諸郭はすべて石垣で固められ、本丸の壮大な石垣は二重構造になつている。五〇〇^{メートル}以

上の山上に造られた山城でありながら、山上の二の門近くに水堀を造り、また広い屋敷地をかかえこむ近世的な城郭に築きかえられている。

尼寺廃寺跡（香芝市尼寺）

北流する葛下川に沿って、J・R和歌山線・国道一六八号線が並走する香芝市北端の尼寺の集落に廃寺跡が遺存している。すなわち、尼寺廃寺跡で北遺跡と南遺跡の二つからなっている。

平成年代に入つての調査によつて、北遺跡は、南北約七〇^{メートル}、東西約四四・三^{メートル}の回廊で塔と金堂を囲む大規模な寺院跡であることが確かめられた。出土瓦の形式から七世紀中頃に塔が造営され、ついで金堂や回廊が構築されたとみられている。塔の基壇は一辺が約一三・六^{メートル}、基壇の中央には地表下一・二^{メートル}のところに塔の心礎が埋まっている。この心礎を中心に、四個の四天柱、その外側に側柱の礎石八個が残っている。金堂と思われる建物の基壇は、南北一八^{メートル}、東西一五^{メートル}の規模をもつが、南北方向が桁行、東西方向が梁間と考えられ、南側の塔跡との関係から、東面する法隆寺式伽藍配置であつたとみられている。

北遺跡から約二〇〇^{メートル}南方にある南遺跡でも

調査が行われ、塔と金堂の基壇と思われる遺構が検出された。金堂跡は南北約一四^{メートル}、東西一二^{メートル}以上とみられ、その西側の塔の基壇は一辺一二・一^{メートル}四方であるという遺跡の状況から、南面する法隆寺式伽藍配置で、七世紀中頃の建造であつたと考えられる。

寺の由緒についてはよくわからないが、聖徳太子建立の葛城尼寺とする説や、敏達天皇の孫の茅渟王とその一族による造営などの説がある。また、この北と南の遺跡について北遺跡を僧寺、南遺跡を尼寺と推定し、僧尼一対の寺院とみなす考えも提起されている。

當麻寺中之坊庭園（葛城市當麻）

格調の高い江戸初期建造の書院の南面に造られた池泉を中心とした回遊式の庭園。園池は心字池型で出島が張り出し、池の西岸に小滝を設け、滝の近くに水分石を配している。園地の石組や飛石部分は大きくよく吟味されている。池の西部分と東部分のつながるところは細くなり、小さな石橋を架けている。庭園の南側の山手と接するところは、一二〇^{センチメートル}ばかりの低い築地塀で仕切っている。當麻寺の東西両塔を背景におさめて、風趣に富む庭園で、面積は約一・一一^{ヘクタール}。築造の

年代は明らかではないが、石州流の茶道の祖として知られる大和小泉藩主片桐石見守貞昌に依頼して、茶室を設け、庭園を改修したとの説がある。

二光寺廃寺（御所市西北窪）

金剛山東麓、御所市西北窪に二光寺という地名があつた。当時は水田となっており、古代寺院跡と思われる痕跡はまったく見当らなかった。平成十六年（二〇〇四）十二月から発掘調査が行われたところ、奈良時代寺院跡が検出され、話題になった。寺名は小字名に因んで二光寺とし、すでに廃寺であるゆえに二光寺廃寺とされた。

検出したのは一棟の建物の東半分にあたる部分で、残余はまだ未調査。その建物の基壇は「乱石積二重基壇」の構造で、基壇の上に礎石があつた。礎石には高低差があり、これは後世水田の整地のために落とし込まれたものであることも判明した。

巨勢寺跡（御所市古瀬）

近鉄吉野線とJ・R和歌山線が連接する吉野口駅のやや北方の両線にはさまれた三角形の地に巨勢寺跡がある。現地には、塔の心礎とそのか

たわらに建つ大日堂という小さな堂に転用された礎石がある。巨勢寺は古代豪族巨勢氏の氏寺であつたと伝えているが、『日本書紀』朱鳥元年（六八六）の条に、封二百戸を巨勢寺に施入の記載があり、平安末期にもなお寺号を残している。

いま残っている塔の心礎には、径八九センチ、深さ一二センチの円柱孔があり、その中央に径一八・八センチ、深さ一・二センチ、さらにこの中に仏舍利を納めるための径一三センチ、深さ五・四センチの小孔がある。また、円柱孔には浅い二重の同心円の溝があり、外側に排水するための水抜き孔をきざんでいて、他に例を見ない様式である。

近年、巨勢寺の寺域を確かめるための発掘調査が行われた。寺域は東西約一〇〇メートル、南北約二〇〇メートルと大きな規模をもち、伽藍配置は金堂と塔が横に並ぶ法起寺式であることが判明したという。

天誅組本陣跡（五條市須恵一丁目）

五條の街中、本陣交差点の北東に桜井寺がある。傍らを通過する国道の改修に伴って、桜井寺も改築されたが、門前に「天誅組本陣跡」の標石が立つ。

文久三年（一八六三）八月、土佐の吉村寅太

郎・備前の藤本鉄石らは、前侍従中山忠光を盛りたてて主将とし、攘夷祈願のための孝明天皇の大和行幸や、武力討幕の先駆けとなろうとして同志とともに挙兵、同十七日、大和五條の幕府代官所を襲い、代官鈴木源内や役人らを倒し、代官所を焼き払った（代官所跡は現五條市役所の地）。いわゆる天誅組の変である。天誅組は桜井寺を本陣と定め、「五条御政府」あるいは「五条御役所」と唱え、陣容を整えている。いま桜井寺には、代官鈴木源内ら五人の首級をのせたと伝える石の水盤が残されている。

賀名生皇居跡（五條市西吉野町和田）

建武の新政に失敗した後醍醐天皇は、延元元年（一三三六）十二月二十一日に京都からひそかに脱出して、吉野地方に逃れて来た。そのときまず留まったところがこの地（旧賀名生村）である。『太平記』にその事が象徴的に記されている。当時の賀名生は「里遠く人煙幽に、山深して鳥の声も希なり柴という物を囲家とし」とある。この時、土地の豪族、堀孫太郎信増の館を皇居にしたという。その後、後醍醐天皇は吉野山に移るのである。

柳の渡し跡（吉野郡大淀町北六田）

吉野川北岸と南岸をつなぐ渡し場の跡である。柳の木の下に天明六年（一七八六）に大阪の山上講が建てた石灯籠が遺り、台座の西面には「右よしの」、東面には「左よしの」と刻まれている。伊勢街道から吉野山への道しるべで、交通の要衝地であつたことがうかがえる。また、吉野山や大峰山に参詣する山伏や山上講の人々の奥駆の駆出所（結願所）にもなっていた。柳の下の役行者像に参拝し、吉野川に下りて水行を行い「父母のをらで着せたるから衣、今かき流すはらい川水」と唱えるのが慣例で、昭和の初めまではそういう機能も残っていた。

また、『万葉集』巻七と巻九に「音に聞き目にはいまだ見ぬ吉野川 六田の淀を今日見つるかも」「かはつ鳴く六田の川の川楊のねもころ見れど飽かぬ川かも」と詠まれている「六田の淀」に想定され、古来よく知られていた。平安時代の『醍醐寺根本僧正略伝』には、聖宝が金峯山の要路にあたる川辺に渡しを開いたとあり、当所にあてられる。

比曾寺跡（吉野郡大淀町比曾）

聖徳太子建立諸寺の一つに数えられており、

吉野寺・現光寺・比蘇寺などと称したこともある。現在は禅宗の世尊寺である。奈良時代には「釈門之秀」として道慈と共に並び称せられたといわれる神叡をはじめ、碩学の僧がこの寺に入つて勉強につとめたと伝えている。平安時代には、清和・陽成・宇多天皇の行幸があり、理源大師聖宝とのかかわりも深い。

創建時の寺は南面する伽藍で、東西両塔をもつ薬師寺式の配置であつたことが、今に残る塔跡の礎石や南大門の跡などによつて知られる。西塔は早くに焼失、鎌倉末期に再建された東塔（三重塔）は、一六世紀末頃に豊臣秀吉が造営中の伏見城に移したが、さらに慶長六年（一六〇一）に徳川家康がこれを近江国の園城寺に移建したという。

西行庵（吉野郡吉野町吉野山）

金峯神社前の坂道を登つて右方への道をたどると、やがて左手に下がる道が分岐する。付近は奥の千本、桜林の中を下ると南向きの台地にさやかな西行庵がある。かつてを偲んでの小さな庵である。『新古今和歌集』の代表的歌人として知られる西行法師（一一一八～一一九〇）が俗界を避けて三年ほど隠棲したところと伝えている。

西行は、もと佐藤義清といい、北面の武士として鳥羽院に仕えたが二十三歳で出家し、諸国を行脚した。西行の歌集『山家集』には、「吉野山やがて出でじと思ふ身を花散りなばと人や待つらむ」の歌があるが、吉野山の桜を詠んだ歌が多く、愛着の並でなかつたことが知られている。かつて、西行庵に納められていた西行法師の木像は、いま吉野水分神社に移されている。

鷲家の伊勢街道道標（吉野郡東吉野村鷲家）

鷲家は、ほぼ東西に走る高見越え伊勢街道と、鷲家川沿いに南西から延びてくる東熊野街道の支線の交差する交通の要地である。江戸時代、高見越え伊勢街道（いま一部は国道一六六号線が踏襲）は、和歌山藩主徳川氏の参勤交代に用いられ、鷲家村は和歌山藩領に属した。村落内に本陣や脇本陣となる宿が設けられていた。

街道の交差するあたりに、伊勢街道の道標が立っている。文政十一年（一八二八）に岩井庄兵衛によつて建てられた。道標は花崗岩製、高さは一五〇^{センチ}、幅二六・四^{センチ}、奥行二七・四^{センチ}、頂部に常夜灯をのせている。行先は次のように示されている。

東 右紀州かうや 左大峯山たかはら

南 右いせ 江戸 左はせ大坂 ミち
西 右小川谷河上 左いせくまの 道

南面に「右いせ 江戸」と刻んでいるが、この地から遠く江戸を指しているものとして、大和に現存する道標の中では大変珍しく注目されている。

奈良の陵墓と古墳

聖武陵・光明陵（奈良市法蓮町）

佐保山が西へ延びていく丘陵の南斜面に並列するように位置し、二陵とも陵形は山形である。

『東大寺要録』によると山陵造営後は東大寺によつて管理がなされ、さらには眉間寺が創建されて、陵の奉仕を司っていたとされる。この寺は明治維新時に廃絶するまで隆盛を誇つたようで、陵の治定においても寺の存在が大きな理由となった。しかし陵そのものは戦国時代の永祿年間に、松永久秀によつて佐保山一帯に築かれた多聞城の域内に取り込まれ、その際に大きく改変された可能性が高い。

元明陵（奈良市奈良阪町）

元明天皇は第四十三代の天皇であるが、生前から自らの葬儀は簡略に実施することを遺命した。すなわち火葬した場所をそのまま墓とせよという薄葬の思想であり、現在その陵は平城山の西方に延びる丘陵上に治定されている。

現在の地に本陵が治定された経緯は、江戸時代に「函石」と称する方形の石が出土し、この石に刻まれた銘文から『東大寺要録』に図示された元明天皇の陵碑であると判断されたことによる。幕末の修陵の際に陵碑は現在地に運ばれたと考えられ、明治三十二年には、原寸大の模造碑がすぐ横に建立された。

元正陵（奈良市奈良阪町）

現在は道路が丘陵の真ん中を通るために分断されているが、元明陵と同じ丘陵上に立地する。

元明陵が現在地に治定された後に、現在地が陵とされ、幕末に修陵された。治定の年月日は慶応元年のことであり、元明陵と併せて整備が図られたものと考えられる。

陵形は山形とされ、明確な墳丘は存在しない。

『続日本紀』には火葬から改葬までの記事が一年半にわたつて記述されており、元明天皇よりは盛大な諸儀式が実施されたことがうかがえる。

宇和奈邊・小奈邊陵墓参考地

ヘウワナベ・コナベ古墳（奈良市法華寺町）

平城京の北に広がる古墳群のうち、磐之媛命陵とともに佐紀古墳群の東群を構成する代表

的な古墳、墳丘の規模などから仁徳天皇の妃、もしくは皇子・皇女の墓の可能性が指摘される。

墳丘長はウワナベ古墳が二六〇メートル、コナベ古墳はやや小さく二一〇メートルである。コナベ古墳には両側に造出があり、一方ウワナベ古墳は、西側のみに造出が存在している。どちらの古墳も内部施設、副葬品は明らかではないが、長持形石棺が出土した可能性も指摘される。墳丘上で採集された埴輪の特徴から、コナベ古墳がやや先行して築かれたものと考えられている。

磐之媛命陵（奈良市佐紀町）

ヘシアゲ古墳

佐紀古墳群東群内の盟主的な位置にある古墳である。『日本書紀』によれば、仁徳天皇が八田若郎女を寵愛したために、磐之媛命の怒りが解けず難波宮にも戻らなかった。それゆえ仁徳天皇陵が大阪府堺市にあるにもかかわらず、皇后陵が奈良盆地にあるとされる。

墳丘の長さは二一九メートル、後円部の直径は一三〇メートル。東側くびれ部には造出が認められる。また、現状では前方部正面のみに水を湛えた二重周濠が存在しているが、地形図では明らかにこの周濠が後円部にまで廻っている様子がうかがえる。

垂仁陵（奈良市尼ヶ辻西町）

〈宝来山古墳〉

大きさは全長が二二七^{メートル}、後円部径一二三^{メートル}、前方部幅一一八^{メートル}、前方部、後円部ともに三段築成である。周りには鍵穴形の周濠がめぐらされており、前方部東側濠は江戸時代に灌漑池として拡張されている。この拡張された周濠内には垂仁天皇によつて常世国に非時香菓を求めて使いに出されたと『日本書紀』に記されている田道間守の墓とされる小島がある。

日葉酢媛命陵（奈良市山陵町）

〈佐紀陵山古墳〉

成務陵の東側に接して築かれた前方後円墳で、墳丘は全長二〇〇^{メートル}強、後円部径は約一二七^{メートル}である。現在は垂仁天皇の皇后日葉酢媛命陵として治定されているが、江戸時代には神功皇后陵に治定されていた時期もあった。

本古墳は大正年間に大規模な盗掘の被害を被つたため、皮肉にも佐紀古墳群内で唯一内部施設・副葬品の情報を知ることができる。その内部施設は一般の竪穴式石室とはやや異なり、扁平な割石を小口積みにした竪穴式石室の短辺には小さな穴の開けられた板石が立てられていた。さ

らにこの石室に盛土した上には石棺の蓋のようなものが置かれていたらしいことが、残された絵図から判断できる。

成務陵（奈良市山陵町）

〈佐紀石塚山古墳〉

佐紀古墳群の西群を占める古墳で、日葉酢媛命陵・称徳陵とともに「佐紀三陵」と呼ばれている。この三陵のうち本古墳は台地の西縁に築かれたためか、墳丘の東と西では数^{メートル}の比高差がある。さらに前方部の長さも拝所を挟んで数^{メートル}の違いがある。西側で全長を計測した場合には二二〇^{メートル}、後円部径一三二^{メートル}、前方部幅一一二^{メートル}である。

残された文書資料から三回の盗掘にあったことが知られている。一度目は平安時代、あと二回は江戸時代初期と幕末である。これらの記録から内部施設は竪穴式石室に納められた長持形石棺があり、副葬品として剣・玉・鏡が存在していた。なお、本古墳が成務天皇の陵に治定されたのは江戸時代元禄のころとされ、それまでは後述の神功陵が成務陵とされていたことがあったようである。

神功陵（奈良市山陵町）

〈五社神古墳〉

佐紀古墳群のうち西群の一面を占め、主軸をほぼ南北に向ける前方後円墳で、北西から延びる尾根を整形した、いわゆる丘尾切断によつて築造されている。全長は二七三^{メートル}、後円部径一九四^{メートル}、前方部幅一六八^{メートル}、周囲には現在七つに区分された濠がめぐらされている。しかしこれらの濠は文久の修陵時に掘削された可能性が高く、古墳築造当初には存在しなかったと考えられる。近年墳丘の整備工事に伴う調査や、墳丘の測量調査などが実施され、埴輪などの遺物が出土した。

なお、特別拝所内に八基の灯籠が置かれ、延享二年（一七四五）から寛政二年（一七九〇）までの年号が刻まれている。これらの灯籠は、文久年間に現在地が神功陵に治定される以前は、当時神功皇后の陵に治定されていた現在の日葉酢媛命陵に献納されていたものを、明治年間に移設したものである。

黄金塚陵墓参考地（奈良市窪之庄町）

〈黄金塚古墳〉

奈良市の南端に位置し、東から延びてくる丘

陵の南側斜面に立地する。被葬者は、天武天皇の皇子舎人親王の可能性が指摘されている。現在宮内庁が参考地として指定している範囲は、一辺二五メートルほどの四角形の範囲にすぎないが、南辺を除く三辺には最大高さ四メートルに及ぶ大規模な土手がめぐらされており、これらの施設もこの古墳に伴うと考えることができる。

内部施設は、通常榛原石と呼ばれる板石によって築かれた磚槨式の横穴式石室、戦後に実測調査された結果では、石室の長さは約一三メートル、玄室は長さ約三メートルとなる。この玄室の壁は下から約一・六メートルの高さまでは垂直に積まれ、その上は四方から内傾するように積まれている。副葬品については明らかでなく、かつて石棺、もしくは棺台に使用されていたと思われる石材が持ち出されたと伝えられる。平成十七年には、石室の前に石敷きがあることが確認された。

鷲塚古墳 (奈良市雑司町)

奈良市街地東方の若草山にある全長一〇七メートルほどの前方後円墳で、前方部を南に向けて、山の背を切断するように幅四メートルほどの濠の痕跡が残っている。後円部は山頂に位置し、奈良盆地と京都山城を望む非常に眺望が良い立地にある。

前方部の中心付近に円筒埴輪列が確認されており、他に家形、船形、蓋形などの形象埴輪が出土し、墳丘のほぼ全面に葺石が認められる。後円部埋葬施設は調査されていないが、前方部付近の工事により内行花文鏡などが出土し、その周辺から滑石製の斧形石製品が採集されている。築造は四世紀後半。

後円部の頂には江戸時代に建てられた「鷲塚」の石碑がある。清少納言の『枕草子』に出てくる鷲塚であり、元明天皇の平城山陵であると伝えられているが、元明天皇の陵は奈良坂近くと考えられており、鷲塚ではない。

佐紀盾列古墳群 (奈良市佐紀町)

全長二〇〇メートルを超える大型前方後円墳を七基含む、日本最大級の古墳群のひとつである。これらの前方後円墳の前方部はほぼ南を向き、その周辺に前方後円墳、方墳、円墳など計五十基ほどが分布している。やや南に離れた垂仁陵を含めたこれら大型前方後円墳は、出土遺物や埴輪などから四・五世紀を中心と築造されたと考えられ、当時の政治的中枢である畿内政権の大王の墓を含む古墳群と思われる。

約三百年後の平城京建設によって、全長二五

〇メートルの平城陵古墳の前方部や、神明野古墳など一〇〇メートル級の古墳が複数破壊されたが、平城京に北接する古墳の多くは「松林苑」と呼ばれる平城宮の苑に取り込まれており、積極的に古墳が再利用されていたことが判明しつつある。

塩塚古墳 (奈良市歌姫町)

佐紀盾列古墳群の西群の丘陵上に位置する、全長一〇五メートルほどの前方後円墳。築造は五世紀。馬蹄形状の周濠がめぐるが、前方部前端で濠は途切れており、前方部は後円部に比べて著しく平坦になっている。これは奈良時代の平城京に伴う「松林苑」という苑に古墳が取り込まれ、改変を受けたためと考えられ、古墳西側の谷沿いには現在も松林苑の西辺を画する築地の痕跡が残る。周濠の調査では、葺石は確認できず、円筒埴輪片とともに奈良時代の瓦が出土していることから、本来の前方部はもともと高く、周濠も全周していたものを、前方部を削平して周濠を埋めて平坦地を造り、建物を建てていた可能性が指摘されている。

猫塚古墳 (奈良市佐紀町)

佐紀盾列古墳群の一基で、西群の東側の低い

丘陵に位置する。現状では竹藪となり墳形ははっきりしないが、その後の周辺調査から全長一二〇メートル、前方部を西に向ける前方後円墳と考えられている。後円部の埋葬施設は不明。築造は四世紀後半。

平城京に北接する松林苑の南西隅に位置し、前方部の西側外堤が西面築地、南側外堤が南面築地に相当するものと考えられ、現在もその痕跡を地上にとどめている。また、前方部北側には石敷きが、北側外堤の推定位置には二×九間の長大な掘立柱建物が検出されていることから、周濠を苑池、墳丘を築山として苑内に取り込まれ、大きく改変されたものと考えられている。

瓢箪山古墳（奈良市佐紀町）

佐紀盾列古墳群の一基、全長九六メートルの前方後円墳で、前方部は南向きである。後円部の埋葬施設は不明である。周濠は馬蹄形であるが、前方部前端中央から前方部西側南半分に周濠はめぐっていない。その部分には、衛門戸丸塚古墳があり、こちらが先に築造され、あえて近接して瓢箪山古墳を築造したため、変則的な周濠となったとみられるが、その理由は不明である。築造時期は、銅鏡が十四面出土した衛門戸丸塚古

墳を四世紀後半とするとそれに続く時期と考えられる。

杉山古墳（奈良市大安寺町）

奈良盆地北東部の山地より流れ出る能登川の扇状地に位置する、全長一五四メートルの前方後円墳。築造は五世紀中ごろ。西側の大安寺墓山古墳、野神古墳とあわせて大安寺古墳群を形成している。奈良時代に平城京内の大安寺に取り込まれたため墳丘の改変が著しい。周濠が埋められてその上に僧房が建てられた。また前方部の一部も削平され、大安寺境内の整地に用いられ、削られた前方部に瓦窯群が築造されている。周濠は盾形で、葺石と埴輪をもつが、埋葬施設は確認できていない。

石のクラト古墳（奈良市神功町・京都府木津川市）

奈良県と京都府の府県境に位置する上円下方墳。一辺一三・八メートルの下方部と、直径九・七メートルの上円部からなる。発掘調査により、その築造過程と内部構造とが明らかとなった。まず、古墳の築造前に切土・盛土により平坦面を造成し、礫を敷き詰める。その後、横口式石槨を設け、最後に墳丘を築く。墳丘は土嚢積みの版築工法に

よって築かれており、葺石がこれを覆う。おもな出土遺物には銀装大刀の刀装具、金製玉・銀製玉・琥珀玉、金箔、棺の一部とみられる漆片、土器がある。築造時期については諸説あるが、大まかには平城京への遷都前後と考えられている。

太安萬侶墓（奈良市此瀬町）

大和高原の西端にあたる山間の通称トンボ山と呼ばれる南向きの急斜面地に見つかった奈良時代の火葬墓である。昭和五十四年（一九七九）一月、茶木の植え替え作業中に墓誌が偶然に発見され、墓誌から太安萬侶の墓であることが確認された。一辺約一・八メートルの土坑を掘って内部に木炭を敷き、文字面を下に向けて墓誌をおき、その上に木櫃をおいて周囲を木炭で包み、さらにその上に直径四・五メートルほどの円丘が載る構造であった。

墓誌は長さ二九・一センチ、幅六・一センチ、厚さ〇・一センチの短冊形で、楷書で「左京四條四坊從四位下勲五等太朝臣安萬侶以癸亥年七月六日卒之養老七年（七二三）十二月十五日乙巳」の四十一字が刻まれていた。この発見により『古事記』の編者として知られていた太安萬侶の実在が確認された。

富雄丸山古墳（奈良市大和田町）

富雄川の西岸丘陵上に立地する直径約八六メートル、東側から見て高さ約一〇・五メートルの奈良県最大級の円墳である。築造は四世紀末。埋葬施設は、主軸を南北方向にもつ粘土槨で、南北一〇・六メートル、東西幅六・四メートルの二段に掘り込まれた墓坑に長さ約六・九メートルの木槨が設置されていた。

伝富雄丸山古墳出土とされる遺物に京都国立博物館所蔵の刀子、斧、琴柱形石製品など多数の石製品、天理参考館所蔵の銅鏡がある。このうち出土した鍬形石片と京都国立博物館所蔵の鍬形石とが接合し、本墳出土品と確認された。

三陵墓西・東古墳（奈良市都祁南之庄町）

奈良盆地の東方の大和高原中の都祁盆地に位置する。三陵墓の呼び名は隣接する三基の古墳から付けられた名称と見られるが、周囲には小古墳が点在しており、それも含めて古墳群をなしている。

三陵墓西古墳は、直径四〇メートルの円墳で、長大な割り竹形木槨をもつ粘土槨で、既に盗掘を受けていたが、勾玉、管玉など玉類、剣、刀、鉄鏃などの鉄製武器のほか琴柱形石製品、堅櫛が出

土している。三陵墓東古墳も、明治から大正にかけて盗掘を受け、銅鏡などの出土が伝えられている。墳丘は三段築成の全長一一〇メートルほどの前方部の短い帆立貝形の前方後円墳と見られ、葺石と円筒埴輪、朝顔形埴輪、家形埴輪が確認されている。

築造時期は五世紀で、西古墳、東古墳の順に相次いで築造された。大和高原には大型の古墳は少ないが、畿内政権と密接に関わった首長がいたことを教えてくれる。

小治田安萬侶墓（奈良市都祁甲岡町）

甲岡の丘陵南斜面に位置する奈良時代の火葬墓。明治四十五年（一九一二年）に茶畑の植え替え時に墓誌が発見され、その被葬者名が判明した。その後、昭和二十六年（一九五一年）に発掘調査が行われて、木炭の入った方形の墓坑などが確認され、その上に火葬骨を納めた骨櫃と墓誌が置かれ、盛り土がされたとみられているが不明な点が多い。墓誌にある小治田朝臣は、『新撰姓氏録』によれば、蘇我氏の同族で、飛鳥の小懇田に住んでいたことから小治田臣と呼ばれたとみられ、天武朝に朝臣の姓を賜っている。小治田安萬侶は、文武、元明、元正、聖武天皇に仕えた人

物で、官職その他の経歴は不明。

墓誌は主板と副板の計三枚、長さ二九・七センチ、幅六・二五センチ、厚さ三・四ミリの鋳銅製で表面を鍍金している。同地からは、奈良三彩の小壺片、鉄製品、須恵器、土師器とともに和銅開珎銀銭十枚が出土しており、副葬品とされているが、確かではない。

美努岡萬墓（生駒市萩原町）

明治五年（一八七二年）に銅製の墓誌が発見された。出土地は生駒谷に面する丘陵上の竜王塚と呼ばれる微高地である。出土状況は明らかではないが、その後の発掘調査により、木炭を用いた火葬墓で、小さい盛り土をもつ墳墓と考えられている。現在は住宅地の中にあり、墓誌の銘文が刻まれた石碑が建つ。墓誌は縦二九・七センチ、横二〇・九センチ、厚さ二・三ミリの全部で百七十六文字である。被葬者は「美努岡萬」で、『日本書紀』や『続日本紀』に出てくる美努連岡麻呂とわかる。墓誌によると大宝二年（七〇二年）に遣唐使として唐に渡り、その後、宮内庁主殿寮の長官を務め、神龜五年（七二八）六十七歳で死去、墓誌は死後三年目に作られている。

長屋王墓（生駒郡平群町梨本）

竜田川の東岸にある直径約一五呎の円丘である。長屋王は天武天皇の孫で、『続日本紀』には神亀六年（七二九）に生駒山に葬ったとのみ記載され、明確な葬地は示されていない。野淵龍潜の『大和国古墳墓取調書』によれば、明治の中頃に「長屋王墓」は「ナガラ塚」と呼ばれていたが、埋葬施設等は不明。その後、宮内庁により管理され、現在に至る。近年の周辺の発掘調査により、現在の長屋王墓と後円部が同心円に重なる位置に前方後円墳が確認された。これは梨本南二号墳と呼ばれ、古墳周溝の一部を調査したところ、葺石、円筒埴輪片、須恵器片が出土している。

三里古墳（生駒郡平群町三里）

竜田川の東岸、矢田丘陵から南西に延びる尾根上の古墳である。築造は六世紀後半ごろ。早くに墳丘が破壊されており墳形は明確ではない

が、直径二〇呎ほどの円墳もしくは全長三五呎ほどの前方後円墳と考えられている。埋葬施設は両袖式の横穴式石室で、石室の天井石と側壁の一部は失われていたものの、玄室の奥壁下に石棚と呼ばれる板石による特殊施設が確認された。石棚をもつ横穴式石室には通常、結晶片岩が用いられるが、三里古墳は花崗岩を用い、石棚が低い位置にあるなど特異な点もあるが、石棚の類例は和歌山県紀ノ川流域に多く見られることから、紀氏との関係が指摘されている。

西宮古墳（生駒郡平群町西宮）

平群谷の中心部、竜田川の西岸にある廿日山丘陵南斜面に位置し、一辺三五・六呎、高さは南から見て七呎ほどの三段築成の方墳である。築造は七世紀ごろ。墳丘全体に貼石が確認され、特に斜面部には約三五度の勾配でタイルのように面を揃えて大型の石材を貼り付けていた。埋葬施設は両袖式の横穴式石室で、墳丘の中心と玄室の中心を重ねて、開口部は一段目のテラス上となる位置に造られている。玄室の長さは三七呎ほどで、側壁、奥壁、天井石とも一石積み

八呎ほどで、精緻な切り石の巨石を用いた横穴式石室として古くから有名である。玄室には兵庫県産の竜山石を削り貫いた石棺が残されているが、蓋はない。古くから開口していたようで、礫に経文の文字を書いた一字一石経などが五百六十四点も玄室から出土しており、近世の仏教信仰によるものとみられる。

烏土塚古墳（生駒郡平群町春日丘）

竜田川の右岸、生駒山地より延びる廿日山丘陵上にある前方後円墳で、全長約六〇呎、前方部を北に向けている。築造は六世紀後半ごろ。埋葬施設は、花崗岩の巨石を用いた両袖式の横穴式石室で、全長一四・二呎、棺を納める玄室は長さ六呎である。玄室奥と羨道部に組合せ式の石棺が納められていた。玄室の石棺東側面には斜格子文の線刻が見つかり、県内での石棺装飾の数少ない類例である。石室の前庭部に人物や家形埴輪などの形象埴輪が須恵器の甕や子持ち器台とともに出土し、畿内での埴輪祭祀の終焉段階の資料として重要である。

藤ノ木古墳（生駒郡斑鳩町法隆寺）

法隆寺の西三五〇呎に位置する直径約四八

竪、高さ九メートルほどの円墳である。築造は六世紀後半ごろ。大きな盗掘を受けず東アジアでも超一級の金銅製馬具のセットが石室内から出土し、納められた石棺が未盗掘であったことでも有名。昭和六十年（一九八五）、墳丘調査が行われた際に、南東に開口する横穴式石室が確認され、引き続き埋葬施設と墳丘の調査が行われた。埋葬施設は両袖式の横穴式石室で、全長約一四メートル、玄室長約六メートルの典型的な畿内形石室である。石室入り口の羨道部には人頭大の閉塞石が積み上げられた状態であった。玄門部には須恵器の大型器台が立ったままで、石棺の奥壁の間には鉄鏃、挂甲、金銅製の馬具など大量の副葬品が残されていた。石室内部と石棺はベンガラによって赤色に塗られていた。棺内には、東枕の成人男性二人の人骨、銅鏡四面、刀装具を残した刀剣類、金製空玉、金製の耳飾り、金銅製の飾履などが、極めて良好な遺存状況で出土した。副葬品は国宝に指定され、橿原考古学研究所付属博物館に展示されている。

仏塚古墳（生駒郡斑鳩町平尾）

法隆寺後背の通称「寺山」丘陵のさらに北側の丘陵間の谷にある一辺約二三メートル、高さ四・六メートル

の方墳である。埋葬施設は南に開口する両袖式の横穴式石室で、全長は九・四メートル、玄室は長さ三・九メートルほど。築造時期は六世紀末以降とみられ、前方後円墳が終焉を迎え、方墳に切り替わる時期の古墳といえる。この古墳を特徴付けるのは、高さ一二メートルの銅造りの阿弥陀如来立像の出土に代表される中世の仏堂としての古墳の再利用である。横穴式石室が祠として利用されることは少なくないが、これほどまとまった仏具が出土することは珍しい。大量の瓦器と灯明皿を除けば、多くは火舎、六器、花瓶などの仏具で、鎌倉後期から室町初期における密教系の仏堂として横穴式石室を再利用したことを示す。仏塚古墳の名前もこれに由来するものと考えられる。

小泉大塚古墳（大和郡山市小泉町）

矢田丘陵の東南の丘陵上に立地する前方後円墳である。築造は四世紀ごろ。現在は、後円部のみが保存されており、前方部は完全に削平されて円墳のようである。墳丘は全長約九〇メートルの前方後円墳で、前方部は西を向き、後円部は二段築成。葺石、埴輪は確認されていない。埋葬施設は南北方向に主軸をもつ全長五・五メートルの竪穴式石室である。

島ノ山古墳（磯城郡川西町唐院）

奈良盆地の中央、寺川と飛鳥川に挟まれた南東から北西に延びる微高地上の北端に築かれた大型前方後円墳である。築造は五世紀初めごろ。古墳の主軸はこの微高地の方向に沿い前方部を南東に向ける。全長二〇〇メートル、後円部径九八メートル、前方部幅九三メートルで幅約三五メートルの水をたたえた周濠に囲まれている。墳丘は三段築成のようであり、葺石と埴輪列をもつ。後円部は墳頂が削られ埋葬施設の内容は不明だが、かつて南北に主軸をもつ竪穴式石室があったと推定され、その天井石と思われる石が隣接する神社などに置かれている。

衾田陵（天理市中山町）

〈西殿塚古墳〉

継体天皇皇后手白香皇女の衾田陵に治定されている前方後円墳。龍王山麓に位置し、前方部を南に向ける。全長は二三〇メートル、後円部径は一四五メートルである。最大の特徴は、東から西側にかけての傾斜面に築造されたため、東西の比高が一三メートルもあり、よって西側には「エプロン状張り出し部」と称される基壇が存在することである。また墳丘の特徴として、前方部頂上に一辺約二

○以上の方形壇が存在するが、埋葬施設を示すものか否かについては不明である。墳丘周りの発掘調査によって葺石の基底石が検出され、本来の墳丘が現在の宮内庁の敷地外まで広がっていることが明らかにされた。

崇神陵（天理市柳本町）

へ行燈山古墳へ

大和盆地東南部に展開する大和古墳群の中核をしめる古墳の一つである。龍王山麓の西に延びる丘陵の上に築かれた、全長二四二メートルの前方後円墳であり、前方部を西に向ける。幕末に崇神陵と治定されたが、それ以前には景行天皇の陵に治定された経緯があり、いずれにせよ幕末においてかなりの修陵が施されたものと考えられる。特に壕については貯水量の増加を目的とした堤体の嵩上げ・浚渫工事がなされており、現在の墳丘裾がどこまで本来の状況を残しているかについては不明である。

景行陵（天理市渋谷町）

へ渋谷向山古墳へ

崇神陵と同じく龍王山麓の丘陵上に前方部を西に向けて立地する前方後円墳で、全長は約

三〇〇メートル、前期古墳の中では最大規模を誇る。現在墳丘の周囲には九ヶ所に区切られた周壕が存在しているが、本陵についても幕末に大規模な修陵が加えられたことが知られており、現状が築造時の形状とは考えられない。修陵は拝所、鳥居を整備するなど、尊皇思想の現れであるが、灌漑施設として壕を整備した側面もある。

調査により葺石の基底石に五〇センチほどもある大きな石を据え、その上には拳大から人頭大の石を用いた葺石が検出された。

大市墓（桜井市箸中）

へ箸墓古墳へ

箸墓古墳は、邪馬台国の女王卑弥呼の墓という説もあり、わが国において最も著名な古墳の一つである。現在は宮内庁によって第七代孝霊天皇皇女倭迹迹日百襲姫命の大市墓として管理されている。墳丘長は二八〇メートル、前方部の先端がバチ状に広がる形状は前方後円墳の中でも古相を示すとされる。近年、周辺の調査が進められてきており、徐々に古墳の詳細が明らかになりつつあるものの、内部施設、副葬品については全く知られていない。ただ、墳丘裾部分に板石が散見されることから、竪穴式石室の存在が予想される。

平成十年九月の台風七号により、多くの樹木が倒壊し、墳丘に大きな損傷が生じた。この復旧工事に当たって、根起き箇所などから多数の二重口縁壺形埴輪、特殊器台形埴輪が採取された。

舒明陵（桜井市忍阪）

へ段ノ塚古墳へ

現在地の状況が、『日本書紀』、『延喜式』の記述とよく一致し、舒明天皇の陵である可能性が高いと考えられる。三段の方形壇の上に八角形の墳丘が築かれる、八角形墳の一つとされているが、墳丘調査の結果、単純な八角形に復元することが難しいという結果が示された。現在の鳥居のほぼ真後ろあたり、すなわち墳丘の正面に長さ四・三メートルほどの短い辺があり、そこからそれぞれ一六・五メートルほどの辺が延び、その端部には一三五度に頂部が加工された隅角石が据えてあった。正面とその左右は多角形を示すように隅角石を配置するが、真後ろの辺は直線となる不整形な七角形に復元できる。また、この上段の墳丘表面は榛原石と呼ばれる扁平な板石を積み上げて築かれていることが明らかとなった。内部施設については、石棺を安置した横穴式石室である可能性

が高いと考えられる。

東大寺山古墳（天理市櫟本町）

盆地東縁の丘陵上最高所付近に築かれた前方後円墳で、前方部を北に向ける。築造は四世紀後半ごろ。全長一四〇メートル、後円部径八四メートルで葺石・埴輪をもつ。埋葬施設は後円部中央の墓壇内に墳丘主軸に平行して築かれた粘土槨で、粘土に包まれた木棺の長さは七・四メートルである。被葬者の頭位は北側で、棺底には朱が塗られていた。

副葬品には勾玉・管玉、滑石製小型壺、石製鏃、鉄形石・車輪石・石釧があり、特に鉄形石は二十七点も出土した。また被覆粘土中からは多量の刀剣・鉄鏃・銅鏃のほか革製漆塗りの盾と短甲が出土。特に大刀には鳥形や家形の装飾が付いた三葉環頭があり、さらに中国・後漢の「中平」年（一八四～一八九）の金象嵌銘をもつ大刀は国内出土最古の紀年銘遺物として注目される。

別所大塚古墳（天理市別所町）

豊田山丘陵から西に延びる尾根上にあり石上・豊田古墳群内の西に位置する前方後円墳。築造は六世紀後半ごろ。全長一二五メートル、後円部径八五メートル、前方部幅九〇メートルで前方部を北東に

向ける。墳丘は二段築成で葺石や埴輪が見られる。後円部は一部損壊するが墳丘西側はよく残り、墳丘をめぐる幅一三メートルほどの周濠が地形に残る。埋葬施設は南に開口する横穴式石室と思われるが採土により石室の石材は失われている。その痕跡からみると石室は全長約二〇メートル、幅約三、四メートルでかなり大型の横穴式石室であったことが推定される。

ウナリ塚古墳（天理市石上町）

豊田山丘陵から北に延びる尾根上に築かれ、石上・豊田古墳群の北部に位置する前方後円墳で前方部を北に向ける。築造は六世紀中ごろ。全長一一〇メートル、後円部径六八メートル、前方部幅一〇〇メートル、墳丘は二段築成で埴輪を有し、西側くびれ部には造出がある。また前方部前面には平坦面が見られる。埋葬施設は南に開口する横穴式石室で、玄室は巨石を積んで構築され、奥壁は三段、側壁は四段積みである。

西山古墳（天理市杣之内町）

東から延びる尾根を利用して築かれた前方後円墳で前方部をほぼ西に向ける。葺石と埴輪をもつ。全長一九〇メートル、後方部の一辺九〇メートル、前

方部幅八七メートルで全国最大の前方後方墳として知られる。またこの付近においても最も規模の大きな古墳である。墳丘は三段築成だが二段目以上は前方後円形をなすというきわめて稀な形態をもつ。古墳の周囲には周濠がめぐりその跡が前方部側に池として残る。築造は四世紀後半ごろ。

東乗鞍古墳（天理市杣之内町）

西山古墳の南南東八〇〇メートルの東から延びる尾根上に位置する前方後円墳である。築造は六世紀前半ごろ。乗鞍の名は中央が低い馬鞍の形状から付いたもの。全長七五メートル、後円部径四四メートル、前方部幅六八メートルで前方部を西に向ける。葺石と埴輪はみられない。前方部前面では幅一〇メートルの堀が検出された。後円部中央下段には南に開口する右片袖式の横穴式石室が築かれている。また玄室には九州・阿蘇の凝灰岩で造られた刳抜式の家形石棺が収められ、その手前に二上山凝灰岩製の組合式石棺の底石が一枚残る。

下池山古墳（天理市萱生町）

大和古墳群のほぼ中央に位置する前方後方墳で、後方部を南に向ける。全長一二〇メートル、後方

部長六〇^{センチ}、同幅五七^{センチ}、同高さ一四^{センチ}である。築造は四世紀ごろ。葺石をもつが埴輪は見られない。埋葬施設は後方部中央の大型墓壇内に築かれた竪穴式石室で大阪・芝山の板石を積み上げて構築されている。内部の粘土床上にコウヤマキ製の割竹形木棺が腐朽せずに残っていたことは他に例が少ない。

中山大塚古墳（天理市中山町）

大和古墳群の南部に位置する前方後円墳で、前方部をやや西寄りの南に向けている。その南西角部分にはかつて墳頂にあった大和稚宮神社が鎮座し、大和神社の御旅所となっている。築造は四世紀初めごろ。全長一三二^{センチ}、後円部径七三^{センチ}、前方部幅六八^{センチ}で後円部二段、前方部一段築成である。埴丘斜面、前方部上面には厚く葺石が施されている。

埋葬施設は後円部中央の墓壇内に築かれた竪穴式石室である。石室は埴丘主軸に沿い大阪・春日山安山岩の板石を積んで築かれている。石室の上は板石で覆われ、最古級の竪穴式石室と見られる。中世以降、埴丘は墓地や砦として利用されていた。

龍王山古墳群（天理市柳本・渋谷町）

崇神陵と景行陵の間から龍王山山頂に至る谷間に広がる群集墳である。現在までに確認されている古墳数は六百基以上であるが、埋没古墳が多くその実数は不明。おそらく総数は一千基におよぶと思われる、大和のみならず全国でも最大規模の大型群集墳といえる。古墳の内訳は横穴式石室墳および岩盤を穿って造られた横穴がそれぞれ三百基以上あり、古墳群中に多数の横穴を含むことが特色である。

横穴式石室墳は径十数^{センチ}におよぶものは少なく、多くは径一〇^{センチ}前後の円墳で埴丘裾に外護列石をめぐらせる古墳もある。横穴はその出現が横穴式石室墳より遅れ、多くは七世紀に含まれるがその数は大和でも最大規模。主な副葬品には環頭大刀、玉類、耳環、馬具、農具などがあるが土器が最も多い。

櫛山古墳（天理市柳本町）

崇神陵周濠の東側に近接して築かれた前方後円墳であるが、前方部反対側に方形の造出をもち、双方中円墳とも呼ばれる例のない埴形の古墳である。龍王山より西に延びる尾根を利用して築かれているため主軸はほぼ東西で前方部を

西に、造出を東側に向ける。全長一五五^{センチ}、後円部径九〇^{センチ}、前方部幅七〇^{センチ}で埴丘は三段築成。葺石と埴輪をもつ。後円部中央には主軸を南北に向ける全長七・一^{センチ}、幅一・四^{センチ}の竪穴式石室があり、その周囲を楕円形埴輪がめぐる。石室内には長持形石棺の蓋石と底石の一部が残し、この石棺を使用する早い時期の古墳である。築造は四世紀後半ごろ。

天神山古墳（天理市柳本町）

崇神陵の周囲にはいくつかの古墳が見られ、伊射奈岐神社の境内にある天神山古墳もその一つであるが、今は埴丘の東半部が失われている。四世紀ごろの前方後円墳で、全長一〇三^{センチ}、後円部径五六^{センチ}、前方部幅四七^{センチ}、前方部を南に向ける。

埋葬施設は後円部の中央において、古墳の主軸に沿って築かれた竪穴式石室。全長六^{センチ}、幅一・四^{センチ}で大阪・春日山安山岩の板石を持ち送って積み、粘土棺床上にはコウヤマキ製の木棺材が残っていた。石室中央の主室と両端の副室に分かれ、主室には厚く朱が置かれ、その周囲には剣と二十面もの鏡が鏡面を上置きされていた。

黒塚古墳（天理市柳本町）

崇神陵の西北西五〇〇メートル、上ツ道の東に位置する前方後円墳で、前方部を西に向ける。全長一三〇メートル、後円部径七二メートル、前方部幅三〇メートルで周濠を有するが葺石や埴輪はみられない。築造は四世紀ごろ。中・近世には砦や陣屋に使用されていた。埋葬施設は古墳の主軸に直交する南北方位の竪穴式石室で基部が川原石、上部を大阪の芝山・春日山安山岩の板石で積んで構築されている。石室内粘土棺床上にクワ属の巨木を使用した長さ六・二メートル、最大径一メートルの木棺が収められていた。

棺外遺物は木棺の北半部では棺を囲む三十三面の三角縁神獸鏡と素環頭大刀を含む刀剣、鉄鏃、Y字形・異形鉄製品などがある。三角縁神獸鏡は平絹でくるまれ、鏡面を木棺側に立てて置かれていたようだ。

珠城山古墳群（桜井市穴師）

三輪山の北西部、穴師山から西に延びる丘陵上に位置する三基の前方後円墳から成る古墳群である。これらの古墳はすべて六世紀ごろの築造でいずれもその主軸を東西方向に向け、墳丘を連接して築かれているのが特徴である。東端の

一号墳は全長五〇メートル、前方部を東に向ける。後円部には南に開口する全長四・七メートルの横穴式石室がある。二号墳は前方部を西に向け、全長七五メートルと群中最大規模であるが埋葬施設は不明である。西端の三号墳は全長四七・五メートルで前方部を東に向け、後円部と前方部にそれぞれ横穴式石室を有する。後円部の石室は全長九・七メートル、南に開口し組合式家形石棺が玄室中央に一基、玄室から羨道にかけて一基収められている。なお三号墳の墳丘は現在失われている。

纏向古墳群（桜井市太田・東田）

三輪山の北西に位置する纏向遺跡内の西部に点在する纏向石塚・纏向矢塚・勝山・東田大塚の四基の古墳より成る古墳群である。築造は三世紀前半から四世紀初めごろ。

纏向石塚古墳は全長九六メートル、後円部径六一メートル、前方部長三二メートルの前方後円墳で周濠がめぐる。纏向矢塚古墳は纏向石塚古墳の西一五〇メートルにあり、全長九六メートル、後円部径六四メートルの前方後円墳で周濠をもつ。勝山古墳は全長一一〇メートル、後円部径六五メートルの前方後円墳で周濠を有する。東田大塚古墳は全長九六メートルの前方後円墳で周濠を伴う。

これらの古墳の埋葬施設は不明だが、墳丘の形は不整形な後円部と小さな前方部で葺石や埴輪がみられないこと、また周濠をめぐらせ、そこから祭祀系遺物や建築材などが出土することが共通する。これらの特徴は箸墓古墳に始まる大型前方後円墳よりさらに時期的に古いものと考えられている。

ホケノ山古墳（桜井市箸中）

箸墓古墳東方の尾根上に所在する前方後円墳である。築造は三世紀中ごろ。前方部は南東に向け、古墳の規模は全長八〇メートル、後円部径六〇メートル、後円部高さ八・五メートル、前方部長二五メートル、前方部高さ三・五メートルである。後円部側には周濠状遺構がめぐり土器や木製品が出土した。後円部は三段築成で各段には丁寧な施行による急角度の葺石が施されている。後円部中央の埋葬施設は通有の竪穴式石室ではなく、木槨を多量の川原石で覆う「石囲い木槨」であった。大和の古墳では初の事例である。墳頂には装飾壺が配列され、小型丸底壺もここに置かれたらしい。なお「石囲い木槨」の西側に六世紀頃の横穴式石室が築かれていた。

茅原大墓古墳（桜井市茅原）

三輪山の西麓に延びる尾根上に位置する帆立貝式前方後円墳で前方部を北に向ける。築造は五世紀前半ごろ。古墳の規模は全長八五メートル、後円部径七〇メートル、前方部長一五メートルである。開墾のため段築の状況は不明である。周囲には幅一三メートルの周濠がめぐっていたようで、その痕跡が古墳の西に溜池として残る。墳丘には円筒埴輪・家形埴輪が知られ、葺石も存在する。埋葬施設の内容は不明である。

艸墓古墳（桜井市谷）

阿部丘陵の東斜面に築かれた方墳でカラト古墳とも呼ばれる。築造は七世紀ごろ。墳丘の規模は一辺二八メートルほどで墳頂には六・九メートルほどの平坦面がある。埋葬施設は南東に開口する横穴式石室で玄室内には刳拔式家形石棺を安置する。石室は全長一三・二メートル、玄室長は四・四メートル、幅二・七メートルで、玄室の各壁はすべて一段で奥壁は一石、側壁は二石、天井石も二石である。石材の隙間には漆喰がみられる。石棺は竜山石製で蓋に六個の縄掛け突起をもつ。石棺蓋は全長二・四メートル、幅一・五メートルで石室の大きさに比してかなり大きく、いかにして石棺を横穴式石室内に

収めたか、古くから問題になっている古墳である。

文殊院西・東古墳（桜井市阿部）

ともに阿部丘陵の西端部に築かれた横穴式石室墳で安倍文殊院境内にある。築造は七世紀ごろ。西古墳は墳形が円形か方形かは不明。石室内は室町時代にはすでに開いており、今は玄室内に不動明王の石像が祀られている。石室は南に開口し全長一二・五メートル、玄室長五・一メートル。きわめて精巧な切石で築かれた石室で、玄室各壁は両側壁が方形の石材を下から七個と六個の交互五段積み、奥壁も同じく下から四個と三個の交互五段積みで非常に均整がとれている。両側壁では一個の石材の中央に模擬線を加え、二個に見せている箇所が三ヶ所ある。石材の間には漆喰がみられる。被葬者としては飛鳥時代の左大臣阿倍倉梯麻呂の説がある。また東古墳は西古墳の東方一〇〇メートルのところであり、横穴式石室の玄室には不動明王の石像が祀られ羨道には井戸があり、閼伽井古墳とも呼ばれる。墳形は不明だが石室はほぼ南に開口し、その全長は一三メートル、玄室長は四・七メートルである。

谷首古墳（桜井市阿部）

阿部丘陵の西辺に位置する飛鳥時代の方墳で墳頂には八幡神社が鎮座する。墳丘は改変を受けているが南北四一メートル、東西三八メートルほどで南に開口する大型の横穴式石室を有する。石室は全長一三・八メートル、玄室長六メートル、幅二・八メートル、高さ四メートルである。巨石を用いて築かれ、奥壁は一石の二段積み、両側壁は三段で下から各段三・三・二個を積む。玄室奥壁と前壁はゆるい持ち送りのためわずかに傾斜する。石室内より凝灰岩の破片が出土しているので、かつては家形石棺が存在したらしい。なお中世には墳丘が砦として利用された。阿部丘陵の横穴式石室墳の中では最大の古墳である。

コロロ山古墳（桜井市阿部）

メスリ山古墳前方部北西角西三〇メートルほどに位置する横穴式石室墳である。築造は七世紀初めごろ。古墳上半部が失われて埋没していたが、発掘調査によつてその存在が明らかになった。墳形は一辺三〇メートルほどの方墳で南南東に開口する横穴式石室をもつ。石室は基底部分を残すのみだが、全長一一メートル、玄室長五・四メートル、幅二・三メートル。奥壁は一石が残るが本来はその上にもう一石あ

り、二段と推定される。玄室側壁は二段まで各四石を残すが大きさがやや不揃い。古墳築造後には追葬が行われ最初の一次面は玄室床に扁平な石が敷かれ、追葬の二次面には礫が敷かれ木棺が置かれた。現在横穴式石室はメスリ山古墳西の公園内に移築保存されている。

メスリ山古墳（桜井市高田）

御破裂山から北西に延びる尾根の先端上に築かれた大型前方後円墳で前方部を西に向ける。築造は四世紀中ごろ。全長二五〇メートル、後円部径一二・八メートル、前方部幅八〇メートル。墳丘は後円部三段で墳丘斜面全面に葺石がみられる。後円部墳頂には竪穴式石室（主室）がほぼ南北方向に位置し、その東には副室がある。主室は全長八メートル、幅一・三五メートル、高さ一・七六メートルで粘土床上に木棺を安置する。石室は四壁を板石で積み、天井石で覆う。石室材は亀ノ瀬の安山岩と思われる。副室は全長六メートル、幅〇・七メートルの未盗掘で遺物のみを収めた竪穴式石室であり、大量の副葬品が出土。

茶臼山古墳（桜井市外山）

鳥見山の北西麓に延びる尾根を利用して築か

れ、前方部を南に向けた大型前方後円墳。築造は四世紀ごろ。全長二〇〇メートル、後円部径一一〇メートル、前方部幅六〇メートルで前方部先端が広がらない、いわゆる柄鏡形の前方後円墳の典型であることが特徴。また墳丘は後円部三段、前方部二段で斜面は葺石で覆うが埴輪はない。埋葬施設は後円部中央に古墳の主軸に沿って築かれた竪穴式石室で、その周囲を底部に円孔をあけた二重口縁壺が方形にめぐる。石室は全長六・八メートル、幅一・二メートル、高さ一・六メートルで石室壁面は扁平な安山岩を垂直に積み、朱で彩色されている。石室内部床面には板石が敷かれ、トガの巨木を使用した木棺が収められていた。

花山塚古墳（桜井市栗原）

栗原谷の東、女寄峠の近くの北側斜面に築かれた磚槨墳で花山西塚古墳、通称花山西古墳ともいう。築造は七世紀ごろ。墳丘は背後に大きな周溝をめぐらす径一六メートル、高さ三・三メートルの円墳で南に開口する石室をもつ。その構造は玄室と羨道をもつ横穴式石室の奥壁にさらに埋葬用の横口式石槨を設けるものである。これらは加工された室生火山岩（榛原石）の板石（磚）を大量の漆喰で固めながら積み上げて構築され、壁

面に漆喰を塗っているところもある。古墳の東五〇メートルほどには花山東塚古墳、通称花山東古墳が所在し、この二基は双墓と思われる。

天王山古墳（桜井市倉橋）

音羽山から北西に延びる尾根先端上に築かれた大型方墳。築造は六世紀末。墳丘裾の各辺が東西・南北に沿う。墳丘の規模は東西四五・五メートル、南北四二・二メートル、高さ九メートルで、やや東西に長い方形である。墳丘は三段築成で墳頂には一辺一二メートルの平坦面がある。埋葬施設は南に開口する大型横穴式石室で玄室各壁は巨石を三段に積み各段三石で、天井石も三石である。玄室奥壁と前壁は持ち送りのため傾斜する。石室全長は現状で約一二メートル、玄室の長さは六・四メートル、幅三メートル、高さ四・二メートルで、大和でも有数の大型石室である。玄室中央部のやや北寄りには凝灰岩製の刳拔式家形石棺が安置されている。この古墳は江戸時代には崇峻天皇倉梯岡上陵とされていた。

文禰麻呂墓（宇陀市榛原区八滝）

伊那佐山から南東に延びる尾根の南斜面にある慶雲四年（七〇七）に没した文禰麻呂の墳墓

である。禰麻呂については『日本書紀』に壬申の乱で大海人皇子に従って活躍したことが記され『続日本紀』に没した記事がみられる。墓誌銘の「壬申年將軍」として知られている。

墳墓は天保二年（一八三一）に発掘され、現在国宝となっている銅製墓誌とそれを収めた銅製箱、ガラス製骨蔵器、金銅製外容器が出土した。その後の発掘調査で墳墓の詳細な位置が確認された。その構造は一辺二・五メートルほどの隅丸方形の墓壇を掘り、底へ堅炭を薄く敷いて基台を作り骨蔵器と墓誌を安置したものと思われる。

調査では鉄釘が出土したのでおそらく骨蔵器と墓誌は木箱に収められていたらしい。また焼土などは見られなかったので他所において火葬が行われたと思われる。

谷脇古墳（宇陀市大宇陀区守道）

丘陵性の山地が入り組んだ尾根上に位置する円墳であるが、前方後円墳説もある。築造は六世紀。径一六メートル、高さ五メートルほどの規模で南に開口する横穴式石室をもつ。石室は大型の河原石を持ち送って積み、一枚の大型天井石を乗せる。石室平面形は玄室の幅が東西に長い、いわゆる「T」字形の石室である。玄室中央東寄りには板石を

使用した組合式の石棺が玄室の主軸、東西方向に置かれている。棺内とその近くから耳環が四点出土し、棺内には二体が埋葬されていたと思われる。

神武陵（橿原市大久保町）

神武天皇の陵は、文久年間（一八六一～一八六四）の修陵時にきわめて大がかりな工事が施され、その後も昭和十五年の皇紀二千六百年に至るまで何度か整備工事が実施された結果、現状のような姿となった。

神武天皇が神話上の人物で、実在しないという意見が歴史学上では定説化しているものの、神武陵については『古事記』『日本書紀』『延喜式』等の諸文献に明確に記録されていることから、それぞれの時期に神武陵とされていた場所が存在していたことは否定できない。江戸時代の探索においても三ヶ所の有力な候補地があり、その一つが現在第二代綏靖天皇陵の「塚山」と呼ばれる場所であった。また、現在は神武陵の陵域内の「丸山」も、丘陵上に位置することから『古事記』にある「白檮尾上」という記述と一致するとして候補になったこともある。最終的には「神武田」と呼ばれていた現在地にあった小丘が治定され、今日のよ

うに整備されたものである。

宣化陵（橿原市鳥屋町）

へ鳥屋見三才古墳へ

「ミサンザイ」は「みささぎ」の訛ったものであるとされ、本墳が古くから陵としての伝承を持っていたことを示している。宣化陵については現在地のほか丸山古墳もその候補地とされた。しかし、丸山古墳が蘇我氏系の墳墓であるとの説も根強く、幕末以来の考証でも現在地が最も有力であるといえる。

墳丘は細長い丘陵部先端に位置することから、その地形に規制されるように前方部を北東に向けている。全長約一四〇メートル、後円部径八三メートルの前方後円墳である。墳丘は二段築成で、くびれ部の両側に方形の造出が存在している。墳丘は壕によって囲まれているが、灌漑用の溜池である鳥屋池と一体となっていることから、灌漑用の水を確保する目的で修陵工事が実施されたことがうかがえる。

身狭桃花鳥坂墓（橿原市北越智町）

へ柵山古墳へ

宮内庁によって、第十代崇神天皇皇子倭彦命

の身狭桃花鳥坂墓に治定されている。『日本書紀』は崇神天皇皇子倭彦命の葬儀にあたつて、近習の者を生き埋めにしたところ、数日たつても泣き声が鳴りやまず、その声に胸を痛めた垂仁天皇が殉死の風習を禁止したという話を伝える。もちろん説話であつて、考古学的にはこの当時に殉死の風習があつたとは考えられない。

現在の墓は前方後円墳として境界を指定しているが、古墳としては「柵山」の名が示すように、後円部にあたる一辺九〇メートル超の方丘部分のみであり、方墳としてはわが国最大の規模を誇る。一方、前方部にある高まりは「夜泣塚」と呼ぶようであるが、古墳としての高まりか否かは不明である。

畝傍陵墓参考地（橿原市五条野町、大軽町）

へ丸山古墳

通称、見瀬丸山古墳、近年では五条野丸山古墳と呼ばれることが多い。全長約三一〇メートルの前方後円墳で、古墳時代を通じても全国六番目（奈良県内では最大）の大きさであり、古墳時代後期に限れば飛び抜けた規模を誇る。後円部にはやはり日本で最大規模の横穴式石室が築かれており、平成四年の現況調査では二八・四メートル

た。この数字もあくまでも現状の数字であり、玄室内は一メートル以上の土砂が堆積していることを考えると、三〇メートル近い数字になるとも考えられる。

被葬者については玄室内に石棺が二基安置されていることから、江戸時代以降天武・持統天皇合葬陵に当てることが多かった。しかし明治十四年に現在地に治定替えがなされた後は、後円部の一部が畝傍陵墓参考地として宮内庁の管轄下にある。最近では欽明天皇と堅鹽媛の陵に比定する意見もあるが確定するには至らず、蘇我氏系の墳墓であるとする説も根強いものがある。

欽明陵（高市郡明日香村平田）

へ平田梅山古墳

東西に延びる丘陵と平行するように、主軸を東西に置く前方後円墳である。良好な状況で葺石が遺存しており、本陵がまさに「石山」であることが判明している。また、現在の墳丘長は一四〇メートル程度であるが、墳丘南側はかなり削られており、後円部を含めてもう少し大きくなることは間違いない。この時期の前方後円墳としては最大規模とはいえないものの、周辺地形の造成工事や墳丘主軸を正確に東西に置いていること（よつて前方部正面は南北を示す）、葺石の施工状況な

どから、現在見ている姿以上に極めて丁寧に築かれていることがわかる。さらに現在宮内庁が管理している範囲よりも南側に本陵に関する遺構が存在する可能性が高いことは、猿石が出土した周辺も含めて指摘できる。

天武陵・持統陵（高市郡明日香村野口）

へ野口王墓古墳

本陵が現在地に治定された根拠は、明治十三年に京都高山寺で発見された『阿不幾乃山陵記』の記述による。以前は見瀬丸山古墳が天武・持統天皇の陵とされていた。この『阿不幾乃山陵記』は文暦二年（一二三五）に本陵が盗掘された時の実見記であり、内部状況を含めて本陵の状況の詳細が記録されている。

内部施設については記述をもとに検討されており、石室の全長は七・七メートル、石材は「瑠璃」とあるが、おそらくは表面を丁寧に研磨した花崗岩であろうと考えられる。玄室の中には、奥に金銅製の棺台が置かれ、その上に漆塗りの木棺が安置されていたといい、これが天武天皇の棺と思われる。その前に銅製の外容器と銀製の蔵骨器があり、こちらが火葬された持統天皇のものであることは間違いない。

新沢千塚古墳群

(橿原市鳥屋町・北越智町・川西町)

奈良盆地南部の橿原市南部に位置する大型群集墳で、千塚山と呼ばれる丘陵に約五百基の古墳が造られている。通常の群集墳とは異なり、その造営が五世紀中ごろまで遡ること、前方後円墳・円墳・方墳など多様な墳形が見られること、内部主体に木棺直葬を採用することなどといった特徴が見られる。また、甲冑などの武器・武具の副葬が多く、これらは典型的な初期群集墳の特徴といえる。

代表的なものに新沢一二六号墳がある。東西二二メートル、南北一六メートルの長方形で、長さ三・一メートルの割竹形木棺を納める。竜文の透かし彫りがある金銅製の方形板、金銅製垂飾付き耳飾り、金製指輪といった装飾品をはじめ、漆塗り盤、青銅製熨斗、ガラス碗・皿などが出土している。

沼山古墳 (橿原市白檀町)

貝吹山から北東に張り出した丘陵の突端に位置する、直径一八メートル、高さ五・五メートルの円墳である。築造は六世紀中頃から後半。埋葬施設は横穴式石室で、奥壁・側壁の持ち送りが著しく、天井が高いという特徴をもつ。発掘調査により金環・

玉類といった装身具や馬具、鉄鏃、鉄釘、鏃、ミニチュアカマドや須恵器などが出土している。

菖蒲池古墳 (橿原市五条野町)

甘樫丘から南西に延びる丘陵の南端に位置し、墳丘は盛土の流出が甚だしく墳形・規模は不明である。埋葬施設は南に開く横穴式石室である。玄室と羨道とからなるものと推定できるが、羨道と玄室の一部はすでに破壊されて、その形状は明確でない。奥壁・側壁とも花崗岩の巨石を二段積みし、石と石の間隙や石の窪んだところには大量の漆喰を塗布している。玄室内部には漆塗棺を模したと思われる凝灰岩製の家形石棺を二つ南北に並べて配置している。石棺の内側には漆を塗ったうえで赤彩を加えている。

石室・石棺の形態から七世紀後半に造られたものと推定できる。この一帯を蘇我氏の墓域と考え、蘇我倉山田石川麻呂の墳墓とする説がある。

植山古墳 (橿原市五条野町)

橿原市南部の甘樫丘から南西方向に延びる丘陵の南斜面に造られた、東西四〇メートル、南北三二メートル、高さ約三・六メートルの方墳である。墳丘の北・

東・西は丘陵を大きくカットして周溝を造る。周溝の底には緑泥片岩などを使って石を敷く。墳丘の北には古墳を囲むように掘立柱塀がめぐる。埋葬施設は南に開口する二つの横穴式石室である。東石室は全長一三メートル、玄室長さ六・五メートル、幅三・二メートル、残存高三・一メートル、西石室は全長一三メートル、玄室長さ五・二メートル、幅二・五メートル、高さ四・五メートルで、東石室はその石室形態や出土した須恵器から、七世紀初めに造られ、西石室はそれよりも遅れて造られたと考えられる。

推古天皇とその子である竹田皇子を最初に葬った墳墓ではないかと考えられているが、推古天皇と竹田皇子は後に大阪府の南部、磯長谷に改葬されているので、仮にそうだとすると、空墓であつたということになる。

石舞台古墳 (高市郡明日香村島庄)

飛鳥の東南、多武峯から東南に派生する尾根の先端に造られ、早くに墳丘の盛土が流出してしまい、石室が露出したためにこの名前と呼ばれるようになった。一辺約五〇メートルの方墳であり、周囲には周濠と外堤がめぐり、周濠には貼石が施される。内部主体は花崗岩の巨石を組み上げた横穴式石室で、玄室と羨道とからなる。石室の

全長は一九・一^尺、玄室の長さは七・五^尺、幅三・四五^尺、高さ四・七^尺。昭和八年（一九三三）に実施された石室の調査では、玄室から凝灰岩の石棺の破片が出土しており、家形石棺が納められていたものと考えられる。古墳の周囲の国営公園建設にともない発掘調査が行われ、古墳の造営にあたって、小規模な横穴式石室を破壊していることが明らかとなった。

石室の形態などから、七世紀前半に造営されたものと考えられ、蘇我馬子の桃原墓の可能性がいわれている。

高松塚古墳（高市郡明日香村平田）

北西方向に延びる丘陵の南西斜面に造られた円墳で、墳丘は下段の直径が二三^尺、上段が一八^尺、正面からの見かけの高さ八・五^尺、周囲に幅二・五^尺の周溝がめぐる。埋葬施設は二上山の凝灰岩の切石を使った横口式石槨で、その内法は長さ二六・五・五^尺、幅一〇三・五^尺、高さ一一・三・四^尺である。石槨の内面には漆喰が塗られ、壁画が描かれる。側壁と奥壁には四神図と男女人物像、日月像、天井には星宿図が描かれ、飛鳥時代後半の服装を知る上で貴重な資料である。石槨の内部には漆塗木棺を納める。木棺は漆を

塗った後、外面には金箔を貼り、内面には朱を塗る。

横口式石槨の形態や出土遺物などから七世紀末から八世紀前半に造られたものと推定され、天武天皇に関わりをもつ皇族をはじめとした有力氏族が被葬者として考えられる。

中尾山古墳（高市郡明日香村平田）

明日香村の南部にひろがる丘陵に位置する、墳丘全面を石で覆う三段築成の八角形墳で、さらにその周囲には八角形をなすバラス敷が二重にめぐる。墳丘の直径は一九・四^尺、周囲をめぐる石敷も含めた直径は二九・四^尺で、高さは四^尺。埋葬施設は花崗岩の底石と天井石、凝灰岩の奥石・側石を組み合わせた横口式石槨である。石槨の内面は丁寧に磨かれており、赤色顔料が付着する。また中央には一辺約六〇^{センチ}、深さ一^{センチ}の彫りくぼみがあり、石槨の内法が一^尺に満たないことから、この部分に台状のものが置かれ、火葬骨をおさめた金銅製の蔵骨器が置かれていた可能性が高い。

横口式石槨が棺を納めるのではなく、蔵骨器をおさめる形態に変化していることなどから、七世紀末から八世紀初めの古墳と見てよい。文武

天皇の檜隈安古陵の可能性がいわれている。

キトラ古墳（高市郡明日香村阿部山）

明日香村南部の丘陵南斜面を大きく削平して造られた二段築成の円墳で、直径は下段が一三・八^尺、上段が九・四^尺、高さ三・三^尺である。墳丘は版築工法で造られ、中央に二上山の凝灰岩を使った横口式石槨がある。石槨は底石の上に側石・奥石を立て、さらに天井石をのせるもので、南壁が閉塞石を兼ねている。内法は長さ二・四^尺、幅一・〇四^尺、高さ一・一三^尺である。内面には、全面に漆喰を塗った後、壁画が描かれている。天井には極めて精巧な天文図と日月像、側壁と奥壁、南壁には四神図が描かれ、さらに北壁で三体、東西の各壁の北側で各一体の獣頭人身像が確認されている。おそらく十二支像が東西の側壁と奥壁（北壁）、閉塞石（南壁）に描かれていたと思われる。石槨の形態などから七世紀末から八世紀初めに造られたものと推定され、天武天皇に関わる皇族をはじめとした最有力氏族の墳墓とみてよい。

マルコ山古墳（高市郡明日香村真弓）

貝吹山から東西に延びる丘陵の南斜面に造ら

れた、墳丘が二段築成の六角形墳で、墳丘の周囲にはさらにバラスが敷かれる。直径二三メートル、高さ五・三メートルあり、埋葬施設は二上山の凝灰岩を組み立てた横口式石槨で、南壁が閉塞石を兼ねる。石槨の中から漆塗木棺の破片が出土し、棺にともなう遺物として、金銅六花形飾金具などが出土している。

横口式石槨の形態などから七世紀末から八世紀初め頃の古墳と考えられ、その被葬者としては、天武天皇に関わりをもった皇族を始めとした極めて身分の高い人が想定される。

真弓鍬子塚古墳（高市郡明日香村真弓）

貝吹山から南に延びる越智丘陵の突端に造られた、直径約二三メートル、高さ約五メートルの円墳である。埋葬施設は横穴式石室であるが、通常のものとは異なり、羨道が玄室の北と南に二つ取り付くという特異な形態をもつ。さらに玄室の天井の高さが高く、側壁の持ち送りが強い。玄室の長さ六・三メートル、幅四・四メートル、高さ四・六メートルである。石室の形態や出土遺物などから、六世紀後半の古墳と推定され、その特徴的な石室形態から、渡来人が被葬者とも考えられる。

牽牛子塚古墳（高市郡明日香村越）

明日香村の西部、真弓丘陵に位置する。原形は明確ではないが、墳丘の北側から東側にかけて比較的遺存状態がよく、二段築成の八角形墳と推定される。八角形の一边が一・二メートル、対角線（直径）で三・三メートルである。墳丘の中央には、一個の巨大な凝灰岩をくり抜いた横口式石槨がある。内部は中央に厚さ〇・五メートルの間仕切りの壁を造り出し、ほぼ同形同大の石槨を東西に二つ造る。入口は凝灰岩の切石を扉石として、さらにその外側を寺山石英安山岩の巨石で閉塞する。横口式石槨の形態、出土遺物の内容などから七世紀後半に造られた古墳と推定される。また墳形が八角形であることから、天皇、もしくは天皇に準ずる身分の者の墓と考えるのが適切である。

岩屋山古墳（高市郡明日香村越）

明日香村西部、真弓丘陵の東端に位置する。後世の地形変化が著しく、墳形・規模は明確にしがたいが、一边約四〇メートル、高さ約一二メートルの墳に復元できる。埋葬施設は南に向かって開く横穴式石室であり、全長一七・七メートル、玄室と羨道とからなる。玄室は奥壁が二石、側壁が五石、天井は一石で構成される。石材にはすべて丁寧

に切石加工が施され、壁面も平滑に仕上げられている。羨道は玄室に近い部分では一段積み、入口では二段積みとなり、玄室同様、石材は丁寧に加工されている。いわゆる切石積石室で、「岩屋山式横穴式石室」の標識となった石室である。石室の形態などから七世紀中ごろに造営されたものと推定でき、飛鳥時代の大王、ないしはそれに次ぐような有力氏族の墳墓と考えられる。

都塚古墳（高市郡明日香村阪田）

飛鳥川の支流にあたる冬野川に面した南西方向に延びる丘陵に位置する、一边二八メートル、高さ四・七メートルの方墳であり、金鳥塚とも呼ばれている。埋葬施設は横穴式石室で、全長は一・二メートル、玄室は全長五・三メートルである。玄室には凝灰岩のくり抜き式の家形石棺を納める。この他にも棺台と推定される自然石があることから、木棺の存在も推定される。石室、石棺の形態などから六世紀後半に造られたものと推定される。

細川谷古墳群（高市郡明日香村細川）

多武峯から東に派生する山塊から南に延びる尾根筋に造られた古墳群で、飛鳥川の上流の細川谷の南斜面を中心に古墳は分布する。東は上

から西は上居の集落あたりまで広がる約二百基からなる群集墳である。古墳は大半が直径八〇一五メートルの円墳で、埋葬施設は横穴式石室である。

埴輪や葺石をもつものがないことから、六世紀後半から七世紀前半にかけてのものとみられる。古墳群中にある上五号墳は横穴式石室を内部主体とし、木棺を納めている。また、打上古墳は直径約三〇メートルの大型円墳で、巨大な花崗岩で横穴式石室を構築している。

東明神古墳（高市郡高取町佐田）

越智丘陵の東端で南斜面を大きくカットして築造された、直径三六メートルの八角形墳である。築造は七世紀後半ごろ。残存高約二メートル、周囲には石敷がめぐる。埋葬施設は二上山の凝灰岩をブロック状に加工した石材を使用した横口式石槨である。石槨は長さ三・一二メートル、幅二・〇六メートルの長方形の平面形態で、立面は高さ一・二九メートルまでは垂直に積み上げた後、約六〇度の勾配で持ち送り、家形の形態をなす。また、南壁には床面から一・二五メートルのところに幅一メートル前後の入り口が開く、他に類例のない特異な石室形態である。

墳形が八角形を呈すること、石槨の規模が大きいことなどから、天武天皇の皇子である草壁

皇子がその被葬者として考えられている。

宮塚古墳（高市郡高取町市尾）

高取町のほぼ中央、奈良盆地から和歌山へ抜ける紀路がすぐそばを通る巨瀬谷の入口に位置する。北西に向かって張り出す丘陵を整形して造られた、前方部を東に向けた前方後円墳である。全長四四メートル、後円部径二三メートル、高さ七メートル、前方部は幅二四メートル、高さ四・五メートルである。埋葬施設は後円部中央に北方向に開口する横穴式石室であり、全長一一・六メートル、玄室は長さ六・二メートル、幅二・五メートル、高さ三メートル。内部にはくり抜き式の家形石棺と木棺が置かれていた。石室の形態や出土遺物から六世紀中ごろのものと考えられ、巨瀬谷に勢力をおく有力豪族が被葬者として推定される。

市尾墓山古墳（高市郡高取町市尾）

高取町の中央部の平坦地、巨瀬谷の入口に位置する、前方部を北西に向けた前方後円墳。全長六六メートル、前方部幅四九メートル、高さ八・七五メートル、後円部径三九メートル、高さ七・七五メートルである。周囲には幅約八メートルの周濠がめぐり、さらに幅約七メートルの外堤がある。埋葬施設は後円部に南東に開く

横穴式石室がある。

石室の形態や出土遺物から六世紀前半から中ごろにかけて造られたものと推定される。巨瀬谷に勢力をもった豪族の墳墓と考えられる。

乾城古墳（高市郡高取町与楽）

貝吹山から南に延びる越智丘陵の突端に造られた、直径一七メートルの円墳である。築造は六世紀後半ごろ。埋葬施設は南に開口する横穴式石室であり、通常の石室に比べると天井が高く、側壁・奥壁の持ち送りが顕著である。玄室の長さ五・六メートル、幅三・五メートル、高さ五メートル以上である。その特徴的な石室の形態から渡来系の人々の墳墓と考えられる。

大塚陵墓参考地（北葛城郡広陵町大塚）

〈新山古墳〉

全長一三七メートルの前方後方墳で、埋葬施設の構造は、上面に竪穴式石室があり、その下方に組合式石棺を置くという特異な構造であったと推定されている。出土遺物には、三十四面の鏡と金銅製帯金具、玉類、車輪石、石釧、椅子形石製品などがある。鏡は九面の三角縁神獸鏡と十四面の小型内行花文鏡を含んでおり、県内でも屈

指の出土量を誇るほか、他には全く例のない仿製の大型直弧文鏡が出土している。また、金銅製帯金具は龍文と三葉文を精巧に透かし彫りしたもので、中国の晋代の墳墓に類似品がある。舶載品と考えられ、晋代の墳墓の年代から、四世紀初頭に生産されたものと見られる。

三吉陵墓参考地（北葛城郡広陵町三吉）

〈新木山古墳〉

巢山古墳とともに馬見古墳群中央群の中核をなす前方後円墳で、全長約二〇〇メートルを測る。埋葬施設は不明である。墳丘にはくびれ部に造出をもち、精美な盾形周濠を有する。外堤部が発掘調査され、幅二二メートル、高さ三メートル以上の幅広で大規模な外堤が存在することが判明した。出土した円筒埴輪の断片から、五世紀前半代の築造年代が想定できる。

磐園陵墓参考地（大和高田市築山）

〈築山古墳〉

馬見古墳群南群の中核をなす大型前方後円墳で、全長二一〇メートル。墳丘は、前方部に張出部をもっているが、造出はない。精美な盾形の周濠をめぐらしている。埋葬施設の構造は不明だが、

周辺で長持形石棺の蓋石を地蔵仏に再利用しており、本古墳と関連するものである可能性がある。従来は五世紀前半代の中期古墳として認識されてきたが、墳丘周辺の発掘調査で葺石と緒付円筒埴輪が出土し、本古墳の築造年代が四世紀後半代まで遡るものである可能性が指摘されている。

ナガレ山古墳（北葛城郡河合町佐味田）

馬見古墳群中央群の中の一基で、全長一〇六メートルの前方後円墳である。築造は五世紀前半ごろ。土取りによる破壊から古墳を保全するために、墳丘の発掘調査が実施され、前方部で埋葬施設の粘土槨が検出されたほか、くびれ部からは多数の石製模造品や家形・囲形・蓋形などの形象埴輪が出土した。また、墳丘の各所から葺石と前方部二段、後円部三段にめぐる円筒埴輪列などが検出された。この結果をもとに、墳丘の復原工事が行われ、現在は古墳築造当初の姿が見学できるようになっている。

佐味田宝塚古墳（北葛城郡河合町佐味田）

全長一一・五メートルの前方後円墳で、明治年間の発掘により、三十六面におよぶ鏡、玉類、石釧、

鉄形石、石製合子、石製模造品、銅鏃、巴形銅器、刀子、剣、斧、鑿などが出土。埋葬主体は、その時の状況から粘土槨と推定されている。出土遺物の中で注目されるのが鏡で、全国屈指の数量があるほか、その中にこれまで唯一の出土例である家屋文鏡が含まれる。家屋文鏡は、国内で生産された仿製鏡で、そこには鈕を中心に入母屋の高床式建物、切妻の高床式建物、入母屋の平地式建物、入母屋の竪穴住居という四棟の異なった形の建物が描かれている。さらに建物には、鳥や蓋などが描かれているものもあり、当時のわが国の建物の外観やその思想的背景を知る上で重要な資料である。古墳の築造年代は鏡や円筒埴輪などから、四世紀後半と推定される。

乙女山古墳（北葛城郡河合町佐味田）

馬見丘陵公園内に所在する、全長一三〇メートルの帆立貝式古墳で、県内最大規模である。文字通り帆立貝の貝殻のような平面形をもつ古墳が、帆立貝式（形）古墳であるが、その典型的な例として、昭和の初め頃から注目されてきた。この墳形については、前方後円墳の前方部が短くなったものとみる説と、円墳に造出が付設されたものとみる説とがある。乙女山古墳では、二ヶ所の突

出部があるが、平面形とその規模から、大きい方を「前方部」、小さい方を「造出」として峻別できる。発掘調査により、造出から家形・蓋形・壺形などの形象埴輪と土器類が出土した。埴輪から築造年代は五世紀前半と推定される。

大塚山古墳群（北葛城郡河合町川合）

大型の前方後円墳である大塚山古墳を中心とした古墳群である。大塚山古墳・中良塚古墳（高山塚一号古墳）・城山古墳という三基の前方後円墳と、丸山古墳という帆立貝式古墳、高山塚二号・四号古墳、九僧塚古墳という円墳・方墳などがある。いずれも埋葬主体は未調査であるが、採集された埴輪などから、五世紀中ごろから六世紀前半にかけて築造されたものと考えられる。奈良盆地西部の代表的な大型古墳群で、馬見古墳群の北群と称されることもある。とりわけ、大塚山古墳は、三段築成の墳丘および精美な盾形周濠が水田の畦畔などに良好に遺存。墳丘の規模は全長二一五メートルで、県内屈指の規模をもつ。

牧野古墳（北葛城郡広陵町馬見北）

直径五五メートルの規模を誇る大型円墳である。築

造は六世紀末ごろ。埋葬主体は、南に開口する県内屈指の規模をもつ横穴式石室で、玄室内の奥壁沿いに刳拔式家形石棺を置く。また、側壁沿いにも組合式家形石棺を置いていたと考えられるが、盗掘により大半が失われている。石室内から大量の須恵器・土師器などの土器類、金銅製や鉄製の馬具類、装身具類、武器類など様々な遺物が出土した。

古墳の被葬者については、平安時代の書物である『延喜式』の記載から、舒明天皇の父にあたる押坂彦人大兄皇子の成相墓にあてるとの説が有力である。

巢山古墳（北葛城郡広陵町三吉斎音寺）

馬見古墳群中央群の中核をなす、全長二〇四メートルの大型の前方後円墳である。築造は四世紀末ごろ。墳丘には造出を付設し、精美な盾形の周濠と幅広の外堤をめぐらす。大正年間の報告から、後円部に埋葬主体である二基の竪穴式石室が存在したことや、前方部にも竪穴式石室のような埋葬施設が存在したこと、さらには造出では石製模造品や籠形土器を使用した祭祀が行われたことなどが推測される。平成に入つて、史跡整備を目的とした発掘調査が行われ、埴輪列

や葺石が確認され、木製の埴輪の一種とも考えられる木製品が出土した。さらに、周濠の浚渫工事中に渡堤と突出部をもつ出島状遺構が確認された。

平野塚穴山古墳（香芝市平野）

平野古墳群中の一基で、一辺一八メートルの方墳である。築造は七世紀後半から末ごろ。埋葬施設は横口式石槨で、玄室部と羨道部からなる。底石は、精巧に加工された切石を二十一枚敷き詰め、玄室部では奥壁一枚、両側壁各二枚、天井石二枚置き、羨道部では側石を各一枚、天井石を一枚置く。玄室部前面に仕切石を置き、玄室部と羨道部を区分する。この場所に、閉塞石が置かれていたようで、凝灰岩の切石が出土している。さらには、羨道部前面にも、扉石をはめ込む加工が施されている。

全国を代表する横口式石槨であり、被葬者として高市皇子・茅渟王・當麻氏説などがある。

狐井城山古墳（香芝市狐井）

全長約一五〇メートルの前方後円墳で、墳丘は、中世に城郭として利用されたため、改変を受けているが、前方部が大きく開く形態で、築造年代を

六世紀前半代に位置づけることができる。盾形の周濠と幅広の外堤をめぐらしている。埋葬施設は不明だが、かつて古墳東側で用水の樋として利用されていた石材が、竜山石製の長持形石棺の蓋石で、もともとはこの古墳のものであった可能性がある。位置やその威容から武烈陵とする説もある。

鳥谷口古墳（葛城市染野）

二上山雄岳の東麓に所在する。土取り工事中に偶然発見され、墳丘の約半分は破壊されていたが、墳形は方墳で、墳丘の規模は一辺七・六メートルに復元される。墳丘には、大型の割石を敷き詰めた精緻な貼石を施す。埋葬施設は、横口式石槨である。石槨は、八石の二上山の凝灰岩を組み合わせたもので、底石・天井石および北側石に加工途中の家形石棺の蓋石を利用していた。

築造は七世紀中ごろ。加工途中の石棺石材を大量に使用していることから、被葬者については、非業の死をとげ、二上山に葬られたという大津皇子の墓とする説がある。

首子古墳群（葛城市染野）

一号墳（櫟山古墳）は、直径二〇メートルの円墳で、

埋葬施設は組合式家形石棺の直葬と横穴式石室であつた。二号墳は一辺一五メートルの方墳で埋葬施設は不明、三号墳は墳形不明で埋葬施設は木棺直葬、四号墳は一辺一五メートルの方墳で、埋葬施設は片袖式横穴式石室に組合式家形石棺を納めていた。五号墳（首子塚）は墳形が帆立貝式古墳と推定されている。八号墳は直径二五メートルの円墳で、埋葬施設は横穴式石室で組合式家形石棺を納めていた。築造は六世紀初めから七世紀中ごろ。

なお、七号墳とされていた方墳状の高まりは、発掘調査の結果、磚仏や瓦などの大量の遺物と礎石が検出され、白鳳時代の寺院の基壇遺構であることが判明し、只塚廃寺とされた。

平林古墳（葛城市兵家）

全長六二メートルの前方後円墳であり、埋葬主体は、後円部の横穴式石室で、南南東に開口する。横穴式石室は、玄室・羨道・前庭側壁からなり、その全長は二〇・一メートルと長大で、県内では橿原市の丸山古墳に次ぐ第二位の規模をもつ。築造は六世紀後半ごろ。盗掘を受けており、棺は追葬の際に羨道に置かれた組合式家形石棺の底だけが残っていた。また、盗掘坑や石室内からは、大量

の須恵器・土師器や農工具などの鉄製品、杏葉や鏡板などの金銅製馬具類、仿製画文帯神獸鏡などが出土した。

二塚古墳（葛城市寺口）

全長約六〇メートルの前方後円墳であり、後円部の中心的な埋葬主体である横穴式石室のほか、前方部と造出部でも横穴式石室が確認されている。三つの石室の平面形は、後円部が両袖式、前方部が片袖式、造出が無袖式であり、規模や天井の構造もそれぞれ異なっている。造出石室から大量に出土した土器などから築造年代は六世紀中ごろと考えられる。

屋敷山古墳（葛城市新庄）

屋敷山公園内にある全長一三五メートルの前方後円墳であるが、中世く近世には、新庄周辺を支配した布施氏や桑山氏の居館として利用され、墳丘は大きく改変されている。発掘調査で長持形石棺の蓋石がくびれ部から出土。この石棺の側石や、堅穴式石室の天井石がそれ以前に出土しており、後円部の埋葬主体は、堅穴式石室に長持形石棺を納める構造であつたと推定される。長持形石棺は、竜山石製で、蓋石の長辺には二

個一対の縄掛突起が造り出されている。棺は、近畿地方の五世紀頃における大型前方後円墳の典型例といえる。

笛吹神社古墳（葛城市笛吹）

笛吹神社内に所在する。墳形は東西約二五メートル、南北約二五メートルの円墳と推定される。築造は六世紀前半ごろ。埋葬施設は片袖式の横穴式石室で、家形石棺を置く。石室・石棺は土砂により下半部分が埋没している。石室の前壁は垂直に近い形だが、奥壁・側壁は天井付近で石材を持ち送る形態をとる。石棺は蓋石の側部に二個一対、計四個の縄掛突起をもつ。家形石棺の形態としては古いもので、蓋石の頂部の平坦面の幅が狭い。この古墳の西方には約七十基の小規模古墳があり、笛吹古墳群と称されている。

新宮山古墳（御所市稲宿）

墳形は直径二五メートルほどの円墳と推定される。築造は六世紀中ごろ。埋葬施設は東南方向に開口する横穴式石室で、玄室内に箱式石棺と家形石棺を安置。石室は両袖式で、奥壁・前壁・側壁ともに天井部付近で石材を持ち送る形態をとる。奥壁寄りにある箱式石棺は、凝灰岩製で、

赤色顔料が塗布されている。家形石棺は刳拔式で、蓋石に小口部に一対、側部に二対の縄掛突起をもつ。水泥古墳・権現堂古墳などとともに、巨勢谷地域における重要な古墳の一つで、巨勢氏の墳墓と考えられる。

水泥古墳（御所市古瀬）

二基の古墳で、今木双墓とも呼ばれている。築造は六世紀後半ごろ。いずれも埋葬施設は横穴式石室である。北古墳（塚穴古墳）は直径約二〇メートルの円墳で、巨石を用いた両袖式の横穴式石室は南に開口する。側壁は天井部付近で石材を持ち送る形態をとり、奥壁・前壁は巨石を垂直方向に積んでいる。排水用の瓦質土管が出土しているが、棺の形態は明らかでない。南古墳（蓮華文石棺古墳）は北古墳の約一〇〇メートル南方に所在する直径約三〇メートルの円墳である。石室内に二個の家形石棺を安置する。奥壁よりに置かれた石棺は小口部の南北一対、側面二対、計六ヶ所の縄掛突起をもつ。羨道に置かれた石棺も同様に六ヶ所の縄掛突起をもつが、南小口部のそれに六弁の蓮華文が施されている。蓮華文は瓦頭で使用されることが多い文様であるが、石棺に施した事例としては全国唯一の例。別称の今木双墓

は蘇我蝦夷・入鹿の墓のことであるが、古墳の年代はそれに合致しない。

宮山古墳（御所市室）

室大墓古墳、室宮山古墳とも呼ばれる。全長二三八メートルの規模をもつ葛城地方最大の前方後円墳。後円部には二つの縦穴式石室があり、そのうちのひとつ（南石室）は中央に長持形石棺が安置されており、石室の内外から多数の副葬品が出土した。長持形石棺は竜山石製で、蓋石の表面に凸帯を削りだし、亀甲状に仕上げる。また、縄掛突起を計六ヶ所造り付けている。石室周囲には埴輪による方形の区画があり、盾形・靱形などの器財形埴輪と家形埴輪が配置されていた。また、石室の上面にも大型の家形埴輪や高杯形埴輪などが配置されていたと推定される。

中世に武内宿禰の墓としての伝承があったほか、葛城襲津彦の墓であるという説もある。五世紀初めの代表的古墳である。

巨勢山古墳群（御所市室・條・朝町・稲宿）

総数が七百基以上におよぶ全国屈指の大型群集墳。宮山古墳の背後にある巨勢山丘陵の尾根上に立地する。築造は五世紀前半から八世紀。

直径一〇メートル前後の小規模円墳が主体で、前方後円墳や方墳なども含まれる。埋葬施設は木棺直葬と横穴式石室が多く、横口式石槨もある。横穴式石室には極めて小規模なものから大型の家形石棺を納める大規模なものまである。

その中で條ウル神古墳は最大のもので、墳形は前方後円墳で全長一〇〇メートル規模になる可能性がある。埋葬施設は大型の横穴式石室で、側面三対計六個の縄掛突起をもつ家形石棺をおく。地形ごとのまとまりからいくつもの支群に分かれ、それぞれが特色をもつ構成となっている。鉄製武器や馬具、土器など豊富な副葬品を納めるものも多いが、全く副葬品を納めない古墳もみられる。

近内古墳群（五條市近内町）

近内丘陵一帯に所在する古墳群。直径約八〇メートルの大型円墳である鐘子塚古墳、一辺五二メートルの方墳であるつじの山古墳、一辺五四メートルの方墳である西山古墳、直径三七メートルの円墳である丸山古墳などがあり、そのほかは小規模な円墳や方墳で構成されている。小規模古墳以外は、埋葬施設については明らかになっていないが、周辺の調査で埴輪などが採集されている。また、つじの山古

墳では、木製の埴輪が樹立されていたことがわかっている。五世紀を中心とした築造年代が想定される。

猫塚古墳（五條市西河内町）

一辺二四メートル以上の方墳で、外部施設として葺石・埴輪列を有し、埋葬施設は、竪穴式石室である。築造は五世紀中ごろ。盗掘を受けていたが、副葬品はよく残っており、金銅製帯金具は、龍文・三葉文を透かし彫りした優品で、舶載品の可能性がある。また、眉庇付冑は二領あり、いずれも金銅装の装飾を施した優品である。とりわけ本体が蒙古鉢形を呈する冑は、稀有な事例であり、眉庇部に透かし彫りや波状列点文の装飾を施すなど、その特異な意匠は全国的にも注目を集めている。吉野川・紀ノ川の水運を経て、朝鮮半島と交渉をもった被葬者像が推定できる。

南阿田大塚山古墳（五條市南阿田町）

吉野川左岸の丘陵中腹に位置する。墳形は前方後円墳で、全長は三〇メートル。築造は六世紀前半。埋葬施設は吉野川産の結晶片岩を積み上げた両袖式の横穴式石室で、南東方向に開口する。玄室の奥壁・前壁・側壁はいずれも天井に向かっ

て石材を持ち送る。石室内からはガラス玉などの装身具類、馬具類、武器類のほか、鉄製釣針、紡錘車と須恵器が出土している。

岡峯古墳（吉野郡下市町阿知賀）

吉野川左岸の丘陵中腹に位置する。墳形は円墳で、規模は直径一五メートル、外部施設として葺石を施す。築造は六世紀後半。埋葬施設は吉野川の結晶片岩を積み上げた、西に開口する両袖式の横穴式石室で、玄室の奥壁寄りに箱形石棺を置く。奥壁には石棚を造り付け、奥壁・前壁は天井に向かって僅かに石材を持ち送り、側壁はやや急角度に石材を持ち送る。石棚や閉塞方法など、同じ石材を使用した吉野川下流の和歌山市岩橋千塚古墳群の横穴式石室と類似する点が多く、紀氏との関係が注目されている。

奈良の自然

奈良公園（奈良市）

東大寺・春日大社・興福寺一帯に広がっている緑地帯のことを奈良公園という。奈良は江戸時代を通じ寺社仏閣を中心とした観光地として繁栄していたが、明治期の廃仏毀釈の嵐などによって観光客が減少し、低迷期を迎えた。そこで奈良の復興策として奈良公園の創設と整備が図られ、明治十三年（一八八〇）に開設が許可された。開設当初は興福寺境内と猿沢池周辺に限られていたが、のちに東大寺境内や春日大社とその周辺も編入され、拡張されていった。

面積は約六六〇㊦で日本有数の規模を持つ都市公園として整備されており、現在は奈良県が管理運営している。

猿沢池（奈良市登大路町）

周囲約三〇〇㊦の興福寺の放生池。興福寺の境内の南に三条大路をはさんであり、五重塔とともに奈良観光の象徴的な存在となっている。天

平時代には存在したことが確実で、仏花を栽培するための興福寺の花園の中に池があった。

この地は古くから著名で、多くの伝承が伝えられる。特に『大和物語』や『枕草子』などに記された采女の話は、平城天皇（文武天皇との説もある）の寵愛を受けた采女が悲恋のために池に身を投げたとあり、池の北西傍に采女神社がある。また中世まで池の南西にあった猿塚は、興福寺で修行している弘法大師に菓子を献じた猿の墓という。竜神が住んでいるとも信じられ、東大寺の鐘や春日野の鹿とともに猿沢池の月は、南都八景のひとつとして室町期以来多くの観光客が訪れた。「澄まず濁らず、出ず入らず、蛙はわかず藻ははず、魚が七分に水三分」という俗謡もある。

吉城園（奈良市登大路町）

依水園の南隣にある庭園で、もと興福寺塔頭の摩尼珠院があったとされる場所。依水園ほど成立の経緯や変遷は明らかではないが、大正八年（一九一九）に現在の庭園や建物が造られた。昭和五十八年（一九八三）に奈良県が取得、平成元年（一九八九）から一般公開されるようになった。

依水園（奈良市水門町）

春日奥山から流れ出す吉城川を引き入れて造った奈良を代表する庭園。二つの池泉回遊式庭園が組み合わされたもので、かつて奈良の主要産業であった奈良晒の豪商清須美家の庭園として整備された。昭和五十年（一九七五）国の名勝に指定。東大寺南大門、若草山、高円山などを借景として取り入れ、池の中の島には東大寺大仏殿の礎石なども配されている。園内には高麗や李朝の陶磁器や中国の青銅器などを展示する寧楽美術館もある。

若草山（奈良市）

奈良市北東にある山で、嫩草山とも書く。標高は三四二㊦。山体は復輝石安山岩からなり、なだらかな草地が広がっている。山の形が菅笠の形をしていて三つの嶺が重なったように見えることから、三笠山と呼ばれることもある。このために阿倍仲麻呂の歌に出てくる御蓋山と混同されることも多かった。『伊勢物語』に若草山の名が見えるが、このころには樹木の茂る山であつたらしい。中世に東大寺と興福寺の境界を明瞭にするために、樹木を切り払ってスキの草原にしたという伝承があり、毎年行われる「山焼き」の起源を

この伝承にもとめる説もあるが、真偽のほどは明らかではない。

柳生花しょうぶ園 (奈良市柳生町)

新陰流の創始者柳生石舟斎や宗矩、十兵衛などの柳生一族が眠る芳徳寺から坂を下りると正木坂道場があるが、そこからさらに下ったところに柳生花しょうぶ園がある。約一万平方メートルの園内に、六十品種以上の花しょうぶが植えられ、六月上旬から七月初旬にかけて色とりどりの花が咲く。

月ヶ瀬梅林 (奈良市月ヶ瀬)

合併によって奈良市となった旧月ヶ瀬村地区の高原を下刻して深さ百数十メートルの名張川の峡谷があるが、下流域の京都府南山城村に高山ダムが建設されて月ヶ瀬湖が形成された。

この両岸に国の名勝である梅林が続いている。江戸時代に訪れた多数の文人墨客によって有名になった梅林で、現在は月ヶ瀬橋を中心に右岸の高原部・尾山地区および下流部の桃香野地区にかけて約一万本もの梅の木が植えられている。尾山から月ヶ瀬橋にかけて一目八景・天神の森・祝谷・一目千本・鶯谷などの景勝地がある。

吉野地方の賀名生梅林、広橋梅林とともに奈良県の三大梅林といわれる。

大和青垣国定公園 (奈良市・天理市・桜井市)

昭和四十五年(一九七〇)十二月二十八日に、奈良盆地の東部丘陵線の保護と整備を主たる目的として指定された国定公園で、面積は約五七四〇ヘクタール。奈良盆地北東隅の春日山と高円山、盆地南東隅の天神山と三輪山は、それぞれ原始林と二次的林という対照的な植生を有しており、春日原生林(春日山原始林)は大正十三年(一九二四)に国の天然記念物、昭和三十年(一九五五)には特別天然記念物になっている。

神野山自然公園 (山辺郡山添村)

大和高原のほぼ中央部にある神野山を中心とする自然公園。神野山は標高六一八・八メートルの円錐状のなだらかな形状をもつ。ハンレイ岩からなっているために侵食や風化に強く、準平原化する過程で残丘として形成された。

北東側斜面の標高四五〇～五三〇メートルの場所に、長さ約六五〇メートル、幅約三〇～四〇メートルの鍋倉溪があり、黒褐色の角閃ハンレイ岩が露出して谷を埋めた特殊な地形も見られる。

金剛生駒紀泉国定公園

(生駒市、平群町、三郷町、香芝市、葛城市、御所市、五條市)

奈良県と大阪府にまたがる国定公園で、昭和三十三年(一九五八)四月十日に「金剛生駒国定公園」として指定されたが、平成八年(一九九六)十月二日に和泉山脈一帯を編入し、名称も変更された。面積は約二万三〇〇〇ヘクタールで、このうちの約五〇〇〇ヘクタールが奈良県に属している。生駒・金剛山地と和泉山脈の一帯を占め、奈良県内は生駒市・生駒郡・香芝市・葛城市・御所市・五條市など広範な範囲にわたる

生駒山は標高六四二メートル。生駒山地は花崗岩からなるが、山頂部はハンレイ岩からなるために侵食から取り残されて高くなった残丘と考えられている。金剛山は金剛山地の最高峰で標高は一一二五メートル。役小角や修験道で知られ、金剛砂の産出も有名。

県立竜田公園 (生駒郡斑鳩町)

生駒郡斑鳩町の龍田(竜田)はかつて大坂と奈良を結ぶ奈良街道(大坂街道)の宿場町として栄えた。現在の国道二十五号のすぐ北側に龍田の町並みが残っている。この龍田の町並みを西へ進

むと猫坂と龍田大橋があるが、竜田川に架かる朱色に塗られた橋が、龍田橋を含めて三本ある。この三本の橋の周辺が県立竜田公園に指定されており、在原業平をはじめとする平安の歌人が詠じた紅葉の名所として知られる。

三室山（生駒郡三郷町）

奈良県と大阪府の境界近くにある山で、標高は一三七^{メートル}。『古今集』に「たつた川もみちばななる神なびのみむろの山に時雨ふるらし」、また『後拾遺集』には能因法師の歌として「嵐ふくみむろの山のもみぢ葉はたつ田の川の錦なりけり」とある。『大和志』には三室山として東方約四^{キロ}の山が神奈備山として記されているが、『旧跡幽考』には本宮より四町ばかりとし、三室は神の社で三室山は神のいます山であるとして、龍田大社本宮の近くにある山を正式の三室山としている。龍田大社から三室山山麓を経て大阪府柏原市雁多尾畑へ通じる道は、古道の竜田越えの道路と推定されている。

県立矢田自然公園（大和郡山市）

生駒山地の東に連なる矢田丘陵一帯の公園で、県立公園の指定を受けている。子どもの森や国

見台展望台などを中心として、斑鳩の里から松尾寺・金剛山寺（矢田寺）・東明寺などを経て、檜木峠、霊山寺に至る遊歩道も整備されている。

三輪山（桜井市三輪）

桜井市三輪の東部にある円錐形の山で、標高は四六七^{メートル}。『古事記』や『日本書紀』には三諸山・御諸山・三諸岳などとも記される。

山麓には日本最古の神社のひとつである大神神社が鎮座する。有名な三輪山伝説も伝えられ、祭神は三輪山を御神体とする大物主神で、白蛇が神体とも考えられている。この大神神社の社紋は三本の杉の木が横並びに描かれていて、神奈備・真穂三諸山・甘嘗備の三諸山に由来すると言われ、神の森、浄域であることを表現している。三輪山自体が神体であるため大神神社には本殿がなく、山中は浄域のために禁足地となっている。また山中には巨石群や磐座などの祭祀遺跡も多い。

室生赤目青山国定公園

（桜井市、宇陀市、曾爾村、御杖村、東吉野村）
奈良県と三重県にまたがる国定公園で、昭和

四十五年（一九七〇）十二月に指定された。総面積は約二万六〇〇〇^{ヘクタール}であるが、このうちの約二分の一が奈良県内にあたる。桜井市、宇陀市、曾爾村、御杖村、東吉野村に広がっており、大和高原南部地区・室生火山群地域・高見山地・青山高原の四地域に分けられている。

室生山暖帯性シダ群落、丹生川上中社のツルマシリョウ自生地、吐山・向淵スズラン群落などは天然記念物に指定され、各地域ごとに地形学・地質学的に特異な性質も見られる。特に、室生寺付近一帯には柱状節理と呼ばれる溶岩が冷えて固まるときに容積が縮小してそれにもなつて節理が垂直に入った地形が分布しており、大野寺の磨崖仏などはこれを利用したものとして知られる。

滝谷花しょうぶ園（宇陀市室生区滝谷）

園の敷地は以前水田であったが、地元出身者が、昭和五十九年（一九八四）から室生の活性化をめざして組合を作つてスタート、同六十年（一九八五）に開園した。六月上旬から七月下旬には園内一面に花しょうぶが咲き乱れ、また四月下旬から五月中旬にかけては芝桜も広がる。

大和三山（橿原市）

橿原市にある畝傍山・耳成山・天香久山の三山の総称。南西に位置する畝傍山は標高約一九九メートルで三山のなかでは最も高く、花崗岩と安山岩から成るが火山が侵食されて現在のような山容となった。耳成山も畝傍山と同様に花崗岩と安山岩からできている火山で標高は約一三九メートル、藤原京の中軸にあたるために古代大和の都城計画の基準となったと推定されている。また天香久山は火山ではなく、南東部から延びる多武峯の尾根の一部で標高は約一五二メートルあるが、山麓部の標高が約八〇メートルあるためにそれほど高くは見えない。

甘樫丘（高市郡明日香村）

この地名は古くから見え、甘樫のほか、味樫、甘樫、味白樫、味樫、甘樫などとも書かれたとされる。『齐明天皇紀』の記事に、丘の東に須弥山を造ったとあることや東方の川が飛鳥川であると考えられることなどから、高市郡明日香村豊浦の東北方にある標高約一四八メートルの豊浦山一帯をさすと推定されている。しかし、『皇極天皇紀』に見える蘇我蝦夷・入鹿の父子が、家を「岡」に並べ建て、蝦夷の家を上宮門、入鹿の家

を谷の宮門と称し、家の外に城柵を門の傍らに兵庫を作ったという記事との関連など未解明な謎が多く残されている。最近では蘇我氏関連の可能性のある遺跡なども発掘されているが、依然としてその全容は解明されていない。

屯鶴峰（香芝市穴虫）

香芝市にある田尻峠から穴虫峠にいたる約一六〇メートルにおよぶ特異な自然景観で昭和二十六年（一九五一年）に県の天然記念物に指定された。二上山から流紋岩質の火砕流が爆発とともに噴出し、角レキや火山灰が沈降によって形成された湖に堆積し、白っぽい凝灰岩となった。それが地殻変動によって北側に傾いた地層が出現した。この凝灰岩層は硬軟互層となっているために選択侵食されて、深い谷や、奇峰、土柱などの奇異な地形が造り出されたとされる。凝灰岩の白い色が木々の間に散在しているさまが鶴がたむろしているように見えるから、屯鶴峰の名称が生まれたと言われる。

馬見丘陵公園（北葛城郡河合町・広陵町）

平成三年（一九九一年）に県立公園として開園された都市公園で、巢山古墳などの著名な古墳

群も整備されている。馬見丘陵は、香芝市・大和高田市・河合町・上牧町・広陵町などにおよぶ洪積台地で、南北約七キロ・東西約三キロ。東は高田川、西は葛下川、北は大和川によって限られる。台地の標高は七〇～八〇メートル、台地の麓は四五～五五メートルで、沖積平野との比高は二五メートル、北へ向かつて緩やかに傾斜するなどらかな丘陵で、奈良盆地の平野部とは異なった様相を見せていた。

二上山

葛城市當麻と大阪府太子町にまたがる。二上山火山群の主峰で、雄岳（標高五一七メートル）と雌岳（四七四メートル）の二峰からなる。古代の人々は二峰を男女の二神に見立てて「二神山」という名でも呼んだ。トロイデ式の旧火山であるがその火口は明らかではない。石器に用いるサヌカイトや、建築用の松香石、研磨用の金剛砂の原料である柘榴石などを産出し、産業や文化の発展にも寄与してきた。謀反の罪に処せられた大津皇子が雄岳山頂に埋葬されたと伝えられる。

金剛山（御所市）

御所市と大阪府千早赤阪村の境界にそびえる山で、金剛生駒紀泉国定公園の真ん中にあたる

る。標高は一一二五^{メートル}で金剛生駒連山の最高峰。葛城山・高天山・高間山ともいわれる。役行者の修行地と伝えられ、長年にわたって多数の修行者を集めてきた神聖神奈備山として知られる。役行者創建と伝えられる金剛山転法輪寺や葛木神社があり、数多くの伝承も残されている。

葛城山（御所市）

御所市と大阪府千早赤阪村の境界にそびえる山で、標高九五九^{メートル}の金剛山地の一峰。南北に延びる金剛山地のうちで、水越峠より北を指すが、山頂部がなだらかな高原状になっていることから葛城高原と呼ばれることが多い。山名は『日本書紀』に記された足の長い土クモのような古代人が暴れるので、葛のツルで編んだ網で縛ったという伝説に由来するともいわれる。ただし古くは金剛山を含む山々を葛城山と総称していたらしく、戒那山・篠峰・天神山の異称もあった。

賀名生梅林（五條市西吉野町）

五條市西吉野町の北曾木集落一帯に広がる梅林。月ヶ瀬・広橋とともに奈良県の三大梅林のひとつとも言われる。古くは穴生と呼ばれていたが、後村上天皇によって南朝が正統であるとい

う主張が叶うようにとの願いをこめて「叶名生」と名づけられ、のちに賀名生の字に改められたと伝えられる。二月下旬から三月下旬にかけて約二万本の梅が咲いて多くの観光客を集める。

広橋梅林（吉野郡下市町）

吉野郡下市町にある梅林で、月ヶ瀬梅林・賀名生梅林とともに県下三大梅林として知られる。秋野川に沿って南下すると広橋峠に達するが、この峠の北斜面に約二五^{センチ}の梅林が広がっている。この広橋峠の標高は約四五〇^{メートル}で下市・大淀町はもちろん葛城・金剛山系や奈良盆地を眺望することができる。

吉野熊野国立公園

（五條市、吉野町、黒滝村、川上村、天川村、上北山村、下北山村、十津川村）

奈良県・和歌山県・三重県にまたがる国立公園で、昭和十一年（一九三六）二月一日に指定された。総面積は約五万九〇〇〇^{ヘクタール}で、うち奈良県に属する面積は約三万一〇〇〇^{ヘクタール}。桜の名所として有名な吉野山をはじめ、八経ヶ岳（八剣山）・稲村ヶ岳・山上ヶ岳などの山々からなる大峰山脈や大台ヶ原などが含まれる。

吉野山（吉野町）

大峰山脈の北端にある山で、吉野川支流の丹治川の上流に位置している。『万葉集』などには吉野の山のほかに御金岳・水分山・高城山・青根ヶ峯・耳我嶺・耳我山などの名称が見られるが、平安期には吉野の山が広く使用されるようになり、固有名詞としての吉野山が定着していった。

吉野山は桜の名所としても知られ、全山三万本とも称せられる。ヤマザクラは蔵王権現の神木とされて古くから伐採が禁じられ、平安期から苗木の寄進が行われてきた。西行法師の歌などによってもいつそう有名になり、わが国有数の桜の名所になった。

大峰山脈

（五條市、吉野町、黒滝村、川上村、天川村、上北山村、下北山村、十津川村）

紀伊山地中央部の褶曲山脈。山脈の名称は北部の霊峰山上ヶ岳を大峯と称することに由来している。南北約五〇^{キロメートル}におよぶ壮年期の急峻な山脈で、近畿の屋根・大和アルプスともいわれる。山上ヶ岳（一七一九^{メートル}）、稲村ヶ岳（一七二六^{メートル}）、大普賢岳（二七八〇^{メートル}）、行者還岳（一五四六^{メートル}）、弥山（一八九五^{メートル}）、近畿最高峰の八

経ヶ岳（八剣山、一九一五[㊦]）、仏生ヶ岳（一八〇五[㊦]）、釈迦ヶ岳（一八〇〇[㊦]）などが連なり、特異な地形や鍾乳洞なども見られる。

山上ヶ岳は七世紀に役行者が開いた霊峰で、修験道の聖地とされ、山頂には根本道場の山上蔵王堂（大峯山寺）があり、現在でも女人禁制とされる。

大台ヶ原（上北山村）

吉野郡上北山村と三重県の境にある台高山脈南端に位置する標高一五〇〇[㊦]前後の台地。

吉野熊野国立公園に属する。山頂域には牛石ヶ原・正木ヶ原・西大台ヶ原などの高原状の平坦地が広がり、周囲を日出ヶ岳（一六九五[㊦]）・三津河落山（一六五四[㊦]）・経ヶ峰（一五二九[㊦]）によって限られる。年降水量五〇〇〇[㊦]ミを超えることがある日本有数の多雨地帯である。

瀬八丁（十津川村）

吉野熊野国立公園に含まれる景勝地で、瀬峡の一部を指す名称。瀬峡は奈良県南東部に発して、三重県・和歌山県の県境を流れて熊野川に注ぐ北山川の峡谷を言い、「とろきよう」とも読む。下流から下瀬、上瀬、奥瀬に分けられ

るが、瀬峡全域を北山峡、また奥瀬にあたる部分のみを北山峡と呼ぶこともある。このうち、下瀬は和歌山県新宮市熊野川町玉置口から奈良県十津川村田戸までの約一・二[㊦]で、この部分を瀬八丁という。国指定の特別名勝・天然記念物で、玉置口近くの洞天門から上流に進むにつれて、夫婦岩などの奇岩や、高さ二〇[㊦]・幅八七[㊦]の屏風岩、高さ四五[㊦]の天柱岩などの巨岩や、奥行四二[㊦]の寒泉窟や竜泉窟など、変化に富んだ峡谷美を味わえる。

吉野川津風呂自然公園

（五條市、吉野町、大淀町、下市町）

吉野川と津風呂川合流点付近の自然公園。昭和四十七年（一九七二）に県立公園に指定された。吉野町宮滝付近から五條市栄山寺付近に至る吉野川沿岸と津風呂湖周辺の約二五[㊦]にわたり、面積は約二五平方[㊦]におよぶ。

津風呂川は大宇陀の関戸峠付近に発する河川であるが、十津川・紀ノ川総合開発事業の一環として、昭和二十九年（一九五四）にダム建設が着工、三十七年（一九六二）に重力式ダムが完成した。吉野川上流の大迫ダムとともに奈良盆地の灌漑用水として送水される吉野川分水への

利用を主たる目的としたダムで、湛水面積は約一・五平方[㊦]で津風呂貯水池あるいは津風呂湖と呼ばれる。

高野龍神国定公園（野迫川村）

奈良県と和歌山県にまたがる国定公園で、昭和四十二年（一九六七）三月二十三日に指定された。高野山から龍神温泉一帯を占めており、総面積は約一九二平方[㊦]、うち奈良県側は約五二平方[㊦]である。北から高野山、白口山、護摩壇山などの一〇〇[㊦]以上の山岳地が続き、有田川や日高川流域の渓谷や滝などの自然景観や温泉にも恵まれている。北部の中心は仏教の聖地高野山、公園の南端に龍神温泉がある。

高見山（東吉野村）

奈良県中央東部の宇陀郡南部から三重県にまたがる高見山地の主峰で、標高は一二四九[㊦]。南麓の高見峠（標高八八六[㊦]）と三重県境の三峰山の南麓を結ぶ線上に、東西方向の中央構造線が走るが、この中央構造線に面する断層崖上に突起している山が高見山。『万葉集』の巻一、石上麻呂の「吾妹子をいぎみの山を高みかも大和の見えぬ国遠みかも」のいぎみの山とされる。

国指定の天然記念物

春日山原始林（奈良市春日野町）

春日山は奈良市の市街地の東側に屏風のようにそびえる標高四九八メートルの南北に長い山地である。古くから禁伐林として保護されてきた原始林である。山中には暖地性の蔓植物や温帯性の樹木が生育しており、春日山は標高が高くはないが、複雑な地形が反映したものである。

知足院ナラノヤエザクラ（奈良市雑司町）

東大寺の塔頭、知足院の裏山崖上の八重桜がナラノヤエザクラと命名され、天然記念物に指定された。ナラノヤエザクラは、ほかの八重桜より開花が遅く、四月下旬から五月上旬になる。蕾は濃紅色を帯び、開花すると淡紅色で、むしろ白味が強いが、終わり近くなると花卉に紅色を増してくる。

春日神社境内ナギ樹林（奈良市春日野町）

竹柏、すなわちなぎは、春日大社の境内を埋め

尽くすように一面に生育しているが、天然記念物指定範囲は、本殿の東側、春日御蓋山（標高二九七メートル）の西斜面のほぼ純林状のナギ林の一部である。ナギはもとからこの地に生育していたものではなく、春日大社創祀にあたって献木されたものが、シカが食べないので、むしろシカがナギを守ったという形になって、どんどん増えて純林状になったと考えられている。

奈良のシカ（奈良市）

奈良公園一帯に棲息するシカは、春日大社創祀にあたって、春日大明神がシカに乗って、鹿島から来られたという説話から「神鹿」として愛護されてきた。明治の初期と第二次世界大戦中・戦後を通じて頭数が激減したのを機に、奈良のシンボルとして保護、昭和三十九年（一九六四）ごろに約千頭に達し、現在では千二百頭を数えている。奈良公園には奈良のシカの多数が生活しているが、主食は公園のシバ（夏季）やスズメノカタビラ（冬季）などで、年中、草刈をしなくても、草丈五センチぐらいに保たれている理由でもある。

ルーミスジミ棲息地（奈良市春日野町）

春日山山麓地帯の潜在自然植生はイチイガシ

林であるが、奈良のシカが棲息する関係があつて、本来の林相とは変わつて、イチイガシは巨樹になつて一帯に散生している。ルーミスジミはこの木の新葉の裏面に産卵し、孵化した幼虫はその葉を食べて育つことがわかっている。ルーミスジミはシジミチョウ科に属する小型の蝶で、雄は光沢がある青紫色をしていて美しい。ルーミスジミは東部ヒマラヤからインドシナ北部・中国西北部・台湾・日本にかけて分布するが、日本ではいずれの棲息地も狭い範囲に限られ、棲息数も少ないといわれている。

吐山スズラン群落（奈良市都祁吐山町）

宇陀市室生区に向淵と同様に、スズラン自生地の南限地帯として指定された貴重な存在である。この地域のスズランは寒冷時代の遺存植物で、この地一帯が標高五〇〇〜六〇〇メートルの高原で、気候が寒冷であるために、遺存したものとされている。吐山では薪炭材として利用されるクスギ・コナラの二次林の林床にからうじて生育を続けてきたが、二次林はスギ・ヒノキの植林に置き換えられ、また、林床の草本の刈り取りも行われなくなり、じわじわとスズランの生育地が狭められていった。現在は年二回の下草刈、草刈後の持ち出し、

林床の明るさを確保するための間伐、枝落としを行い、最近では着花個体も多くなり、しだいに生育面積を広げている。

与喜山暖帯林 (桜井市初瀬)

長谷寺の東北に連なる約三六〇畝の照葉樹林である。与喜山暖帯林では山麓にイチイガシ林、中腹から山頂(標高四五五・三^ミ畝)にかけてはやや乾燥したところに発達するコジイ(ツブラジイ)林がみられる。

向淵スズラン群落 (宇陀市室生区向淵)

吐山スズラン群落とさほど離れていない一連の地形のところにスズランの大群落が発見され、同時指定となった。

室生山暖地性シダ群落 (宇陀市室生区室生)

室生寺の境内、奥の院へ至る石段の東側にあたる無明谷はスギ壮齡林で覆われているが、この薄暗い林床にはシダ類の種類がきわめて多い。暖地性シダのほかに、多数の種類が混生し、なかには温帯域にも産する種類もあり、大群落をつくっている。特に、イヨクジャク、イワヤシダが生育することは、暖地性シダ類の分布の北限地域として、

学術的に重要である。

ハツ房スギ (宇陀市菟田野区佐倉)

ハツ房スギは桜実神社の境内、社殿に隣接した東の高台にある。数本の巨幹が、あるものは上方に、あるものは水平に伸びて立ち上がるなど、複雑な形状を描いている。これは一株のスギが多分岐したものではなく、樹幹の状況から大小六株のスギの幹の基部が互いに癒着したものと考えられる。このうち最大のものは根回り約八・四^ミ畝、その他の株の根回りは一^ミ畝から四^ミ畝あり、六株の全周囲は約一三・五^ミ畝、高さは約二〇^ミ畝ある。一般にスギは直幹であるが、ハツ房スギは幹の接合によって珍奇な形態を示している。なお、昭和五十四年(一九七九)の台風で中央の一幹が倒れたが、樹勢はなお旺盛である。

カザグルマ自生地 (宇陀市大宇陀区小附)

カザグルマはキンポウゲ科の落葉つる性植物で、五月ごろ大輪で淡紫色の美しい花を枝端に一個咲かせる。花弁状に見えるのは萼で、一般に八枚ある。宇陀市大宇陀区小附のスギ・ヒノキの山林、約二・二四^ミ畝には、木本に巻きついてカザグルマの自生がみられる。カザグルマ自生地の生育状態は

良好で、かつ代表的なものであるので天然記念物に指定された。

屏風岩、兜岩、および鎧岩 (宇陀郡曾爾村)

青蓮寺川の上流、奥香落溪谷の一角にそびえる俱留尊山(標高一〇三八^ミ畝)から噴出した安山岩を青蓮寺川が侵食してできた大断崖で、柱状節理が発達する安山岩が示す特殊な景観である。大断崖は西から屏風岩(九三六^ミ畝)・兜岩(九二〇^ミ畝)・鎧岩(八九四^ミ畝)と東北の方向に五^キ強奇形を形づくっている。屏風岩は二^キ強続く大屏風を立てたように見える絶景で、兜岩・鎧岩も柱状節理が兜や鎧のように見えるところから名付けられたものである。

二見の大ムク (五條市二見町)

足立宅屋敷の東北裏、道路に面した庭園の中に生育するムクの巨樹で、土際の幹周りは約一五・八^ミ畝、地上一・五^ミ畝の幹周りは約八^ミ畝ある。樹高は指定当時は三〇^ミ畝あったが、地上七^ミ畝あたりで分岐したうちの、最もよく伸長した幹が台風によって折損し、現在の高さは二一^ミ畝、主幹は空洞となり、樹勢はやや衰えている。

妹山樹叢 (吉野郡吉野町河原屋)

妹山は吉野川の右岸に屹立する標高二四九^ノの小丘で、浄瑠璃の『妹背山婦女庭訓』の舞台として有名である。妹山の西南麓に大名持神社を奉祀した貞観元年(八五九)以来、斧鉞をいれず今日に至った稀に見る林相を保った樹叢である。

丹生川上中社のツルマンリョウ自生地

(吉野郡東吉野村小)

丹生川上神社中社の背後のほぼ北にあたる六五九^ノの三角点から伸びる大きい尾根が、高見川にぶつかる地点である、尾根筋の末端西側に指定地が広がる。指定地は常緑広葉樹林で覆われ、その林床約一^ノにツルマンリョウが大群落をつくっている。

オオヤマレンゲ自生地 (五條市、吉野郡天川村)

オオヤマレンゲは落葉の小高木ないしは低木で、枝は長く伸びる。葉は長さ一五^{センチ}前後で山地に自生するモクレン科の植物では大形の方である。芳香のある白色の花を、六^ノ七月に下向きに開く。紅色の種子をいれた果実(集合果)は九月に熟す。大峰山脈の主峰、八経ヶ岳の周辺のシラビソ林の林縁にはオオヤマレンゲが群生し、そのみど

とな集団が天然記念物に指定されて今日に至っているわけであるが、シカが餌としてオオヤマレンゲの展葉した葉を片っ端から食べるようになり、株全体が枯死するにいたり、著しく景観を損なっていることが判明した。平成八年(一九九六)の調査によって、翌年、翌々年の二年にわたって防鹿柵を設置し、指定地内の絶滅を免れることができた。

三ノ公川トガサワラ原始林 (吉野郡川上村)

トガサワラは日本特産の固有種で、奈良県、和歌山県、三重県、高知県の魚梁瀬地方にのみ産する常緑針葉の高木である。雌雄同株で樹高は四〇^{メートル}、直径は一^{メートル}以上に達する。三之公周辺のトガサワラ自生地は、川沿いで標高は四二〇^{メートル}四六〇^{メートル}、ピークは一〇〇〇^{メートル}を越すが、急峻でしかも複雑な地形に、常緑広葉樹を交えた混交林をなしている。

仏経嶽原始林 (吉野郡天川村、上北山村)

仏経嶽は国土地理院の地形図には八剣山という名称が使われているが、地元では八経ヶ岳と呼んでいる近畿地方でもっとも高い一九一五^{メートル}の山岳である。この山の標高は亜高山帯の領域に入

り、山頂一帯にはシラビソ林が広がっている。過熟林分の枯死とその林床にはいりこんだ稚樹群との交代現象により、水平方向に白色の横縞をなすのが縞枯れ現象であるが、シラビソのほぼ純林をなす八経ヶ岳でも多少不規則な箇所もあるが、この現象が認められていた。ところが最近シカの増加とともにシラビソの特に稚樹の樹皮を食害したために、縞枯れが次第に不規則になり、往時の姿は認められなくなっている。

シンラン群落 (吉野郡上北山村)

シンランは樹幹に着生しているビロウドシダやマメヅタのなかに細い茎を這わせる暖地性の常緑のイワタバコ科の多年生草本で、伊豆半島と京都府以西の本州、四国、九州に分布する。七^ノ八月に上部の葉腋に長さ三^{センチ}五^{センチ}の淡桃色をした花をつける。吉野郡下北山村の大字前鬼千代迫牛抱坂のツクバネガシに着生していたシンランが昭和三年(一九二八)二月に指定されたが、山林火災によつて絶滅し指定解除となった。その後、上北山村の水分神社飛び地の境内のツクバネガシにシンランが着生しているのが発見され、指定されたものである。

花の名所

桜

全国には各地各様、桜の名所や名木があつて
絢爛たる花絵巻が解かれていくが、その筆頭は吉
野であろう。全山を山桜の淡い色で染め上げる
壮麗な風景と刻まれた歴史の深さは桜の国広し
といえど吉野の右に出るところはない。吉野は桜
の聖地、桜源郷。吉野と桜の結びつきは天智天
皇（六六八〜六七一）の頃、役小角が大峰山で
修行をしている時に感得した蔵王権現を桜の木
に刻んで本尊にしたことから。以来、御神木とし
て手厚く保護されてきた。厳しく伐採を戒める
一方、寄進や献木がさかに行われて一目千本、
桜尽くしの山となった。

都が京都へ移されてからも吉野の桜は人々の
心を惹き付けた。西行を代表に吉野恋いは数々
の歌に詠まれ、吉野の桜は嵐山の名前と共に京
都へ移したほど。

大野寺の糸しだれ桜、佛隆寺の石段に差しか
けて咲く千年桜、本郷の屋敷跡の豪快なまでの

しだれ桜、奈良公園で一番に咲く氷室神社のし
だれ桜といった桜並木に立ち勝る一本桜の艶麗
華麗。明日香村石舞台を縁取る桜、長谷寺、談
山神社の桜、郡山城跡、若草山の桜など奈良の
桜には深い歴史が彩りを添え、いよいよ美しい。

桃

「香具山は畝傍を惜しと耳梨と相争ひき」と天
智天皇は大和三山に託して額田王、大海人皇
子との関係を歌ったともいうが、その香具山東山
麓には万葉の森公園があり、春には桃の花が咲
く。

古代の道として知られる山の辺の道は古代王
朝と豪族の栄枯盛衰を物語るように、大小の古
墳群を縫って続く。景行陵や崇神陵、さらに檜
原神社あたりには桃畑が多く、あでやかな花で
古道を彩る。高みからは大和三山が春霞の中に
見える。

雪柳

別名コゴメバナともいう雪柳は文字通り、柳の
枝に雪が積もったかのように真っ白の花を咲かせ
る。法華寺の東側にひっそりとしたたずまいの
海龍王寺は、崩れかけた土塀、風雪に耐えた門

がいかにも歴史を物語る。古さびた寺もユキヤナ
ギが花をつけると一気に春の装いとなる。背丈以
上にもなるユキヤナギが奔放に枝をしならせ、雪
さながらの小さな花びらを境内に散らす。

薔薇

バラといえば、ヨーロッパ的なものを思い浮かべる
が、万葉集にも「うまら」として歌われている。う
まらはイバラの古語で棘のあるノイバラを指してい
たらしい。現代のバラは中東や中国の原産種、日
本原産のノイバラなどが加わって交配、改良され
て作られた園芸種。

舍人親王が『日本書紀』の編纂と四十二歳の厄
除けを祈願して建立したという日本最古の厄除
け霊場松尾寺はバラの寺としても知られている。

東大寺大仏の開眼供養の大導師を務めたイン
ド僧婆羅門僧正菩提遷那ゆかりの霊山寺境内
には京都大学農学部造園学研究室の設計によ
るバラ園がある。約二千株もの花によって輪廻転
生が表されている。花の時期に行われる薔薇会
式では、とりどりのバラの花びらが散華として本
堂に舞う。

牡丹

百花の王としてその美しさを誇る牡丹は中国が原産地。楊貴妃が愛した花としても知られる。長い登廊に咲き競う長谷寺のボタンは唐の僖宗皇帝后馬頭夫人から献納されたと伝えられている。馬頭夫人は優しさゆえに皇帝の寵愛を受けたが、それを妬む他の妃からは馬のような鼻と笑われていた。夫人は霊験あらたかという長谷寺の観音にすぎり、ついには絶世の美女となったという。そのお札として献納されたのが長谷寺のボタンのほじまり。

藤

『枕草子』の中で清少納言は「藤の花は房が長く、紫色があざやかなほど見ごたえがある」と書いている。紫は禁色として高貴な人にだけ許されていたという。その紫をたつぷりと連ねるフジの花房を藤原氏は愛し、一門の栄華を象徴させた。『源氏物語』でも藤壺、紫の上とフジや紫が重要な位置を占める。作者自身も名前に紫を持つ紫式部。

藤原氏によって開かれた春日大社には見事な砂ずりのフジが風に揺れる。朱塗りの回廊、千を越す釣灯籠を背景に咲く紫の花は、夢のように

香る。

石楠花

清涼な山あいに咲く石楠花。奈良で知られる名所といえやはり室生寺だろう。赤い欄干の太鼓橋を渡ると「別格本山女人高野室生寺」の大きな石標。初夏、しっとりとした湿潤な大気と緑の深い息づかいの中、室生寺は薄紅のシャクナゲに包まれる。鎧坂と呼ばれる石段から金堂を見上げるあたり、さらに歩を進めて五重塔を見上げるあたりは殊の外の美しさ。シャクナゲの光背のようにハナズオウも濃い赤紫の花をつける。

花菖蒲

いずれアヤメかカキツバタと比べられない美人のようすを言ったものが、見分けられないことの喻えにも使われる。これにハナショウブが加わると一層難しくなる。アヤメは花びらに黄と紫の模様のことを綾目と言ったことから、カキツバタは布に花を摺り付けて染料にしたことから「書き付け花」と呼ばれ、転訛したのが語源。花の中央から外へ向けて白か黄の模様が入っている。ハナショウブは園芸種で花が大きく、青紫、赤紫、白など色彩に富む。

美しい水田を開発から守り、観光に生かそうと取り組んだ滝谷花しょうぶ園は地元の人々の思いが結実した花園。剣豪の里柳生にもハナショウブが美しい。柳生十兵衛が一人の弟子を鍛えたという正木坂道場から下ったところにあるしょうぶ園は剣に似た葉をずっと立て、颯爽と咲く。

杜若

「吾のみや かくや恋ひすらむ垣津旗 につらむ妹は いかにかあるらむ」(巻十一 一九八六 作者未詳)と『万葉集』にも詠まれるカキツバタ。「私だけがこんなにも恋しているのだろう。カキツバタのように美しく照り映えるあなたは一体どうしているのだろう」とやはり美しい人の喻えになっている。

春日山に降った雨を集めて流れとする吉城川を引き入れ、東大寺南大門、若草山、高円山を借景にした奈良ならではの回遊式庭園が依水園。かつて南都の豪商宅だった庭園には東大寺大仏殿の礎石も配置され、名園として知られている。奈良に住んでいた文豪、志賀直哉の日記に「武者来て依水園の庭を見に行かぬかといふ」と書かれている。武者とは武者小路実篤のこと。深い緑の

合間に咲くカキツバタを文豪二人も見ただろうか。

桜草

桜前線が大和路を駆け抜け、花を求めた心にぽつと穴があく頃、その穴を埋めるかのように小さな草が桜の化身となつて甦る。金剛葛城の山麓に深い歴史を畳み込む高鴨神社には五百種二千二百を越える日本サクラソウの鉢が並ぶ。うつそうと茂る老樹に囲まれ、森閑とした境内にはサクラソウの季節、よしず張りの展示場が作られ、「緋の袴」「吹上桜」「三保の古事」といった雅やかな品種が古式の作法のままに飾られ、その美を競う。

躑躅

坪庭の片隅から広大な山を埋めるまで、桜の後を引き受けて爛漫の春を彩るツツジ。ツツジの呼び名は花びらが筒状になっているため「筒咲きの花」からツツザイ、ツツジとなつたとの説がある。葛城山の斜面にうねりのままに咲くツツジは燃え立つような赤いヤマツツジ、船宿寺ではヒラドツツジ、キリシマツツジ、サツキがひと月以上にもわたって咲き継ぐ。境内までの長いアプローチまで見

事なツツジの花回廊として楽しませる長岳寺などツツジに彩られる名所は多い。

紫陽花

雨をくぐるたびに巧みに七色を操るアジサイ。「矢田の地藏さん」として信仰を集める金剛山寺（矢田寺）では広い境内をアジサイが埋める。大ぶり、小ぶり、赤系、青系とさまざまなアジサイが起伏に富んだ庭園に咲く。雨で赤いよだれかけを張り付かせている石仏が花の陰になっているのも風情。

吉野川で衣を洗っていた女の白いふくらはぎを見て心を動かしたために神通力を失って空から落下したという久米仙人。『今昔物語』で知られる物語の仙人が開いたとも聖徳太子の弟、来目皇子が創建したとも伝える久米寺には多宝塔を囲むようにアジサイが咲く。

蓮

ハスは泥の中から美しい花を咲かせることで仏教とは深く結びついてきた。蓮華文、蓮華坐、蓮華往生など蓮は聖なる花として、文様に仏教彫刻にと技の粋を極めて美術品にもなっている。ハスの名は花托が蜂の巣に似ているところから。仏教で

は仏の台座に見立てる。

唐招提寺とハスのつながりは古く、鑑真和上が青蓮の実を持って来日したことに始まる。以来、数多くの種類のハスが育てられてきた。二千年前の土中から見つかったハスの実を開花させた「大賀蓮」、門外不出という「孫文蓮」、花卉に特徴のある「奈良蓮」など愛蓮家が憧れる品種も多い。

萩

「萩の花 尾花 葛花 撫子 花 女郎花 また 藤袴 朝顔の花」と『万葉集』に歌ったのは山上憶良。秋の七草という源流はこの歌によって生み出されたといわれている。『万葉集』に最も多く歌われている花はハギ。七草の筆頭にあげられ、草冠に秋の文字さえ与えられる。万葉の人々が愛したハギは奈良の古寺や史跡によく似合う。古びた石段や築地塀に沿いながら存分に枝を伸ばし、咲きこぼれる小さな花。あえかな赤紫や白の花が万葉の時代を思わせる。

彼岸花

曼珠沙華とも呼ばれるが、これは天上に咲く架空の花という意味がある。日照りで厳しい暑さの夏も冷夏の時も決まってお彼岸の頃に咲く。毒

を含むという根には澱粉が多く、飢饉の時にはすりおろし、何度も晒して食用にしたという。鮮やかな赤い色は飢えという恐怖に備える切ない色。田を縁取つて守るかのように咲くヒガンバナは代々田を耕してきた祖霊が魂を燃やし、実りを前にした大切な時期に邪を払おうとしての赤い色だろうか。

明日香村や葛城古道のヒガンバナは歴史の深さだけ赤く燃える。

コスモス

メキシコ原産のコスモスはコロンブスによつてスペインへ持ち帰られ、マドリッドの植物園長によつて命名されたという。ギリシア語で秩序、美、調和などの意味がある。日本へは明治時代に伝えられている。日本の風土にも合うのか各地に根を下ろし、花を咲かせる。風土だけでなく心にも添うのか「秋桜」という名まで与えられた。新しい花は歴史が刻まれた大和の風景にもしっくりとなじむ。

四季折々、花の絶えない般若寺だが、最も有名なのがコスモス。三十三観音の石仏に寄り添う花は愛らしい。

菊

キクは桜と共に日本人の心を捉えてきた花。奈良時代に中国から伝えられた花は宮廷園芸として栽培され、一般的になったのは江戸時代に入ってから。品評会や菊人形が作られるほど盛んになったのは江戸後期のこと。

キクは長寿を保つ霊力があると信じられ、重陽の節句（九月九日）には前日から花に綿を被せ、その香りや露を移し採った「菊の被せ綿」で体を拭き、長寿を願った。花びらを浮かせた菊酒、菊なますなど目福、口福を満たしてくれる。

紅葉

赤、緋、朱、茜、紅など全ての「あか」と呼ばれる色を惜しみなく使つて染め上げて見せる紅葉。鹿の鳴き声が響く奈良公園、少し足を伸ばせば「奥山の紅葉踏み分け鳴く鹿の声きく時ぞ秋はかなしき」と猿丸太夫が歌ったそのままの風景に出会う。錦の里として知られる正暦寺は清酒が最初に造られ、天下の名酒として世を風靡した。紅葉がこれほど境内にあるのは酒を紅葉を焚いて温めたという古詩にちなんだ楽しんでいた名残だろうか。

薄

ススキにはうらさびしい、荒涼とした印象があるが、曾爾高原のススキは圧倒的な力で迫ってくる。高原一面に茂るススキは豪快な美しさにあふれる。風が吹くと銀の波となつて揺れ、風の通り道が見える。光線の具合や時間によって灰色、銀色、金色と自在に姿を変えるススキ野の幻想的な風景。背の丈以上に伸び、まるでススキの林を歩く感じがする。

山茶花

サザンカは日本原産で四国、九州南部以南に自生していた。名前の由来は茶の木に似ているところから「山茶花」と表記され、その読みサンサカがサザンカに転訛したとも間違つて茶山花と書いて、そのままササンカと読んだとの説がある。いずれにしても、万葉の主舞台である大和盆地には自生していなかったため、『万葉集』に歌われることはなかった。室町時代から園芸種として育てられるようになったというが、花の少ない季節に白やピンク、赤い色で咲くサザンカは愛おしい。

梅

万葉時代、花といえば梅を指すほど愛されている

たという。桓武天皇が平安遷都した時、紫宸殿の前庭には右に橘、左には梅が植えられていた。百八十年ほど後、内裏が炎上して梅の木も焼けてしまい、再建に桜が植えられてから梅は左近の座を譲った。時代によって好みが変わった例であろう。

梅はもろもろの花にさきがけて咲き、花の兄や春告げ草、薫り高いことから句草、香栄草などと呼ばれる。好文木という呼び名もあるが、これは晋の武帝の「文を好めばすなはち開き、学を廃すればすなはち開けず」という故事からの名付けという。

梅の実を目的とする梅林は規模が大きく見ごたえもあるが、色と姿の変化が乏しい。大和文華館庭園の梅は観賞が目的なので彩りが豊かで木の姿も美しい。

福寿草

旧暦の元旦頃に花が咲くところから「ガンジツソウ」の別名もある福寿草。いずれにしても縁起のいい名前がつけられたのは、寒さの厳しい頃、雪の中でも可愛らしい黄色の花をのぞかせるからだろうか。

五條市西吉野、丹生川に沿う津越あたりの山

間の斜面にはフクジュソウの自生地がある。このあたりが自生地としての南限。正暦寺にある客殿、福寿院への道筋には名前になんでフクジュソウが植えられ、冬を彩る。

椿

「巨勢山のつらつら椿つらつらに見つつ偲はな巨勢の春野を」(巻一 五四)と『万葉集』で椿といえばまずこの歌が思い浮かぶ。繰り返す言葉のリズムには神霊のこもる木へ言霊を吹き込んでいく。椿は古くから霊力のある木として『古事記』にも登場する。つやつやと光る常緑の葉、藪椿の素朴な赤は古代人にとっては大切な木。その実からは良質の油、樹木の灰汁は染織の際、媒染剤として重用された。巨勢山のあたり(御所市古瀬)では今も椿が多い。

奈良には椿の名所があるが、中でも東大寺開山堂に咲く紅色に白い絞りを入れた大輪の「糊こぼし」、白毫寺の一本の木にさまざまな花を咲かせる「五色椿」、伝香寺の一枚ずつ花びらを散らす「散り椿」は大和三名椿として知られている。東大寺二月堂のお水取りで造られる椿の造花は「糊こぼし」を形作ったもの。「散り椿」は武家が首を落とすと椿を嫌う中、花びらを散らすところ

から「武士椿」とも呼ばれる。

馬酔木

馬が酔う木と書いてアセビ。かつてはこの葉を刻んで殺虫剤にしたほどの毒性がある。馬が食べると苦しんで酔っ払っているように見えるところからの名付けという。奈良公園を住处とする鹿はちゃんと知っていてこの葉は食べない。それが奈良公園にアセビが多い理由。早春にスズランに似た愛らしい白い小さな花を咲かせ、どこに毒をふくめるのかと思うほど可憐。公園のどこでも見かけるが「ささやきの小径」と呼ばれる春日大社参道と高畑を結ぶ森にはアセビが枝を差し交わして道を包む。